

# 女性史研究

特集・古代の女たち



第5集

編集・家族史研究会

## も く じ

### —— 特集・古代の女たち ——

女さまざま .....	半田たつ子	1
ローマにおける一夫一妻婚の成立 .....	中山 そみ	2
ウェスターマーク年譜 .....	山崎貴美子	26
『源氏物語』の女たち .....	緒方 和子	29
木簡にあらわれた女性たち .....	宮川 伴子	56
晶子・その多面性 .....	橘 宏子	72
女の意識 .....	南 則子	73
細川ガラシア夫人 .....	緒方 都	74
高群逸枝さんの思い出 .....	松下 シマ	75
空間と時間の旅 .....	西川 祐子	77
『智入考』をめぐって .....	辻 照子	78
葦の会 .....	太田 満恵	81
『むしろ女人の性を礼拝せよ』をよむ .....	九 谷子	83
類別制親族名称体系の起源について(上) .....	訳・卯野木盈二	84
母たち(その4) .....	訳・石原 通子	87

# 女さまざま

—— 初秋の一日に拾う ——

半田 たつ子

初秋のある日、福井に小さい旅をした。佐々木小次郎の故事で名高い一乗谷にある、朝倉氏の遺跡を案内していただいたのは朝だった。

門が一つ建っていたものの、遺跡の上には一米から三米に及ぶ土砂が積もっていた。五百年の間、遺跡はひっそりと土の中に眠っていた。人々はその上に役場を建て、田んぼを作り、山すそは、杉の木や草が繁るにまかせていた。

発掘が進むにつれ、館跡をそっくり伝える礎石や、みごとな石づくりの庭園、立派な道路、学問的にも貴重な石垣などが次々に現れ出たのだ。その時の驚きを思うと、私は感動で棒立ちになった。

足羽川の上流、堅固な山のふところ、格好な地の利を得て、ここをねじろとした戦国の武将の知恵を思った。

夫人の館跡には萩の花がいつばいに咲きこぼれていた。素人目にも完成された美しさと思う庭園で、政略結婚の具としか扱われなかった当時の女性の、生きがいは何だったのかと思った。

同じ日の昼、いま津村節子氏が『婦人公論』に執筆中

の「遅咲きの梅」かなのモデル、吉川路江さんに会った。私が勝手にふくらませてきたかな観を語ると、路江さんは「私はかなほど忍耐強い女性ではありません」と打ち消した。でも路江さんは、双子を含む四人の子を育てながら、お姑さんと小さないさをくり返しつつ、物置小屋を眼鏡枠の工場にし、幻の織物といわれた石田縞を復活し、婦人会の会長もやる、たくましい女性であった。夕方、福井を発った。名古屋の新幹線ホームには、少女たちが群がり、警官が出ていた。「ひかり」に乗ると、「狩人」の兄弟が私の二つ前の席に座った。騒ぎのもとには彼らだった。一人の少女が、泣き顔で「乗つてきちゃった、東京まで行く、デッキにいるね」と言った。ドアがあくたびに、少女は熱いまなざしを送る。

東京駅に滑り込めば、ここにもキヤーツという少女たちの群集が待ち構えていた。

女さまざましてを考えさせられた一日だった。かりそめの興奮に身をこがす少女たち……。私たちは、彼女たちにとのようには手をさしのべるべきなのか？

# ローマにおける一夫一妻婚の成立

——ウェスターマーク原始一夫一妻婚をめぐって——

中山 そみ

## 〔一〕

古典古代に、高度な文化を花開かせたローマ人は、建国当時から厳格な父権的一夫一妻婚をおこなったといわれている。

だが、ローマ人の婚姻が、(1) 果して建国当初から一夫一妻婚であったのか。(2) 建国以前はどうか。(3) 未開時代——「集団婚と対偶婚」、文明——「一夫一妻婚」という家族の発展段階説を唱える学説と対立するかどうかを考えることによって、家族史をめぐる論争の一端をたしかめてみたいというのが、こゝでのさゝやかなこゝろみである。

学習研究社から出版されている『改訂家庭経営の研究——教授資料』のなかには、「結婚の類型と婚姻史をめぐる論争」<sup>〔1〕</sup>が紹介されている。それを要約するとつぎのとおりである。

婚姻の類型は、千差万別な結婚の様式を分類整理することである程度可能であり、社会の婚姻の制度に規定されることが多い。それは何を基準にするかによって、さまざまな分類が考えられるが、主な基準によると、(1) 配偶者選択による——購買婚、掠奪婚、駈け落婚、相統婚、養子婚など。(2) 結婚にさいしての交換による——奉仕婚、交換婚など。(3) 婚舎の位置による——新居婚、父居婚、母居婚、母居——父居婚。(柳田国男が日本人の婚姻形態

として指摘した婿入婚は母居——父居婚、嫁入婚は父居婚に包括される。その他、かつて日本の特定地域において、足入れ婚、タル入れ婚、妻問婚などが行なわれていた。(4) 配偶者の数による——複婚(一夫多妻婚、多夫一妻婚、集団婚)、単婚(一夫一妻婚) (5) 権威の所在による——父権的、母権的、平等的である。

このうち、(4)と(5)にあげられた分類が人類の婚姻史研究、家族史研究における二学説の論争的であり、現在ほとんどの民族がもっている一夫一妻婚が人類の本原的形態であるかどうかをめぐる論争である。

モルガンやエンゲルスによつて主張された家族進化説の特徴は、人類の原始の未開社会から階級社会への発展のプロセスのなかで、一夫一妻婚が集団婚、複婚をへてどのように創出されてきたかを、生産力の発展との関連において解明するとともに、一夫一妻婚の形成が私的所有の生成と深くかゝわっているとするのである。

このように『教授資料』では、婚姻形態の発展図式が示されて、「このような一夫一妻婚から直ちに平等な一組の男女が愛情によつて結ばれる一夫一妻婚へと発展するには、生産手段の私的所有が除去され、今なお配偶者の選択にきわめて強い影響をおよぼしている経済的基盤を必要ならしめたとき可能となろう」とのべている。

これに対して、ウェスターマーク、マリノウスキーなどの社会人類学者などによつて代表される学説の特徴について、「人類は原始・未開の時代においても単婚が成立しており、たとえ複婚が存在しても、それは社会的経済条件がそれを許す状態にあつたのであり、決して複婚の原理に基づいていたものではない」とされている。

さらにまた、家族進化主義の立場をとる側からの批判、すなわち「たとえば、核家族が未開民族に現存しているとしても、その未開民族の多くは強大な民族に迫られた劣弱民族であつて、必らずしも昔から彼らが核家族形態をいとなんでいることにはならない。なぜならば、彼らは自然条件や経済条件に規定されて生活様式や集団の大きさを決定されたことが多かったからである」とのべて、両者の対立点を指摘している。

そして「そのどちらも全面的に肯定する確実な資料がないのが現状である」として、一応慎重な学問的態度を示している。しかし、『教授資料』が「一般にはモルガン、エンゲルス説に批判的傾向が強い」と結論づけているように、

単元「結婚」のはじめには、スティブンスの「結婚概念」やウェスターマークによる「結婚の定義」、すなわち、「一人ないし数人の男子と一人ないし数人の婦人からなり、慣習ないし法により是認され、その結合、その結合の両当事者やその結合から生まれた子供について一定の権利義務を包括している関係」がのべられているのであつて、反進化主義説を全面的に受け入れているように見うけられる。

進化主義学説については、「集団婚が存在した事実を検証し、史的唯物論的視点に立ち、婚姻史から社会発展の法則を導いたことに大きな功績がある」<sup>③</sup>と評価しているにもかゝらず、原初からの婚姻の存在、すなわち原始一夫一妻婚説を採用している。しかし、はつきりしたその根拠は示されてはいない。それで、モルガンやエンゲルスによる学説について、いま一度ふりかえつてみたいという意欲をことさらにかきたてられるのである。

(1) 『改訂家庭経営の研究——教授資料』一九七七年刊（以下『教授資料』と略称する）、二八頁

② 同右、二九頁。モノガミーが単婚と訳されているが、わたしは一夫一妻婚という訳語をもちいる。複婚はポリガミーの訳であるが、夫か妻かのどちらかが複数である。したがって、一夫多妻婚と多夫一妻婚を総括したものである。

③ 同右、三〇頁

## (二)

ウェスターマークが反進化主義的立場にたつて、原始一夫一妻婚説を提唱した根拠は何かを先づ考えなければならぬ。

以下は、ウェスターマークの『婚姻小史』<sup>①</sup>の第一章「婚姻の起源」によつてのべる。

ウェスターマークが、婚姻を社会制度として定義づけているのは、『教授資料』に引用されているとおりであるが、それによつて生じる権利義務のうち、諸民族に共通のものとして二つの要素をのべている。その一つは、「婚姻はつねに性交の権利をふくむ」ものであり、「たがいに相手の欲求を或程度まで満足させることを夫妻の義務とみなす」

のである。同時に婚姻では、「可能で必要なぎり夫がその妻と子供たちを扶養することは夫の義務であるが、妻子が彼のために働くことは妻子の義務である。一般に夫は妻子にある種の権力をもっていた」<sup>②</sup>というのであって、云いかえれば、二つめの要素は、夫と妻との間は扶養者（権力をもつ）と被扶養者という関係である。

ウェスターマークのいう一夫一妻婚は、右のような二つの要素を含んでいて、「原始時代においても、一人の男が一人の女（あるいは数人の女）と同居し、たがいに性関係をもち、その子供を共同で育て、男がその家族の保護者、扶養者であり、女は彼の協力者であつて、彼らの子供の看護者であるということが習慣であつたと信ずる理由をわれわれはもっている。この習慣が慣習によつて、のちには法律によつて裏打ちされたが、この習慣はこうして、一社会制度となつた」<sup>③</sup>としている。このような婚姻制度は、「原始期からの習慣から発達したもの」と信じているのであつて、その根拠について次のようにのべている。

動物界の多くの種類のなかには、類似の習慣、つまり人間と共通の家族生活を営んでいるのであつて、とくに、「鳥類においては雄と雌は単に生殖期だけでなく、その後も同居しており、父も母もの親の本能は高度に強まっている」のであり、「大多數の鳥類は……一番<sup>つがい</sup>になつたときには、相手のどちらか死ぬまで番である。……『真に純粹な婚姻はたゞ鳥類でだけ見出しうる』」<sup>④</sup>という動物学者ブレイム博士の論述をうけ入れて、人類の生物学的側面からの考察が深められている。

哺乳動物の大多數において性の関係は交尾期に限られるが、類人猿（ゴリラやチンパンジー）が「交尾期のみならず仔の出産の後でも一緒にいる」のはなぜかといえ、<sup>⑤</sup>「自然淘汰の過程をとうして獲得された本能によるもので、『本能は次の世代をうみ、それによつて種を保持する』」のである。

人類および類人猿の場合、家族生活を営むという共通の習慣は、共通の起源、「男女間の持続的な結合」、「男が女および女との間にもうけた子供にたいしてとる監護」<sup>⑥</sup>は人類保持に必要な共通の本能に負うものである。さらにオーストラリア原住民にみられるような社会組織は、諸家族が互いに友好的な関係を保ち、大小の集団として居住す



るもので、世界のさまざまな未開人のもとでは、親子からなる家族が明瞭なる単位をつくっている。大きな集団も食物を求めるために相当の期間だけ別れている場合さえある。彼らは自然的環境への直接的依存から、新しい生計方法を漸次に発見し、自からを解放してきた。それにもかゝらず、今日なおきわめて多くの未開民族において、家族の生存に必要な食物のために別々にわかれ、相互間の保護を断念するのは、夫婦間や親子間の監護をふくむ家族が、原始人にとつてもチンパンジーやゴリラ程度に不可欠であつたと信じる。原始人たちが、現在の未開人よりも一層持続的な群居生活をしていたと考えるのは合理的ではないとすることによつて、家族は類人猿やヒト科が漸次それから発展したところの原種からうけつがれたものと考えた。ウエスターマークは、単にチンパンジーやゴリラの習性によるだけでなく、さまざまな要因に基づいている仮説であることを強調している。

それでウエスターマークは、プロミスキティ（乱婚）で生活したといわれる諸民族の一さいの事例を詳しく検討して、それらはでたらめな報告であるとしている。

その理由は、性的放縱、頻繁な離別、一妻多夫婦、集団婚またはそれに類似したもの、または婚姻儀式の欠如、結婚するという語の欠如、われわれじしんの結婚結合に類似した婚姻結合の欠如が乱婚と混同されているというのである、「このような状態で現在生活しており、あるいはさいきんまで生活していた野蛮人はいられていないということ、まったく明白である」としている。

なお、モルガン、マクレナン、ラボックに反対しては、ダーウィンの『人間の由来』<sup>⑧</sup>にもとづいて、「競争相手とたゞかうために特殊な武器で武装した四足獣のすべての雄、その多くがそうであるように、雄の嫉妬についてわれわれが知っていることから、ダーウィンは乱婚的な交渉が自然状態においておこなわれていたことは、全くありそうもない」<sup>⑨</sup>と指摘しているのであり、類人猿でも、現存の人種でも、雄——男の嫉妬心が広くゆきわたっていることは、人類の初期にも普ねく存在した証拠である。つまり、男性の嫉妬心が乱婚をゆるさないとされている。

しかし、乱婚の証拠として出された諸事実が人類のある発展段階で、一般的であつたと証明するのならば、嫉妬心



がその障害にならないことを認めないわけにはいかないとあてている。

このようにウエスターマークによつて注目され批判されたモルガンの乱婚は、『古代社会』一八七七年刊のなかで「乱婚的交婚」または「乱婚」としてくわしくのべられている。モルガンは生活手段の生産における進歩に対応して、家族および婚姻の進化の順列を示しているが、「一部分は仮説的」としている。以下はモルガンによる「婚姻の進化の順列」<sup>10)</sup>である。

#### 順列の第一段階

1. 乱婚的な交婚
2. 一集団のなかでの直系および傍系の兄弟姉妹の交婚。つぎのものをうみだす
3. 血族結婚（家族の第一段階）。つぎのものをうみだす
4. マライ式の血族および姻族の名称体系。順列の第二段階
5. 性にもとづく組織。兄弟たちと姉妹たちの交婚を阻止しようとするブナルア慣習。つぎのものをうみだす
6. ブナルア家族（家族の第二段階）。つぎのものをうみだす
7. 兄弟たちと姉妹たちを結婚から排除した氏族組織。つぎのものをうみだす
8. トゥラン式およびガノワン式の血族および姻族の名称体系。

#### 順列の第三段階

9. 人類の一部分を未開の下段階に発展させる氏族組織の増大と生活の諸技術の改善。つぎのものをうみだす
10. 排他的な同棲をとともなわない一対のあいだの婚姻。つぎのものをうみだす
11. 対偶家族（家族の第三段階）

#### 順列の第四段階

12. かぎられた諸地域における諸平原での牧畜生活。つぎのものをうみだす

13. 家父長的家族（家族の第四の、だが通常でない段階）

順列の第五段階

14. 富の発生と財産の直系による相続の設定。つぎのものをうみだす

15. 一夫一妻婚家族（家族の第五段階）。つぎのものをうみだす。

16. アーリア式、セム式、ウラル式の血族と姻族の名称体系、トゥラン式を消滅させた。

以上のうちからウェスターマークに関連しているモルガンの乱婚的な交婚、すなわち乱婚について見よう。

「野蛮の想像しうる限りの最低段階をあらわしている——これは尺度の底をしめしている。この状態にある人間は、自分をとりまいてゐる物云わぬ動物から殆んど區別することができなかった。婚姻をしらず、おそらく群をなして生活してゐて、人間の野蛮人であつたばかりでなく、貧弱な知力と微弱な道德意識をもつていた。……この見解の確証として……頭蓋容積の減少と動物的性質の増大していることは、原始人の必然的劣等性についてのいくらかの証拠を供する。この人類のもつとも初期の典型に達することが可能であるとすると、現在地上に住んでいる最低の野蛮人よりもはるかに下方にさかのぼらねばならない。粗末な燧石器が地表の各所に発見されるが、現存の野蛮人によつては使用されてはいない。そしてこれは人類がその原棲地から出現し、漁夫として大陸の諸地域に広がりはじめてから後の人間の極端な蒙昧な状態を示している。乱婚が推測されるのは、この原始的な野蛮人についてであり、この野蛮人についてだけである」<sup>10</sup>

このようにモルガンはのべている。これは前にのべたウェスターマークの原始一夫一妻婚説と直接に対立している箇所である。

モルガンは、血族および姻族の名称体系の研究から血族婚（親と子を相互の性交から排除するⅡ第一の進歩）とプナルア婚（兄弟姉妹の婚姻を排除するⅡ第二の進歩）を復元したが、こゝから更に下段（第一の進歩の前段として）の乱婚を想定することにより、婚姻の継次的発展段階を設定した。

- (1) ウェスターマーク『婚姻小史』一九二六年刊を底本とする江守五夫氏による訳本は、『人類婚姻史』と題されている。
- (2) 江守訳『人類婚姻史』、八頁（なおこゝでの訳文は底本によつてあらためられている）。『婚姻小史』一一二頁
- (3) 江守訳『人類婚姻史』九頁。『婚姻小史』二一三頁
- (4) 江守訳『人類婚姻史』一〇頁。『婚姻小史』三頁
- (5) 江守訳『人類婚姻史』一一頁。『婚姻小史』四一五頁
- (6) 江守訳『人類婚姻史』二七頁。『婚姻小史』二五頁
- (7) 江守訳『人類婚姻史』一三頁。『婚姻小史』七一八頁。なお、ウェスターマークがつかっているプロミスシティは「乱交制」と訳されているが、こゝでは「乱婚」と訳した。
- (8) ウェスターマークによるダーウインからの引用は、池田次郎・伊谷純一郎共訳『人間の由来』中央公論社、五二七頁によまれる。『人間の由来』における乱婚否定については、布村一夫『家族の起源をめぐって』、『歴史評論』一九七〇年九月をみよ。
- (9) 江守訳『人類婚姻史』二二頁。『婚姻小史』一八頁
- (10) L・H・モルガン『古代社会』一八七七年刊、ホルト版を底本とする青山道夫訳『古代社会』、下巻、三一九頁―三二〇頁。ホルト版、四九八頁―四九九頁
- (11) 青山訳『古代社会』下巻、三二二頁―三三二頁。ホルト版、五〇〇頁

### (三)

モルガンによる前述の順列から、同世代のうち、兄弟姉妹どうしの交婚を禁じるブナルア婚のなかには、主たる夫、主たる妻による対偶婚が芽ばえ生み出される。そしてさらに対偶家族のなかに一夫一妻婚の萌芽が認められ「この家族はいくつかの本質的な点では一夫一妻婚の下位にあった」とされている。そしてこのようないくつかの対偶家族は「一般には共同世帯を構成する一家屋に見出され、そこでは、生活共産主義の原則が実行されていた。このようないくつかの家族が一つの共同世帯に結合している事実、それだけで、この家族が単独で生活の困難に直面するにはあ

まりにも弱い組織であつたことを認めるものである」が、それにもかゝらず、それは「一對の間の婚姻に基礎をおき、一夫一妻婚家族のいくつかの特徴をもつていた。女はいまやその夫の主要な妻以上のものであつた」し、「彼女は彼の伴侶であり、彼の食物を支度するものであり、またようやく彼がいくらかの確信をもつて彼じしんの子どもたちであると思ひはじめた子供たちの母であつた。彼らが共同で監護した子供たちの出生は、その結合を強固にし、また恒久化するのに役立つたのである。」<sup>1)</sup>

婚姻のとりきめについては、「母のきめるかゝる契約に黙従するのが当事者たちの義務で、これを拒否することはめつたになつた。婚姻に先立つて、花よめの親等のもつとも近い氏族的親族者たちに対して購買的贈与の性質を帯びる賜りものをするのがこれらの結婚行為の一特徴となつた。しかし、この関係は当事者の気のむく間だけつゞいた」<sup>2)</sup>とのべて、これが対偶家族として區別される理由であるとしている。このような夫と妻による自由でゆるやかな結合について、「女はその夫と別れて他の夫をうけいれる同等の権利を享有したが、ここでは彼女の部族や氏族の慣行が害されることはなかつた」<sup>3)</sup>とのべている。しかし、「このような離別に反対する公的感情がしだいに形成される」にいたつて「それぞれの氏族的親族者たちが当事者たちの和解を試みた」のであり、「障害を取り除くことができなかつたならば、夫妻の離別が容認された」。そして「妻は彼らの子供のうちもつばら彼女じしんの子とみなされる子供たちをつれ、そしてまた夫がそれに対し何らの権利を有しない彼女の個人的な所持品をもつて、夫の家を去つた」<sup>4)</sup>あるいはまた「妻の親族者たちが共同世帯で優位を占めているところでは、通常はそうであるが、夫が家を去つた」<sup>5)</sup>とのべている。このように「婚姻関係の継続は当事者たちの選択の自由にゆだねられた」のである。

以上は、イロクォイ族の部族や他の多くのインディアン部族のなかでの対偶家族についての記述であるが、ローマでは、この段階に位置づけられる婚姻、家族はいったいどの時代に存在したのであるうか。

ローマでの、対偶婚からうみ出される一夫一妻婚の成立について、直接に関連する事項を前述の「婚姻進化の順列」によつて見るとつぎのとおりである。

「アーリアおよびセムの民族を未開時代から、文明時代へもたらした力であった」のは財産であるが、その「財産をその所有者の子供に相続させることが確立されとともに、厳格な一夫一妻婚家族の可能性がはじめて生じた。緩慢ではあるがしだいに、排他的同棲をとまなうこの婚姻形態が、例外というよりむしろ規則になってきた」<sup>⑤</sup>とされている。皮肉にも、人間の先天的な残忍性による奴隷制度によって生みだされる財産が、その私的所有によって厳格な一夫一妻婚を生み出すのである。

① 青山訳『古代社会』、下巻、二五七頁。ホルト版、四五三―四五四頁

② 同右、下巻、二五八頁。ホルト版、四五四頁

③ 同右、下巻、二五八頁。ホルト版、四五四頁

④ 同右、下巻、二五八頁―二五九頁。ホルト版、四五四―四五五頁

⑤ 同右、下巻、三二七頁。ホルト版、五〇五頁

#### (四)

エンゲルスは、その『家・私有財産および国家の起源』のなかで「一九世紀の六十年代初頭までは、家族の歴史などは問題にもなりえない」<sup>①</sup>し、「家族史の研究は一八六一年、バッハオーフェンの『母権論』の刊行をもってはじまる」<sup>②</sup>とのべている。バッハオーフェンを受け入れたモルガン、そのモルガンの『古代社会』によりながらさらに発展させたエンゲルスであるが、みづからも『母権論』を十分により、主として文明以前の婚姻記述のなかで理論づけている。

そのエンゲルスはモルガンのために、無規律性交（モルガンのいう乱婚にあたる）がおこなわれた「原始的社会段階は、それが実際に存在したとしても、はるか遠い過去の時期に属する」<sup>③</sup>のであって、「直接の証拠としての社会的化石」は実在の野蛮人には見出せないとのべている。ちなみに、バッハオーフェンの発見にたいして「いたるところ

るで神祕化されているのは、歴史的に成立した男女関係が、その源泉を人間の現実の生活関係のうちにもつのではなく、宗教的觀念のうちにもつのだという彼の妄想による」<sup>③</sup>ものとしながらも、バツハオーフェンの功績は、これまでのおさなりのものから「この問題の研究を前面にすえた点にこそある」のだとたゞえている。つまり、バツハオーフェンの『母権論』は、ヘテリスムスという用語に問題があるにしても、真に科学的な家族史研究の出発点として彼の多くを受け入れている。とくに、母権から父権への移行についての記述はまさに啓示である。

さて、こゝでは、一夫一妻婚がどのように説明されているかをのべよう。

一夫一妻婚は「未開の中段階と上位段階との境の時代に、対偶婚から発生する」のである。それは「文明の開始を表わす標式の一つ」であつて「父性に争う余地のない子をつくるという明確な目的をもつて夫の支配の上に築かれているが、そうした父性が要求されるのは、他日これらの子が肉親の相続人として父の財産を継承することになるからだ」<sup>④</sup>と一夫一妻婚のばあいの財産相続と父系的性格をのべている。

また、対偶婚のあとに位置づけられる一夫一妻婚の特徴を、対偶婚との相違点として次のようにのべている。

「対偶婚から区別するものは、婚姻紐帯のいつその強固さであり、いまではこの紐帯もはや双方の意のまゝに解消できない。いまでは原則として夫だけがそれを解消して妻を追ひ出すことができる。いまでもなお、夫には不義の権利が、すくなくとも慣習によつて保証されており、社会的発展が進むにつれて、それはますますさかに行使される。妻が昔の性的慣行を思い出して、それを復活させようとするれば彼女は以前のどの時期よりも厳格に罰せられる」<sup>⑤</sup>のである。

ちなみに、一夫一妻婚に先行する未開期の対偶婚は、一人の夫と一人の妻によるいつでも解消できるゆるい結合である。

このような、エンゲルスによる一夫一妻婚は「全体として人類発展の三つの主要段階に照応する三つの主要形態」(「野蛮——集團婚」「未開——対偶婚」「文明——一夫一妻婚」)のなかで、文明とともに成立するものであり、

「姦通と売春によつて補足される」<sup>⑥</sup>性格をもつのである。

しかし、以上の説明は、世界史を一元的に大づかみに概括したもので、エンゲルスは、序文のなかで次のように述べている。

「モルガンの偉大な功績は、われわれの書かれた歴史のこのような先史的基礎を大綱において発見し復元し、最古のギリシヤ・ローマ、ドイツの歴史の、もつとも重要ではあるが、これまで解けなかつた謎を解きあかす鍵を北アメリカのインディアンの血縁集団のうちに見出したことである」<sup>⑦</sup>とのべている。このモルガンの画期的な功績に依拠して、さらに「ギリシヤとローマに関する歴史的な諸章では、モルガンの典拠だけにとどめないで、利用できるものをつけ加えた」<sup>⑧</sup>としている。しかしローマの婚姻についての記述はひじょうに少ない。

『家族、私有財産および国家の起源』のなかで、ローマの家族として最初に登場するのは、家父長的家族である。この家族形態は、「集団婚から発生する母権制家族と近代世界の個別家族との間の過渡的段階」<sup>⑨</sup>をなすものであり、母権的対偶婚から父権的な一夫一妻婚への移行形態として述べられている。

「男性の独裁の第一の結果は、この時期に姿を現わす家父長的家族という中間形態にしめされる。その主な特徴をなすものは、後述の一夫一妻婚ではなくて、『多数の自由人と非自由人とを家長の家父権力のもとに一族に組織することである。セム人の形態では、この家長は一夫多妻の生活をおくり、非自由人は一人の妻と子を持ち、そしてこの全組織の目的は区分された領域で畜群の世話をすることである』。本質的な点は非自由人の包摂と家父権力であり、したがって、この家族形態の完成した型はローマの家族である。familia（家族）という言葉は、本来は、感傷と家庭不和から構成された今日の俗物の理想を意味するのではない。ローマ人の間では、それは当初決して夫婦とその子供をさすのではなくて奴隷だけを指す。famulus は家内奴隷のことであり、familia は一人の男に属する奴隷の総体のことである。ガイウスの時代〔紀元二世紀〕familia id est, patrimonium（「ファミリー」すなわち相続分）は遺言によつて遺贈されていた。この表現は、ローマ人が一つの新しい社会的な有機体を表出するために発明したも



のであつて、この有機体の長は、妻子と多数の奴隷をローマ的家父権力のもとに従え、全員にたいする生殺与奪の権利をもつていた」<sup>10</sup>

ファミリアという言葉は、「ラテン諸部族の鉄甲がための家族制度よりも古いものではない」し、その家族制度は、「畑地農作と合法化された奴隷制とが採用されたのちに……アーリア系イタリア人がギリシヤから分離されたのちに現われた」<sup>11</sup>ものである。

以上はモルガンの『古代社会』を読んだエンゲルスが検討を加えたものであるが、こうした家父長的家族、または「変ようした形の家父長的家共同体」について、彼はさらにM・コヴァレフスキー（『家族と財産等々の概要』一八九〇年）を読み、旧世界の文化諸部族（アーリア人とセム人）について証明されているようだとのべて、その生きた実例として南スラブ人のザードルガをあげている。

そこではすでに父系の出自がみられ、「一人の父の数世代にわたる子孫と彼らの妻とを包含した」家共同体で「彼らはみな一軒の屋敷に一緒にすみ、その畑地を共同で耕作し、共同の貯蔵によつて衣食をまかない、収穫の余剰を共同で所有する」経済生活を営んでいた。この共同体での家長は最高の管理者であつて、「彼は外部にたいして共同体を代表し、些細な物品を譲渡することができ、会計をつかさどり、会計ならびに規則的な仕事の運営にたいして責任を負う」もので、家長は選挙によつてきめられ、けつして最年長者である必要はなかったし、民主的な社会をなしていた。そこでの女たちとその仕事とは主婦の指揮のもとにあつたが、彼女はふつう共同体の中で選出された家長の妻であり、「娘の婿さがしにも重要な、しばしば決定的な発言権をもつ」<sup>12</sup>。また、こゝでの「最高の権力は、青年の男家家族員全員の会議である家族会議にある」<sup>12</sup>とのべている。

また、ホイスラーによる『ドイツ法の諸制度』をよんで、ドイツ人の場合にも、「いくつかの世代ないし個別家族からなり、このほかに非自由人からなる」家共同体をあげて、「ローマの家族もまたこの型に還元される」<sup>13</sup>とのべている。すなわちこれらの記述は、ローマの史料によつて実証したものではなく、比較法学によつてローマにおける家

族共同体（一夫一妻婚を萌芽としてつみこんでいる）を復元したものである。

しかし、エンゲルスは共同の土地所有と共同の耕作をとまう「家父長的家共同体」が旧世界の文化諸民族やその他の多くの民族において母権的家族と個別家族との重要な過渡的役割をもつことについて確信をもつてのべているのである。それにしてもどのように移行するかの記事はない。

このように、エンゲルスの記述についても一夫一妻婚の成立過程を探る家族共同体はローマの歴史においては実証できていない。この家父長的家族共同体または、家父長的家族がローマ史上に存在不明であるにしても、かつてあったであろうと考えるのも一つの手だてであろう。そのためにも「家父の絶対的権力ならびに彼にたいする他の家族員の無権利状態について強い異論がとねえられている」<sup>13</sup>との記述は、強大な家父権のもとにあつたといわれるローマ建国から数世紀にわたつての家族史の問い直しの必要性を加味していると考えられる。同様にバッハオーフェンによる「ローマの家父権制度は、それがもつ厳格なものによつて克服され除外されなければならなかつたある先行制度を暗示している」<sup>14</sup>の意味は心しなければならぬ。

(1) F・エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』一八九二年刊を定本とする戸原四郎訳本、一四頁

(2) 戸原訳『家族・私有財産・国家の起源』四三頁

(3) 同右、四四頁

(4) 同右、八一頁

(5) 同右、八二頁

(6) 同右、九八頁

(7) 同右、一〇頁

(8) 同右、一一頁

(9) 同右、七七頁

(10) 同右、七六頁

⑪ 同右、七七頁

⑫ 同右、七八頁

⑬ 同右、七九頁

⑭ 井上五郎訳『母權論・序説』「女性史研究」誌、第三集、八頁

## 〔五〕

ローマの歴史は、ロームルス（第一代の王、B・C七五四―七一年）からセルウィウス・トゥリウス（第六代の王）の時代にいたるまで、殆んど寓話と伝説によつていたことは、一般に云われていることである。

しかし、モルガンは或種の諸事實は「歴史時代に継承された諸制度と社会的諸習慣の中に残留したのであって、それは明らかに彼らの既往の状態を例証できる」ものであり、「それらは実際の諸事件の概説的歴史よりもっと重要でもある」<sup>①</sup>として、ローマ氏族の記述を展開している。モルガンは、ローマの建設（B・C七五三年）に参加したイタリヤ諸部族（ラテン人、サベリア人、オスカン人、ウンブリア人、エトルリア人）は建国当時においてすでに、「習慣ではまったく農業的となり、家畜の群を所有し、そして生活技術では大きい進歩を遂げていた。彼らはまた一夫一妻婚家族に達していた」<sup>②</sup>とのべている。

さらにモルガンは、歴史時代の開始に當つて「新しい政治は……立法的处理によつて、有機的系列の上層の諸要素を変更した。だが組織の基礎をなしていた氏族は、自然な成生物であり、主として共通の血統か女系の血統であつた。すなわち、ラテン諸氏族は同一血統であつたが、サビーニ氏族やその他の諸氏族は、エトルリア人をのぞけば、母系出自であつた」<sup>③</sup>としている。

ギリシヤおよびラテンの氏族において、往古の時代に出自が母系であつたか否かは、このさい重要な関心事である。モルガンは「父系への変化は一氏族員の殆んど全部の転換をとまなうのであるから、その変化を達成せしめたと思われる方法が指摘さるべきである。」として、「変化を必要とする十分な動機が、社会の進歩とともに、この出自の形式が発生した状態から当然に起るべきであつたことが示さるべきである。そして最後に、彼らにおいては古代の出自が母系であつたことの実証が提出されねばならない」<sup>④</sup>としている。モルガンはバツハオーフェンの老太なる調査からなる『母権論』一八六一年刊から、リシア人、クリート人、アテネ人、レムノス人、エジプト人、オルコメニア人、ロクリア人、レスボス人、マンティニア人および東部アジア諸民族の間にある女の権威、および女人統治の証拠を引用して、次のようにのべている。

「……太古的形態における氏族の存在を必要とする。これは母と子供たちを同一氏族の内に入れ、また氏族の基礎である共同世帯の構成にあたつては、母の氏族の世帯のなかでの支配権を与えるものであつた。

おそらくは、対偶形態に達していた家族は、もつと初期の状態にぞくしていた結婚制度の諸残存に取りこまれていた。結婚した一対と彼らの子供からなる家族は、血縁の諸家族とともに保護を、当然一つの共同世帯に求め、その共同世帯においては、数人の母とその子供らが同一家族に属し、これらの子供の父といわれるものは他の氏族に属していた。共有地と共同耕作は共同長屋と生活共産主義を導いた」<sup>⑤</sup>

つまり母系によつて「女たちは、彼女自身の氏族が数の上で優勢を占めた大世帯にまもられて、共同の倉庫から供給を受けて、母権と女人統治の現象を作り出した」<sup>⑥</sup>としている。これはバツハオーフェンの功績をみとめたものである。

こうしてモルガンは、ラテン氏族の場合にも、「母系出自が古代に広く行われていたことを支持する推測が存在する」<sup>⑦</sup>とのべている。このような推測をもたらず残存についてはあとでのべよう。

エンゲルスは、「旧世界では家畜の馴致と畜群の飼育がそれまで予想もされなかつた富の源泉を發展させ、まつた

く新しい社会的諸關係をつくり出していた」<sup>8</sup>とし、この富が氏族内の共有から、家族の私的所有に移って、その財産を相続する必要から父系出自に転化することを述べている。ローマの場合は、中間に父系氏族が存在するのである。ラテン部族、およびその他のイタリア諸部族の氏族組織について、モルガンは、ニーブル、ヘルマン、モムゼン、ディオニシウス、ロングおよびその他の人々の研究を読んだとしているが、エンゲルスはそれを受け入れながら、訂正してその解説を加えている。これはローマの氏族に関して権威ある歴史家の中においても、いかに混乱が支配しているかの一例としてのべているのである。

エンゲルスの、氏族における「氏族の内では結婚しない義務」については「一度も成文化されてないが慣習として残っていた……証拠として夫・妻が同じ氏族名をもつものは一つもない」<sup>9</sup>とした族外婚について述べている事項は同様の意味をもっている。

さらに、エンゲルスは、ローマにおける氏族制度の権利、義務のうち、「氏族員相互の相続権は氏族の内にのこされる」をローマ最古の成文法である十二表法（B・C四五一年）と対照して、富の増大と一夫一妻婚とに起因する新しい法規定が、氏族慣習のうちに徐々に浸入していった<sup>10</sup>とみている。氏族員が有していた本源的な平等な相続権は、ローマでは「すでに早期に（建国前）慣行によつて男系親族に制限されていて、第一は子が肉親の相続人として相続し、ついにその子と男系親族とに制限される。十二表法では反対の順序に表れる」<sup>11</sup>としている。

ローマの初期における相続人について、佐藤篤士氏による『古代ローマ法の研究』によれば、「相続分は、古典時代においては被相続人の死亡と同時に成熟者は相続人となり、平等に召喚される。性や年令の差別はおこなわれないと伝えている。この『平等の原理』が古典ローマと同様に古代ローマにも存在したとすれば、アグナトウスの家父長的家族がどう結びつくかということが問題となろう」<sup>12</sup>とされている。

佐藤氏による「相続法のでてくる基盤が原始共産社会の血族集団が崩れ、私有財産觀念が次第に発展することにある」<sup>13</sup>という観点から、社会の発展過程と相続形態とのかゝわりあいについての研究は、ローマの一夫一妻婚の成立に

ついても大いに期待がもてるところである。

エンゲルスは、ローマの初期における女について、次のようにのべている。

「将来の世界征服者として、ギリシヤ人より繊細ではないにしても広い見識をそなえていたローマ人のあいだでは、女はもつと自由で尊敬されていた。ローマ人は、妻にたいする生殺与奪の権によつて貞操が十分に保証されるものと信じていた……。こゝでは妻もまた夫と同様に自由意志で婚姻を解消することができた」<sup>14</sup>とのべている。

離婚の自由については、十二表法によつても明らかに解釈できるように思われる。「ガイウス（一・一一一）『婦女がもしこの方法（*usus*）によつて夫の *manus* に服することを欲しないならば、彼女は毎年三夜連続して夫の家を離れ、この方法によつて各年の使用を中断していたことが十二表法に規定されている」<sup>15</sup>

この法規定については、いろいろと解釈ができるであらう。「古代法律」を著したメーンも「ローマ法典はローマ氏族の現実習慣を言葉に直しただけのことである」<sup>16</sup>とのべているように、女の自由な立場を尊重する気風が、この時代になつても残存しているものと解釈できよう。また契約による婚姻がなされていたともみることができよう。

「*usus* による場合」という記述は、他の場合があることを意味している。本文の解説では、妻が夫の *manus*（家長に依つて行使される権力）に帰入する方式に三種、つまり三つの婚姻形態、「一、ファール共同式帰入。二、共同式帰入。三、*usus*」が挙げられていて、*usus* の場合だけが十二表法に規定されている婚姻形態であることがのべられている。

この三つの婚姻形態についてモルガンは、『クインクチリアン』から引き出して、「これらはすべて一様に、妻を夫の手中にゆだね、そして合法的結婚上の子の出生を結婚の主要目的と認めた」<sup>17</sup>として、共和制下を通じて存続したことを述べている。この婚姻形態はすべて一夫一妻婚であつて、それぞれの形態の結びつき方や、それが何に起因しているのが問題になってくる。

佐藤氏は、ファール共同式帰入は、*pontifex maximus*, *flamens*, *Diales* 十名の証人の面前でファール製パンを

ユピテル神に捧げ、ともに食する行為と説明され、I・モンタネッリも『ローマの歴史』の中で「新夫婦が一つの菓子を食べる儀式によつて結婚が成立する。この形式は貴族の家族で行なわれ、歌と行列を伴なう厳肅な儀式でなければならぬ……。新郎は新婦をだきあげ家の鍵を贈る。それから二人は頭を低くして一本の棒の下をくぐる」<sup>18</sup>とのべている。いづれも宗教的な儀式をともなう信約——契約的結婚であることを示しているのであり、国家の成文法によつて強制されたものではない。

これに類似した婚姻儀式が対偶婚時代に、アメリカの原住民の慣行として存在していたことを、モルガンは、「一人の僧侶が花嫁の……ガウンの一端を花婿の……外套に結びつけた。そして結婚契約は主としてこの儀式において成立した」<sup>19</sup>とクラビヘロの言葉を引用している。対偶婚では、夫と妻との自由な結びつきが、このような宗教的慣行によつて信約とされる道徳的な一面が形づくられたとみられる。やがて財産の私的所有にもとづいて一夫一妻婚を生み出すのであるがこうした慣行は、ローマの建国以前に遠くさかのぼつて、対偶婚の存在を想定しうる証になるのではなからうか。

プルタルコスによる『ロムルス』にはサビニ人の略奪がみられるが、それによると、「セクステイリス月（ローマ古暦で六月）十八日にコンスリア祭が催され、伝説にしたがつて掠奪が敢行される」<sup>20</sup>ことがみられる。

エンゲルスは、「原始史における家族の発展は、両性間の婚姻前共同関係のおこなわれる範囲が、たえず縮少して、最初は近い親族から最後はたんなる姻族までもが排除されつゞけることによつて、ついにいかなる種類の集団婚も実際上不可能となり、最終的には、結びつきのルーズな一組の夫妻が残ることになる」が、集団婚形態ではありえなかった女の稀少によつて「対偶婚以来女の略奪と購買がはじまる。はるか深部で生じた変更を示す広範な徴候である。」<sup>21</sup>とのべている。

ウェスターマークも、これを掠奪婚としてとらえ、世界各地の民俗慣行を列挙しているが古代ローマの場合は伝説としてあげている。略奪については、いろいろの解釈がされているが、プルタルコスが物語るその描写は、自由意志



による結婚の道がなかったために、やむをえずとられた処置であつて、「彼女たちを異常に尊敬した」としている。

こうした母権的な残存として、いま一つローマのサトゥルナリア祭をみなければならぬ。この祭りでの、自由民はもちろん、奴隷たちにもあたえられる性の解放について、エンゲルスは、「かつて一氏族の女たちが他の氏族の男たちすべてを共同の夫にもち、またその逆も行なわれていた時代の、おぼろげな記憶をこれらの祭で保存……昔の自由な性交を短期間だけ再現させる」<sup>(22)</sup> 集団婚の遺制としてみたのであつて、これは、ウェスターマーク『人類婚姻史』一八九一年刊の、「原人が他の動物と共通にもっている交尾期の遺物」という見解に対する批判である。

なお、ユ・イ・セミョーノフは、『人類社会の形成』のなかで、古代ローマをふくめて、この種の世界各地の民俗慣行——オルギー乱婚祭の出現は、「性Ⅱ生産タブーの発展に由来する不可避の合法則的結果」<sup>(23)</sup> とし、そうした民族学的なデーターを引用して、「人類の家族婚姻関係の発展における端初的契機が乱婚であつた」<sup>(24)</sup> とのべている。

このようにセミョーノフは、エンゲルスの部分的誤びゆうをこえて、「ハレムのような形態の性関係の生物的组织の解体とともに、群内の性関係は、未組織・無規律的性格をおびるようになった。原始人群の出現は、乱婚の出現であつた。パッハオーフェンがはじめて明確に定式化し、モルガンとエンゲルスが発展させた命題、乱婚は人類の性関係の発展において、原初的かつ普遍的な段階であるという命題は今日ソ連の学者もひとしく容認しているが、全く正しい」<sup>(25)</sup> としている。

このようにしてみれば、ローマ民族もかつてそうした段階をたどってきたことになるが、各段階をへて一夫一妻婚が成立する過程ははつきりしない。

(1) 青山訳『古代社会』下巻、一五一―一六頁。ホルト版、二七九頁

(2) 同右、下巻、一五頁。ホルト版二七九頁

(3) 同右、下巻 一六頁。ホルト版二七九頁―二八〇頁

(4) 同右、下巻、一〇三頁。ホルト版、三四三頁

- ⑤ 同右、下巻、一一〇頁。ホルト版、三四九頁
- ⑥ 同右、下巻、一一〇頁。ホルト版、三四九頁
- ⑦ 同右、下巻、一〇四頁。ホルト版、三四四頁
- ⑧ 戸原訳『家族・私有財産・国家の起源』七一頁
- ⑨ 同右、一六〇―一六一頁
- ⑩ 同右、一六〇頁
- ⑪ 同右、一六〇頁
- ⑫ 佐藤篤士『古代ローマ法の研究』一九七五年刊、九二頁、敬文堂
- ⑬ 同右、八七頁
- ⑭ 戸原訳『家族・私有財産・国家の起源』、九〇頁
- ⑮ 佐藤篤士『十二表法原文・邦訳および解説』一九六九年刊、早稲田大学比較法研究所、一一二頁
- ⑯ メーシ『古代法律』小泉鉄訳、一七頁
- ⑰ 青山訳『古代社会』、下巻、二八五頁。ホルト版、四七八頁
- ⑱ 藤沢道郎訳『ローマの歴史』中央公論社、一〇〇頁
- ⑲ 青山訳『古代社会』下巻、二六〇頁。ホルト版、四五六頁
- ⑳ プルタルコス『ロムルス』、『世界文学全集』23、二六四頁
- ㉑ 戸原訳『家族・私有財産・国家の起源』、六四頁
- ㉒ 同右、六七頁
- ㉓ 中島寿雄・中村嘉男・井上絃一共訳『人類社会の形成』、下巻、六二頁
- ㉔ 同右、上巻、六九頁
- ㉕ 同右、上巻、二〇三頁

〔六〕

原始一夫一妻婚を提唱したウェスターマークの学説は、近代の一夫一妻婚家族の機能を前提にしているのであって、モルガンのいう一夫一妻婚とはことなるものである。ウェスターマークは、人間がもっている生物学的心理という半面のみ根拠をおいているし、また人類の原始にさかのぼって究明したのではなく、文明という洗礼をうけた現存の未開民族における生活状況によるものであって、社会科学的研究方法を必要とする原始の婚姻としてみるならば、かずかずの疑念がわく。

乱婚を否定する根拠については男の嫉妬心が乱婚をゆるさないというもので、エンゲルスは、「動物の人間化は、比較的大きな永続的集団の内部でのみ達成できたのであるが、集団を形成するための第一条件は、成熟した雄の相互の忍耐、嫉妬からの解放であった」<sup>1)</sup>とのべて、ウェスターマークに対する批判をしているし、人間にとって嫉妬心はかなりのちに発達した感情だとのべて、バツハオーフェン<sup>2)</sup>↓モルガンによる原始乱婚を支持しているのである。

だが、ウェスターマークの乱婚のとらえ方は、婚前交渉⇌結婚前の不貞であるとの解釈がされており、モルガンのいう乱婚とは明らかに違いが見られる。なお、「母権的なもの」⇌不道德、父権的なもの⇌道德的」というとらえ方も恣意的でをかしいし、モルガン学説の理解を欠いたモルガン批判だとみうけられる。ようするに、ウェスターマークはみづからが規定した「乱婚」を否定することによって、モルガンのいう婚姻史の端初として想定された「乱婚」を否定するという大きいまちがいをおかし、モルガンの原始乱婚のかわりに、原始一夫一妻婚をおいたのである。

さらにウェスターマークは、「ローマの婚姻」は「人類が普遍的に制度としてもっている一夫一妻婚」だという定義から出発していて、各々の民族が有した婚姻を単に類型的な婚姻形態、または習俗としてのべている。

それに対して、モルガンおよびエンゲルスの場合は、民族学によって、イロクォイ族の氏族からローマの氏族を類

推して、ローマでの対偶婚から一夫一妻婚への移行形態として大きく人類発展の過程の中でとらえ、「一夫一妻婚は文明とともに成立する」という学説である。

ウェスターマークの原始一夫一妻婚説によれば、ローマの建国当時にも、建国以前にも、さらに原始時代にさかのぼってみても一夫一妻婚だということになる。

わたしがしらべた限りでも、ローマは建国当時に、氏族制度は政治的制度にくみかえられ、すでに一夫一妻婚が成立していたとみることができる。しかし、一面では明らかに母権の残存をみることができるし、十二表法（B・C四五一年）ごろ、さらに共和政時代になっても、自由で人間として平等に尊敬されたとおもわれる女の姿のいくらかをかいまみるおもしろい。さらにサトウルナリヤ祭にみられる乱婚遺制は、建国以前を遠くさかのぼって、ローマの父系氏族の前段として母系氏族を想定し、母権的対偶婚——集團婚の存在を推測することも決して無理ではないと思われる。したがって一夫一妻婚が原始時代からあったとは、とうてい推測することはむづかしい。

ローマは、統一国家として歴史に登場した。古代奴隸制国家として繁栄をほこった強力な支配体制は、往古におけるローマ民族の足跡の多くを消してしまっている。しかし、考古学、地質学、言語学、民族学など、現代の諸科学は、こんごローマのはるか先史時代をも掘りおこしていくにちがいない。モルガンの功績は、洋の東西をとわず再評価されているし、セミヨーフが乱婚の普遍性をみとめた功績はすばらしい。また、「父系氏族の普遍性は論争中」であるにしても、部分的に修正されながら、「学説の基本的命題、とくに母系氏族の普遍性および集團婚の原初性についての命題は、新たに確認された諸事実によって確認され、発展しつつづけている」。<sup>②</sup>

ローマの一夫一妻婚は、モルガン学説を基底にして母権の残存から推定するとき、建国以前に成立したものと考えられ、すくなくとも建国とともに一夫一妻婚が確立したとみてよいであろう。このように考えたとき、ウェスターマークの原始一夫一妻婚説よりも、モルガンやエンゲルスによる発展段階説の方が、ローマの場合でも説明がつくように思われる。

ウェスターマーク説とモルガン説とを対比してみてきたが、こゝまでみれば、『教授資料』はそこで学説紹介のみに主力をつくすべきであつたとしてよい。

それは学問をする者、あるいは学校教師への手引書としては、あまりにも一方的にわりきつてしまつてゐるようであり、したがつて素朴にすぎると見られる。

① 戸原訳『家族・私有財産・国家の起源』、四八頁

② 犬童信義訳『モルガン』、『女性史研究』誌、第四集、八四頁

一月一日刊行

## モルガン『古代社会』資料

布村一夫編訳

今年、『古代社会』が刊行されて一〇〇年にあたる。これを記念して、つぎの遺文や手紙をあつめ、訳したものが、この資料集である。

- (1) モルガン・パーカー往復書簡
  - (2) リンカーン大統領への手紙
  - (3) 時代区分の表
  - (4) モンテスレーマの正餐
  - (5) ネーション誌への手紙
  - (6) 『古代社会』訂補
  - (7) 『カミラロイ部族とクルナイ部族』への序文
  - (8) モルガン・バツハオーフェン往復書簡
- わが国では、早くから、しかも数度にわたつて、『古代社会』が訳されたが、この『古代社会』以

外の著作は、なに一つ訳されていない。まことに残念である。

だが、この資料集によつて、モルガンの現実のインディアンにたいする政策、『古代社会』を中心としての民族学的研究の進展などがあきらかになる。とくに一二通のモルガン・バツハオーフェン往復書簡——モルガンの手紙五通、バツハオーフェンの手紙七通——は、バツハオーフェン『母権論』の意義をあきらかにし、二人のあいだの友情あふれる学問的交流をしめしている貴重なものであり、母権の復権のためには不可欠のものである。

頒価 六〇〇〇円 共同出版社 刊

東京都府中市日鋼町日鋼団地一二一四〇七

家族史研究会熊本事務局で取りつぎいたします

# ウェスターマーク<sup>(1)</sup>年譜

編・山崎貴美子

1862(0才) 11月20日にフィンランドのヘルシングフォース(現在のヘルシンキ)に生まれる。

1887(25才) 婚姻史の研究を思いたち、大英博物館で資料を蒐集する。

1890(28才) ヘルシングフォース大学社会学講師となる。同大学より哲学博士号を受ける。

1891(29才) 『人類婚姻史』<sup>(2)</sup>第一版・一卷をロンドン、マックミラン社から刊行する。  
アルフレッド・ウォレス(1823~1913)の序文がある。

1894(32才) ヘルシングフォース大学道德哲学教授に就任する。休暇中はロンドンへ行き婚姻史の研究を続ける。

1898(36才) 『人類婚姻史』第二版を刊行する。1902年の間にモロッコで現地調査をし、宗教と呪術理念と原始人の儀式的の研究をする。

1901(39才) 『人類婚姻史』第三版を刊行する。

1904(42才) 1907年までロンドン大学で社会学を講義する。

1906(44才) 1906~1908年『道德理念の起原と発達』二巻をロンドン、マックミラン社から刊行する。これを最も重要な仕事だと考えていたが哲学界では問題にされなかった。1918年までヘルシングフォース大学で道德哲学教授となる。

1907(45才) 1930年までロンドン大学で社会学教授となる。

1911(49才) 『人類婚姻史』第四版を刊行する。

1912(50才) アバディーン大学より名誉博士号を受ける。

1914(52才) 『モロッコにおける婚姻儀式』をロンドン、マックミラン社から刊行する。

1918(56才) 1927年までオーボ・アカデミー第一代総裁となる。1930年までそのアカデミーの哲学教授となる。

1920(58才) 『モロッコにおける精霊信仰』を刊行する。

1921(59才) 『人類婚姻史』を三巻本に増補し、第五版としてロンドン、マックミラン社から刊行する。

- 1924(62才) 1924～1926年に『道徳理念の起原と発達』第二版を刊行する。
- 1926(64才) 『婚姻小史』<sup>(3)</sup>をニューヨーク、マックミラン社から刊行するが、これは『人類婚姻史』第五版の抜粋である。『神々の徳』をロンドン、ワッツ社から刊行する。『モロッコにおける儀礼と信仰』二巻をロンドン、マックミラン社から刊行する。
- 1929(67才) 『自叙伝』ニューヨーク、マカウレイ社を刊行する。『婚姻』を『婚姻小史』の縮刷版として刊行する。グラスゴー大学より名誉法学博士号を受ける。
- 1930(68才) 『ムーア人の諺』『モロッコにおける機知と叡知。土着民の格言の研究』をロンドン、マックミラン社から刊行する。4月30日にウェスターマークはモンテギューの仲介によって、B・マリノウスキー、M・ギンスバークと共に、R・ブリフォー夫妻と会見する。5月7日にウェスターマークのセミナーで、R・ブリフォーが報告する。
- 1932(70才) 『倫理的相対性』をニューヨーク、ハーコート社から刊行するが、哲学界では問題にされなかった。『初期信仰とその社会の影響』をロンドン、マックミラン社から刊行する。ウプサラ大学から名誉哲学博士号を受ける。
- 1933(71才) 『モハメット文明における異教の残存』をロンドン、マックミラン社から刊行する。
- 1934(72才) 『性と婚姻についての三論文』をロンドン、マックミラン社から刊行する。R・ブリフォーへの反論を含む。
- 1936(74才) 『西洋文明における婚姻の将来』をロンドン、マックミラン社から刊行する。
- 1939(77才) 『キリスト教と道徳』をニューヨーク、マックミラン社から刊行する。  
9月9日に死亡。<sup>(4)</sup>
- 1947 『モロッコにおける殺人と結びついた諸習慣』をウェスターマーク協会から刊行する。

## 編 注

- (1) 「ヴェステルマルク」とも「ベスタマルク」とも表記されているが、ここでは慣例にしたがって「ウェスターマーク」を採用した。
- (2) この本は『家族・私有財産・国家の起原』第四版に引用されている。
- (3) この著作の邦訳にはつぎのものがある。  
『人類婚姻史』吉岡永美訳、啓明社、1930(昭和5)年刊。  
『人間と結婚』原田東吾訳、大東出版、1939(昭和14)年刊。  
『人間の結婚の歴史』中村正雄訳、創文社、1957(昭和31)年刊。



『人類婚姻史』江守五夫訳、社会思想社、1971（昭和45）年刊。

なお、つぎの二冊の底本をたしかめていない。

『婚姻進化論』藤原宇平訳、1896（明治29）年刊。

『人類婚姻史』島村民蔵訳、1921（大正10）年刊。

このほかに、

『婚姻と離婚』青山道夫訳、改造文庫、1933（昭和8）年刊があるが、『婚姻』1929年刊と、

『人類婚姻史』1921年刊、第32章と第33章の訳である。

- (4) 『人類婚姻史』江守五夫訳では9月3日とされているが、ここでは『新版世界人名辞典』東京堂出版によった。

— 予約募集いたします —

## 女性史研究 合本第1巻

愛蔵版 頒価3500円（千共）

「女性史研究」第1集から第5集までの5冊を合本し、第1巻として美しく製本します。

1冊の本としても歴史的な意義をもっている愛蔵版です。

### 第 一 巻

- 第1集 特集・高群逸枝研究のために
- 第2集 特集・高群逸枝を撰取する
- 第3集 特集・バツハオーフェン『母権論・序説』
- 第4集 特集・高群逸枝（橋本イツエ）氏を偲ぶ
- 第5集 特集・古代の女たち

家族史研究会熊本事務局へ申込み下さい

# 『源氏物語』の女たち

—— 訪 婚 ・ 夫 方 居 住 婚 ・ 一 夫 多 妻 婚 ——

緒 方 和 子

まえがき

『源氏物語』といえば、最初に現代語訳された『与謝野源氏』といわれるものがある。与謝野晶子三十四才のときに、難解な文章をよみ進むうちにこのすばらしい古典を、現代の人々にもよんでもらいたいと、この大きな仕事をなして、一九一二年に刊行したものである。

これが一九五五年に発行された日本国文学全集のなかに、二冊として復刻されているし、角川文庫にもおさまられているので、わたしたちに大へん便利である。この日本国文学全集の月報第一号に吉井勇氏は、『与謝野源氏に寄する』として、五つの歌を詠んでいるが、そのうちの一つは次のとおりである。

われいまだ若く晶子の源氏読み

胸おどらせしころを忘れず

今から約七十年前に訳された『与謝野源氏』のすばらしさへの感動と賛辞は、読むもののすべての人々の共通した思いであろう。戦後にも多くの文芸家や学者が、『源氏物語』の研究に取り組み、数多くの研究が行なわれている。そのなかでも戦前・戦後を通して前に述べた与謝野や谷崎潤一郎、そして円地文子の三氏によるものが文学的にすばらしいとして高く評価をされている。この汲めどもつきぬ泉のような『源氏物語』の魅力にひかれてあらゆる角度からの研究が、学問的にもこんご進められていくと思われる。芸術はフィクションを通して、そこに真実を表現するといわれるが、わたしもその魅力にひかれて『源氏物語』のなかの婚姻や性関係をとおして、とくに平安時代の貴族社会における婚姻について研究を進めることにした。この研究にあたって「雨の夜の品定め」のように源氏やそのほかの男の側に立って、女

をみるだけでなく、紫上が多く女のなかにあつて苦しむ、悩みぬき、そして「女ばかりきうくつな生活をしいられて、何もわからない風をして過すことは、何を生きがいにしてすごし、無常なこの世の寂しさをどうして慰めることができるか。また一人前に育てあげた親もまことに残念なことと思うものではないだろうか」と、作者が「夕霧」巻のなかでいわしていることに心をむけた。このことは、父権が強まつてゆく社会の流れのなかで、わずかながらもめざめた女の人間としての声であり、この物語をさらに魅力のあるものにさせる。そこで作者とともに当時の女の側に身をおいて、この物語のおくにある女のよろこび、悲しみなどのうえにたつて考察をすすめるように努力した。なお引用は、日本古典文学大系の『源氏物語』五冊によつたが、巻名のほかに、その第何冊と頁だけを記入することにし、たとえば第三冊の三一頁を「三・三一頁」とした。

(1)

『源氏物語』からは、その全体にたよっている無気力で絢爛とした奢侈と、もののあわれという風流三味の

なかのすきものとしての生き方や、貴種を尊び、みずからもそれにたつたことを誇りとするなど当時の貴族階級の、物心両面にたいする考え方をうかがい知ることができる。物語のはじまりである「桐壺」巻については「夕顔」について述べたあとにふれるとして、とくに女について、貴族社会の男たちが語りあつた有名な「掃木」巻の「雨の夜の品定め」ではつきりとしているので、そのことについてふれてみよう。

さみだれの晴れまもなく降りつづく夜に、源氏をかこんで、頭中将、左馬頭、藤式部丞といった「すきもの」たちが女について自分たちの経験をかたり、上の女、中の女、下の女と品わけをしたのしんだ。上の品を、氏育ちも申し分なく親のはぶりとときめいている深窓育ちの女、中の品は、この上の品の女のように、氏素姓はよいが落ちぶれて今は貧しい生活をよぎなくしているものや、受領の娘たちで、親にかしずかれその財力で娘たちに高い教養を身につけさせ、姿かたちも美しい女、また家柄はいやしいが、今ときめいている成り上りものの娘たちとわけることができる。

とくに中の品が深窓育ちとちがつて、現実の世のなか

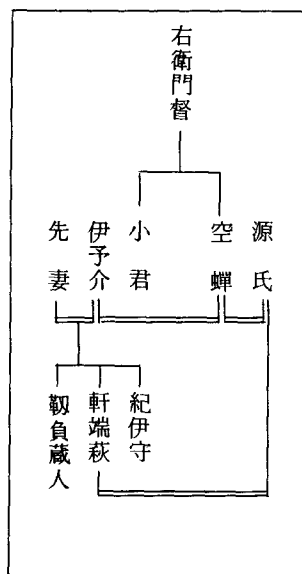
のありようも知る機会があり、それぞれの個性もゆたかで面白味のある女が多いというのである。下の品については、貴族階級からは笑いのものとして扱われる下層社会のなかに育った女である。「常夏」巻で登場する近江君が、最下層民のなかに育った人としてあらわれるが、この近江君は頭中将が女御に差上げたいと思って、夕顔とのあいだにできたこどもを探しているときに名乗りでた姫君である。「ただいとひなであやしき下人のなかに生ひ出で給へれば物の言ふさまで知らず」（「常夏」三、三一頁）とするされている。本人も「あやしき小家に生ひいでけること」（全前）といっている。母親の身分が低く貴族社会のエチケットを知らない近江君が尚待を希望したり、源氏と葵上の子どもである夕霧を思うひたむきな愛情の表現にたいして、本人からも周囲からも笑いや者としてあつかわれて問題にもされないのである。源氏は中の品の知られざる世界の女たちへの好き心からまったく遊びの対象としての女たちとのふれあいに興味をもち、それぞれの女への出あいをとめていった。そして最初の出あいは「空蟬」であった。源氏が方違えの宿である紀伊守の屋敷で、空蟬と一夜をとともにするが、空蟬

はこの魅力あふれる貴人との経験によって、さまざまな思いがはしるのである。すでに品定まった人妻であること、またその夫を支配している人との交情、境遇の違いなど、さくそうする感情のなかで、不本意ながら老受領の後妻となつた自分が、つねに夫を野卑な老人として見さげていたことに気づき、空蟬は急に夫の存在を呼びおこされて、夫がもしや夢に見るのではないかと身のすくむ思いがするのである。この思いがけない一方的な源氏のおとずれと、抱擁におどろきながらも人妻としての立場のあることをのべ、もののあわれを知らない氣にくわぬ女と思われても、色恋の相手にならないものとしてゆこうとそつけない態度でいたのである。空蟬はかつて桐壺帝の寵愛を夢みたこともあったが、いまはこのように源氏の支配下のものの妻となつている身であり、源氏から軽がるしくあつかわれることをさぞ残念に思つたことであろう。また年老いた受領の妻になるまでにはそれなりの生きることのきびしさを知つていたと思われる。空蟬は「すんでしまつてはいたし方のないこと、今となつては口外しないで下さい」（「掃木」一・九七頁）と、源氏との縁を作夜かぎりで絶つことを決心した。源氏に

とつて、空蟬と一夜の交情はまったく「雨の夜の品定め」に刺激された興味本位のでき心であつた。この遊びであつたものが忘れられなくなり、もう一度あいたいと、空蟬の弟で殿上童をのぞんでいる小君をともなつて、紀伊守が任国に下り、女ばかりになつた家に出むいた。空蟬は継娘の軒端萩を相手に基をうつていた。軒端萩はよく肥つて愛嬌があり、おきやんで少々つつしみの足りないところがあつた。この二人が床についた頃合をみはからつて、源氏は空蟬のところへ忍びこんだが、空蟬はすばらしい源氏のたきしめた香のかおりでそれと気付き、小桂をぬぎすべらせて部屋を出ていつてしまつた。源氏は少し離れたところにやすんでいた継娘の軒端萩と何のためらいもなく一夜をすごして、翌朝は空蟬の残した小桂を持つて二条院に帰り、その移り香をたのしんだ。空蟬も女である。人妻でなく娘時代のできことであればと思うものも無理はなく、源氏がまつたく一方的に空蟬の心をかきみだしたのである。このことについて西郷信綱氏は「尊貴の男が普通人の妻を犯しても罪にはならなかつた」（『日本古代文学史』二二八頁）といわれ、空蟬とその継娘にあたる軒端萩にたいして「しよせん雨夜の品定め

の最初の気まぐれな実験にすぎない。それは紀伊守に「とばり帳もいかに。そは、然る方の心もなくては、めざましき饗ならむ」と催馬楽の『わいへん』にひっかけて「看」に女を所望している風情にあるによつてもわかる」（『全前』）と考察している。このようになにごとも思うようにふるまい、世間もそれをゆるしても、しかもこれが貴族の特権であるとしても、女じしんが自分の生活や立場を考えることによつておこる心の葛藤まで源氏の思うようにならなかつたことが、中の品の心ある空蟬によつて代表されるであらう。

第1図



この空蟬と軒端萩は、血縁はないが母と娘である。したがつて継母と娘との関係にある二人の女にたいする行

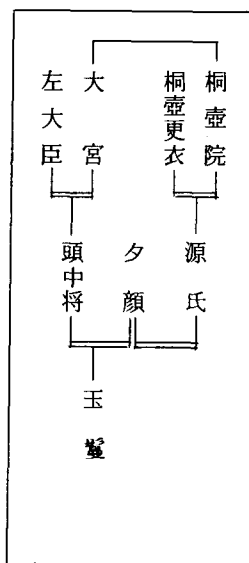
為である。

(2)

夕顔は、「雨の夜の品定め」のときに「いと忍びて見そめたりし人の」(「掃木」一・七八頁)と、ひかえめな可愛い女の思いでを涙ながら語った頭中将の「常夏の女」である。さらにこの女のそのごについて、源氏の「中の品」への興味の対象としてのかかわりあいのなかで出てきた人物である。源氏はある日、五条に住む乳母の大式を見舞った。その隣のみすばらしい小さな家に咲いていた夕顔の花に心ひかれたのが縁となつて、氏素姓も知らないままその女のやさしさにひかれてかようようになつた。八月十五夜の、明月の夜に静かなところで語りあかしたいと、女を附近の古びたなにがしの院に連れ出して一夜を過した。その夜、夕顔に嫉妬する「をかしげなる女」が枕もとに現われ、やがて夕顔は息絶えてしまった。まことにはかない夕顔の花のような影のうすい女であつた。侍女の右近の話によると頭中将とのあいだに娘がいたが、正妻である右大臣の四姫君の嫉妬をのがれて、姿をかくしていたのだとのことであつた。この

残された娘は、のちに源氏をなやました玉鬘である。

第2図



頭中将と源氏とは従兄弟同志であるが、知らないといえ一人の女にたいする従兄弟の二人の男の性関係である。

(3)

「いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひ給ひける中にいとやむごとなき際にはあらぬが」という『源氏物語』のすばらしい文章ではじまる「桐壺」巻についてのべると、桐壺帝の更衣であつた源氏の母は、異常と思われるほどに帝のおぼえもめでたかつた。だが周囲の朋輩からの恨みをうけて、物思いも深くつねに病がちの

日々であった。やがて第二皇子である光君、のちの源氏を出産した。

皇子が三才のときに袴着の儀式が、第一皇子におとらないほど盛大におこなわれたが、その夏に母の桐壺更衣は病が重くなり、里方に退出して、その夜なくなってしまった。帝の悲しみは深かった。光君が八才のときに、父帝は第二皇子の行末を考えて、高麗人のすぐれた人相見のことを参考にしながら、日本風の人相判断をして、親王としての宣言をせず、臣籍に降下して源氏の姓を賜わった。年月がすぎても帝は源氏の母を忘れることができずに、美人の評判の高い人を御召になるが、似ていると思われる人もないと嘆かれていた。帝のおそばに仕えている典侍が、先帝の女四宮が亡き更衣に似ていることを申し上げたので、帝は礼をつくして所望された。この方を藤壺宮（中宮）ともかがやく日の宮ともいう。この藤壺宮は、物語にしめる割合は少いが、源氏にとつては生涯心のなかで追い求める女性像であり、臉の母のような存在でもあった。血のつながりはないが継母であり、幼い子の母への愛がいつしか異性への恋となり、義理の母にたいするどうしようもない恋心はついて源氏を、無

暴な密通という行動にはしらせたのである（「若紫」一・二〇五頁）。やがて藤壺宮は身ごもり皇子を産んだが、後の天皇冷泉院である。藤壺宮は二十三才で、源氏十八才の年である。これは継母姦といえるであろう。

(4)

源氏が十八才の春から秋までのことをしるした「若紫」巻には、紫上との出会いのことや、さきに述べた藤壺宮との交情などがあるが、クイーン的な存在をしめしている紫上の生いたちとそのごの生き方について、「葵」「明石」「若菜」などの巻から追ってみよう。

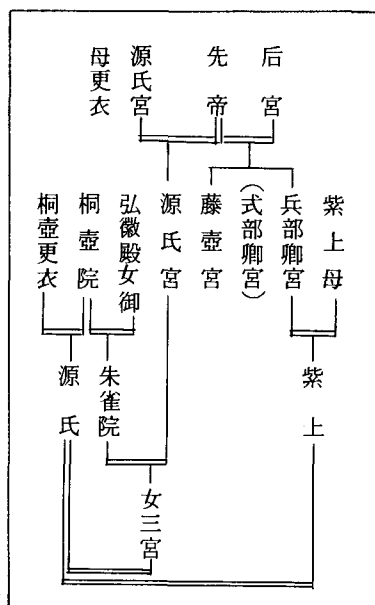
源氏がおこりの病をわずらい、その加持祈禱のために北山の行者をたずねたときのできごとである。つれづれなるままに御供の一人である良清が明石に旅したおりの明石上の噂話なしなどをして源氏をなぐさめたりしている。その夕暮どきに同じ山に住む僧都の坊に仏に花をあげる尼君や、藤壺宮によく似た十才ばかりの雀を慕う少女を垣間みて心ひかれた。あの恋しい藤壺宮の代りとして朝夕に、自分の心の慰めとして見たいものだ、深く





葵上の死後は、紫上は源氏の浮気につねに悩まされながらも、正妻としての取扱いをうけて重んじられていた。また周囲の人々からも正妻のように思われて過していた。さまざまなときがすぎて源氏四十才、紫上三十二才ともなると、若い頃とはちがつて、源氏の浮気心もう大丈夫と安心しておちついた生活をしていたときであった。源氏の兄の朱雀院はかねて健康がすぐれず、出家の望みを果したいと思いつながる気にかかるのは、うしろ立ても思わしくない最愛の娘三宮の将来であった。年の暮に女三宮の成人式の御裳着の儀式が行なわれた。朱雀院は「さきさき、人の上に、見聞きしにも、女は、心ようほかに、あわあわしくて、人におとしめらるる宿世あるなん、ひと口惜しく悲しき」（「若菜」三・二一三頁）と案じられて、源氏に女三宮を託したのである。女三宮十四才、源氏四十才の年である。女三宮と紫上とは従姉妹である。そしてこの婚姻では女三宮は皇女であるために、正妻である。紫上の婚姻も正妻に準ずる婚姻関係であった。住居も紫上や花散里・明石上のいる六条院のなかに女三宮はこしいれしてきたのである。これは一夫多妻婚の生活といえよう。

第4図



女三宮と紫上は従姉妹同志であり、源氏にとってはソロレイト婚である。しかも女三宮とは叔父と姪との結婚である。

(5)

(A) 「未摘花」巻と「蓬生」巻の主人公にあたる未摘花は、「雨の夜の品定め」で、氏素姓はよいがいまは落ぶれて貧しい生活をしている中の品にあたる人である。父は常陸宮であったが、早く死別して頼みになる人もな

い気の毒な身の上である。源氏が夕顔のうちとけたかれんなようすを思い出して、やはりあまり地位のあるものでなく、可愛らしい、おおらかな女をみつきたいと思っているとき、大輔の命婦という女房から、この末摘花のことを聞いて早速おとずれていった。ここでも葵上のごころに帰らないで出歩く源氏を、葵上の兄でもあるし、よい意味でのライバル意識を持っている頭中将につけられて、見つけられてしまったというエピソードがある。末摘花の容姿については、「まづ、居丈の高う、を背長にみえ給うに、『さればよ』と、胸つぶれぬ。うちつぎて、『あな、かたは』と見ゆる物は、御鼻なりけり、ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおばゆ。あさましゆう高うのびらかに、さきの方少し垂りて、色づきたること、ことの外に、うたてあり」（「末摘花」一・二五七頁）とあるように源氏をめぐる女のなかでは一番の醜女である。

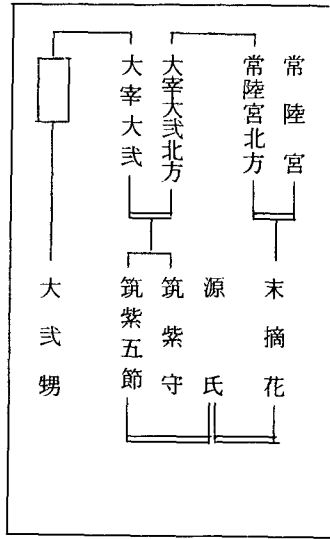
「蓬生」巻において、叔母にあたる大宰大貳の北方は、かつて受領の妻になったことで末摘花の母から軽べつされたことを恨んでいた。姪の末摘花の不運をむしろ小気味よく思っていたが、夫が大宰大貳となったことを誇り

に思っつか、末摘花を自分の娘達の小間使いとして連れてゆこうと思っただびたびさそった。末摘花は叔母の申出をことわり、父宮の在世当時の生活をかたくなまでも守り、貧しい生活に耐えながら、すっかり忘れられてしまった源氏をじつとただただ待っていた。

(B) 筑紫五節は大宰大貳の娘であり、末摘花とは従姉妹同志である。源氏と筑紫五節との出会いについては、若き日に宮中で、五節の舞の当日に目にとり愛したなかの一人である。五節自身は生涯にわたって源氏を慕いつづけた受領階級の娘である。源氏が須磨での佗しい生活をしているときに、大宰大貳は、任務を終えて京へ帰る途中に須磨の沖を船で通ることになった。筑紫五節は手紙を使いにもたせて源氏への思慕をうつたえている。源氏もまた筑紫五節との思い出をなつかしみながら返歌をしている。そのごの筑紫五節については次の通りである。「花散里」巻では、心変りのしないかわいらしい人として、また「濡標」巻では、源氏がいま一度あいたいと終始心にかけているが逢うことがむづかしく、人目を忍ぶこともできない。女の方でも源氏を思いあきらめることができずに、親が身をかためさせようといろいろい

い聞かせても、本人はすっかり結婚をあきらめている。  
 (C) 源氏からすっかり忘れられていた末摘花であるが、明石から帰った源氏が花散里をおとずれるとき、通りがかりにふと思ひ出して立寄った。その生活のあまりにも貧しいのにおどろき、生活についての面倒をみてやるが、やがて二条院の東院に末摘花をひきとった。末摘花の生活は安定したが、そのあとも深く愛されることはなかった。

第5図



この零落した姫君と受領の娘との従姉妹同志に対する性関係は、ソロレートの性関係といえるかもしれないが、末摘花は一夫多妻婚のなかの一人の妻でもあるし、それ

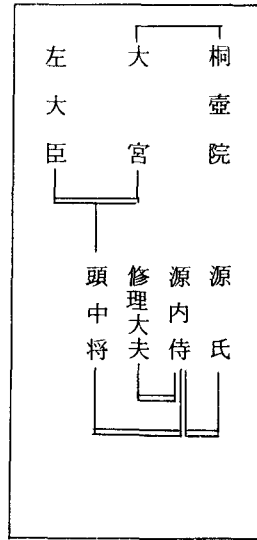
よりも東院にあるハレム、いわば東院ハレムのなかの一人の女というべきであらう。

(6)

「紅葉賀」巻は源氏十八才の秋ごろから十九才の秋までのことである。「末摘花」巻のときと同じく、何かにつけても御互いに張合う傾向にある源氏と頭中将が、年老いた内侍をめぐつてのエピソードがある。「年いたう老いたる内侍のすけ、人もやんごとなく、心ばせありて、あてに、おぼえ高くはありながら、いみじうあだめいたる心ざまにて……」(「紅葉賀」一・二九〇頁)とあるように、源内侍は里方もよく、上品で周囲の人達からのうけもよかつたが、五十七・八才の年令にもかかわらず浮気な女であつた。内侍は源氏に積極的なさその態度をしめした。頭中将がそれを知り、内侍にいいよつて契りを結んでしまったが、源氏はそのことを知らなかつた。ある夜、内侍のひく琵琶の音にひかれて内侍の部屋をおとずれた。頭中将はそれをみつめて、二人が少しねむつたかと思われるころをみはからつて、わざと部屋にはいつていった。源氏は内侍の夫である修理大夫かと思つて

あわてるが、やがて頭中将とわかり、取組みあいをして  
いるうちに二人とも着物の袖口はほころび、帯もとけて、  
恨みのない見苦しい姿となった。源氏は二条院に帰っ  
たが頭中将にみつけれられたのが大変残念でしかたがな  
かった。

第 6 図



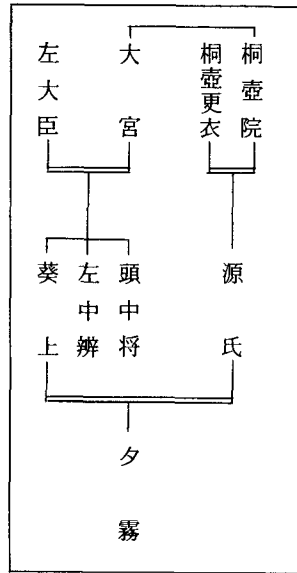
ここでも一人の年老いた女を、源氏と頭中将の従兄弟  
同志が性関係をたのしんでいる。

(7)

葵上と源氏との婚姻のばあい、彼女は源氏が元服のお  
りの添臥の妻であるし、正妻でもある。葵上については  
「引入の大臣の皇女腹に、ただ一人かしづき給う御女、  
春宮よりも御けしきあるを、おぼし煩ふことありけるは、

この君にたてまつらむの御心なりけり」(「桐壺」一・  
四八頁)とあるように、皇太子からの御所望があったの  
を左大臣がためらっていたのは、かねてから源氏の君に  
さし上げようとの大臣の下心があつたのであろう。源氏  
の父帝の妹にあたる大宮と左大臣との婚姻から生れた姫  
君である。葵上とは従姉弟婚である。葵上は十六才であ  
り、源氏十二才で大へんお若いので、葵上はきまりがわ  
るく恥かしく思うのだつた。一方藤壺宮を思う源氏は、  
宮中に五ノ六日、左大臣邸には二ノ三日と、とだえがち  
に葵上のところにかよつた。正妻である葵上を心から愛  
することなくて、あちらこちらの女へと通っている源氏  
に、とくに紫上を引き取つて御寵愛になつていすることな  
ど、ますます葵上も心のへだたりを感じていった。結婚  
して十年後に男子を出産したが、産後の肥立ちが悪くま  
た六条御息所の生霊に悩まされたが、死にのぞんでやつ  
と源氏の心をとらえることができた。死という大いなる  
代償として得た心のかよいあいであつた。二十六年の生  
涯を心さびしくも女としてのプライドを保つて過した一  
人の女でもある。

第7図



葵上は父の妹の娘であるので従姉弟であり、したがって交叉従姉弟婚がおこなわれている。

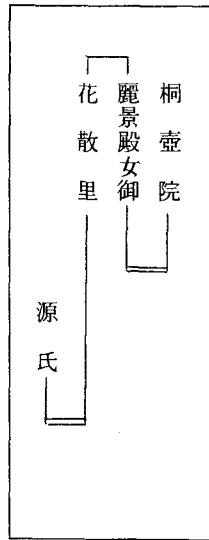
(8)

花散里は、桐壺院の女御麗景殿の妹であり、かつて源氏が宮中でほんのほかない逢瀬を求めた女性の一人である。桐壺院の亡きあと、姉妹二人でさびしく源氏の保護をうけての生活であった。物語のなかで源氏が須磨へ退居の前後から源氏の身辺にいて、目立たない存在ながら常に大切な役割を果たしている。愛人というよりは、源氏が一番信頼していて、この人と語りあうことによつて心のやすらぎを得たように思われる。明石からかえったあと

二条院のそばの東院に迎えて、祖父の大宮のもとで育てられていた源氏の長男である夕霧を引取り、花散里に預けてその世話をたのんでいる。また夕顔と頭中將のあいだに生まれた玉鬘を引きとったときも花散里にあづけている。すでに十三才にもなった夕霧は「かたちの、まほならずもおはしけるかな」（「乙女」二・三一四頁）と第一印象で容貌の満足でないのに、よく父君が見捨なく世話されると感心しているが、やがて心ばえのすばらしさに打たれている。やがて六条院のすばらしい御殿ができ上ると、紫上、秋好中宮、明石上と同じくその一角に迎えられる。自分をよく知りわきまえる花散里に、ときたま源氏のおとずれる夜も「床をば譲り聞え給ひて、御几帳引き隔てて、大殿籠る」（「螢」二・四三〇頁）とあるように、源氏の君と共寝をするということは、自分には全く似合わないとききらめておられるので、源氏もむりにともいわれない。このように肉体的なもののから、精神的なつながりとしての源氏のよきパートナーであった。この方の晩年はお世話した人たちにとりかこまれながら、源氏の死後もしあわせな生活を送った人であるとされている。

花散里は、明石上のひたすら忍従と謙譲さによる女のしあわせとちがった面がある。「雨夜の品定め」にあるように、何事も分をわきまえて、女として愛されることも多くをのぞまず、つねにおっとりとしてひかえめで、分相應の生活をのぞむことが女のしあわせに通じるといふ、男からみた女への要望のパターンの一つが花散里によつて示されているといえよう。

第8図



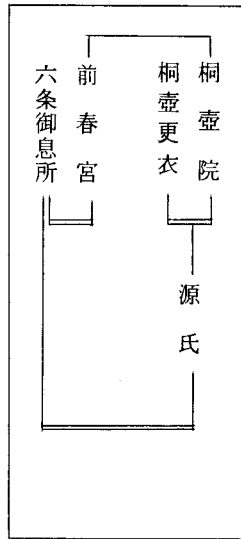
ここでは麗景殿女御の両親についてはふれていないし、桐壺院とのあいだに御子もなかったためか、他の女の人のような血統があきらかではない。したがって源氏との血縁関係についてもはっきりしない。わかっていることは父の女御の妹であるということだけである。したがって親世代者の女と子世代者の男との関係であるともいえる。

(9)

六条の御息所は、前の故皇太子妃であり、社会的な地位も、その出自からいっても高い身分の方である。「夕顔」巻で、突然の夕顔の死に「をかしげなる女」としてあらはれ、そのご大いに活躍する人物である。「葵」巻でも源氏の正妻である葵上と、賀茂の祭の斎院の御禊の日に、車の所争いで葵上からうけた御息所のみじめさは、やがて嫉妬のはのほとして燃え上り、もののけとなつて葵上をとり殺すことになった。そのあとも「賢木」巻、「須磨」巻、「明石」巻で、巾ひろく物語の脇役として登場している。とくに「明石」巻においては、明石上の美的評価にたいしてその美しさの基準として御息所が引合に出されているほどである。葵上の死後は、源氏から相当な愛情と関心を持たれている人で、「賢木」巻では正妻として迎えられるとさえ噂されていた。才色兼備の情熱にもえる女としての御息所が嫉妬のあまり生霊や、もののけの活躍する当時流行した物怪信仰の代表的なものとあげられている。この、もののけ・生霊の騒動に御息所自身も悩み苦しむが、源氏も御息所から遠ざかる原因となった。「若菜下」巻での葵上の突然の病氣

も「柏木」巻で女三宮が髪をおろして尼になったのも、御息所のものけのしわざであり、御息所の死後もつねに源氏を悩ましている。この女として生きること悩みくるしんだ御息所も死の床にのぞんで、前春宮とのあいだの姫を残してゆくことを心配して、好色の相手にされないようにとくぎをさして源氏に後事を託している。

第9図



この源氏と御息所との交情は、父桐壺帝の弟宮の妃であり、七才年上の義理の叔母にあたる女との関係である。次に嫉妬のあまりものけとして人々を苦しめるということは、この時代が一夫多妻婚であるので、愛憎の煩悩に悩む女の化身とも、女の悩みとくるしみの果の業ともいえよう。当時の女のあわれさをうかがい知ることができる。また人の親として娘の行末を案じた母心は今も昔

も変っていない。

(10)

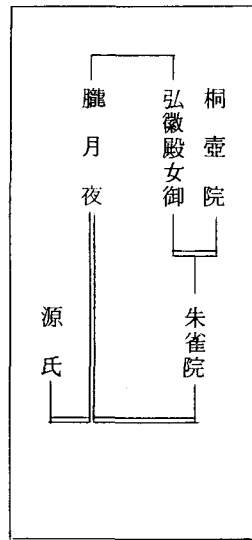
平安貴族の階級差別がよく現われているものに明石上がいる。そのまえに源氏が須磨から明石へと退居するいきさつについて述べておかねばならない。桐壺院の死とともに政権は、新しい天皇朱雀院の生母である弘徽殿女御と、その父である右大臣へと移っていった。

このことは源氏や藤壺宮や左大臣側にとっては不幸な事態となった。とくに右大臣の六の君である朧月夜は、若い源氏との出合でもものあわれを知らない女と思われたくない、強く拒むこともなく源氏との契りを結んでしまった（「花宴」一・三〇六頁）。やがて若い二人は情熱的な恋に発展してゆき、さまざまなことがあんながらもかなり晩年まで源氏の愛にこたえている。右大臣は朧月夜を春宮（朱雀院）にさし上げようと思っていたが、源氏との事があつたので尚侍として入内させた。病気のために里下りをしている朧月夜に所もあらうに、右大臣邸へ忍んで通っていったが大臣に発見されてしまった。源氏はこの朧月夜との密事によって、須磨から明石へと



退居せざるを得ないように直接の原因を自から招いたのである。

第 1 0 図

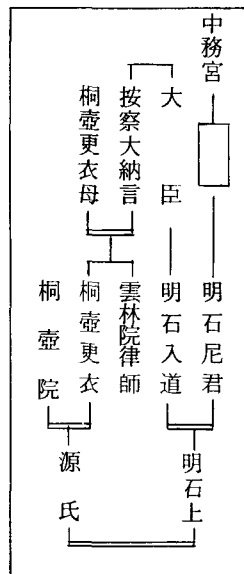


須磨での生活は、別れている親しい人々への便りをすること、侘しい日常生活をなぐさめていた。ただ明石に住む、もと播磨守で剃髪して明石入道といい明石に土着した貴族がいた。この入道だけは娘に幸運が廻ってきたと、心ひそかによろこんでいた。やがて入道は住吉神社のお告げと称して明石に源氏を迎えて、念願であった娘の婿にと心をくだくが、聡明な娘は自分と源氏との身分の境遇の違いを思い、父のことは容易にしたがおうとはしなかった。この明石入道は源氏の母とは従兄妹同志であり、妻の明石尼の祖父は中務宮である。この二人のあいだの女子の出産の前に瑞夢をみて、その将来に望

みをかけて近衛中将の職をすてて、経済的な地盤を作るためにこの地の守となった位であるから、娘の出世を唯一のたのしみに暮らしたのである。

やがて源氏は、心をこめた入道のはからいで、娘のすまいをおとずれるが、それは旅のすさびのまにまにとの契りであった。この人が明石上である。

第 1 1 図



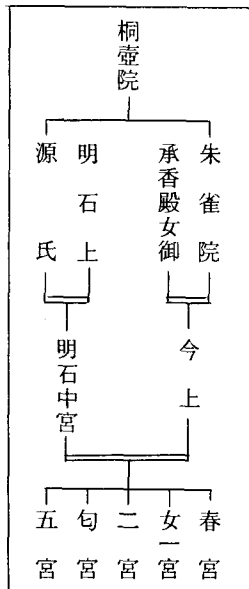
やがて明石上は身ごもったが、そのあと源氏には都への召還の宣旨が下った。都へ帰った源氏は、明石上の出産が女の子であることがわかると、乳母を選び明石上のもとにつかわした。さらに明石上に上京をすすめるが、思慮深い明石上は将来のことを考慮しながらも容易に決心がつかなかった。父の入道のすすめで、都の郊外にある祖父の中務宮の山荘を手入して、明石上とその母尼君

と姫君の三人がやつと移り住むことになった。源氏は嵯峨野の御堂に参拝することを口実に明石上をおとずれるが、不便でさびしい山荘なので、二条院の東院へ移るようすすめた。明石上は自分のいやしい身分を思うとき、どうしても源氏の思い人の大ぜいいる東院へ移ることを承知しなかった。紫上の子として姫君だけが二条院に引き取られることになった。そして将来は明石中宮となる教養と、身分の確立のためにも源氏の正妻の扱いをうけている、紫上のもとで養育されることが絶対的な条件であった。明石上にとっては、自分の子どもの将来のためにはただただ耐え忍ぶ以外はなかった。源氏は閑静な邸宅の造営を思いたち、四町の土地を四つに区切り、西南に秋好中宮を、東南には源氏と紫上、東北には花散里、西北を明石上の住居として六条院を造営した。大堰の山荘から明石上を最後に迎えて、源氏はここで四季おりおりの風景をめながら、心身ともに安定した生活を楽しむのである。

六条院に移った明石上はこれからも永い間同じ邸内に住みながら源氏をなかには喜んで、わが子の消息を知り、わずかに歌のやりとりだけであいみることもできなかった

た。やがて八年間の月日が過ぎて、十一才になった明石姫の御裳着（成人式）の儀式が秋好中宮の御殿で盛大に行なわれつついて、春宮（朱雀院の御子）への入内が行なわれた。我が子の晴れの日の姿をかいまみることもできず、むしろ身分の低い母親のために、姫君のきずになりはしないかと心苦しう思うのである。紫上はその意をくんで、入内後はその世話役を生みの親である明石上にまかせた。やがて姫君は皇子を産み、中宮に進み明石上はその生母として、しあわせな平和な一生をおくるのである。

第 12 図



これは明石上が地位の低い受領階級に生れながらもつねに自分を見失うことなく、忍従と謙譲の生活をモットーとしてかち得たしあわせであらう。

この六条院には源氏を中心として、正妻に準ずる紫上のほかに、明石上、花散里が同じ屋敷内に居るといふことは一夫多妻婚の同居であるといえる。源氏と明石上とは再従兄妹婚である。今上と明石中宮の婚姻は従兄妹婚であり、平行いとこ婚である。次に麿月夜と朱雀院の關係は生母の弘徽殿女御の妹であり、叔母である女と甥の關係である。源氏も朱雀院にとつても同じく異世代の女との性關係でもある。

(11)

源氏と女房たちとの性關係について、物語のなかにはつきりとしているものを取り上げると、次のとおりである。

(A) 源氏は葵上の死後、四十九日の忌明まで左大臣邸に籠っていた。「中納言の君というのは、年頃忍び思ししかど、この御思ひのほどは、中々さようなるすぢにもかけ給はず」(「葵」一・三四八頁)とあるように、中納言はないで御寵愛になっていた葵上つきの女房であつたが、喪に服している源氏は男女關係の方面には全く関心がなかつたと記されている。また源氏が須磨に退居を決

意して、その出発の二三日前に左大臣邸へ出かけて、大臣はもちろん葵上とのあいだの子どもである夕霧との別れをおしんだ。とくに中納言君が、心のなかで悲しみ悩んでいるのをみていとしく思つてか、この日は左大臣邸に泊り、中納言とつきぬなごりをおしんだのである。

(B) 中務君と中将君については、源氏つきの女房である。まず中務君について述べると、大変琵琶が上手であつた。頭中将が思いをよせていたが、源氏の君と、ときたまお逢いするのを忘れかねて心から源氏を慕っていた。しかしその關係が自然と外に知れてしまい、葵上の母宮のござげんが悪いので、中務君はふさぎ込んで面白くなさそうに、物に寄りかかりながら、まったく源氏君のお姿がみられないところに離れてしまうのも心寂しく、いろいろと思い悩んでいる(「末摘花」一・二四二頁)。次に「須磨」巻に「わが御方の中務・中将なでやうの人々、つれなき御もてなしながら、みたてまつる程こそ、なぐさめつれ、なにごとにつけてかと思へども」と源氏の須磨への退居を心細く思つて、何を心のささえとしてこれから生きて行くのかと嘆いている。源氏二十八才の秋から二十九才の暮の間を書いた「濡標」巻では、明石から

かえった源氏が、悲運のあとかたもなく栄達していった。留守を守った人々に機会をみては引立てられたので、しあわせを得た人が多かった。とくに「二条院にも、同じごとまきこえける人を、あはれるものに思ひて、年頃の胸あくばかりと思せば、中将・中務やうの人人には、程々につけつつ、情を見え給うに御いとまもなくて、ほか歩きもし給はず」とある（「落標」二・一〇五頁）明石からかえった源氏は、父の桐壺院からの遺産である二条院の東側にある御殿を改築して、花散里などのようにさびしく生活しているもので、気がかりな人たちを住まわせた。

(12)

さいごに源氏が忍んでかよったり、通りすがりに琴や笛の音に心ひかれておとずれた女たちで、やがて別のしあわせを求めた霧朝女や、中川の女がいる。また源氏を最後まで拒み通した女達について、いままで述べた女達と違った平安時代の女の生き方や、考え方をさぐってみることにした。

(A) 霧朝女の場合は、源氏十八才の頃で、北山の僧都の

坊で、まだ十才ばかりのかわいらしいあどけない少女を見て、思うように教育して理想の妻にしたいと思つたのちの紫上のことである。この少女が母尼と一諸に京にかえつたので、少女をおとずれたその帰りのできごとである。朝霧が一面にたちこめて、明け方の景色が何となく風ぜいがあり、これが真実の恋人からの朝帰りであればと、もの足りない思いで帰っていると、「いと忍びて通い給う所の道なるけるとおほし出て、かどうち蔽かせ給へど、聞きつくる人なし。かひなくて御供に、声ある人して、うたはせ給ふ。『朝ぼらけ霧立つ空のまよひにも行き過ぎがたきいもが門かな』と二返りうたひたるに、よしばみたる下仕を出して、『立とまり霧のまかきの過ぎらくは草の戸ざしにさはりしもせじ』と言ひかけて、いりぬ、又、人も出で来ねば、かえるも情なけれど、明け行く空もはしたなくて、殿へおはしぬ」（「若紫」一・二一九頁）とあるように、だれもそのあと出てこない

ので、源氏はしかたなくそのまま二条院に帰った。

(B) 中川の女は、源氏が二十才のうちに、右大臣の勢力が強まり政界に於ても心悩まされる日々となつて、やがて須磨への退居を前にして、わざとお忍びの姿で花散里

をおとずれたその途中でのことである。中川のあたりを通っている小さな家の木立からきこえる琴の音に源氏は耳をとめて、あたりを見ると大きな桂の木の追風に、賀茂の祭りのことが思い出されたその時に、一度あったことのある女の家だと気がついて早速心が動いた。あれからずいぶんたっているのに気がひけるのであるが、供の惟光を使いに行くと気どった態度で源氏の君のたよりを伝えた。若い女房たちはだれか見当がつかずさわいだが、「この五月の空ではそのお姿がはつきり見えません」とわざと不審がる様子もみえた。このように二人には定まった夫ができたのか源氏を、それとなく返歌によってそしらぬ風をしてしまったのである。

この朝霧女や、中川の女を考えると、源氏からいえば、この二人はじつと耐えることを知らぬうつろいやすい軽薄な女であり、二度とおとずれることはないが、そのためにも何年も源氏のおとずれがなくても耐えている花散里や末摘花、それに筑紫五節などいとはしく思ったことであろう。ただし女の方からは、気まぐれな男のおとずれをじつと待つだけのみじめなおのが姿を、一人の女としてめざめたとき、ささやかながらも心の安定と主

体性を求めて、このように源氏の一方的な愛のめぐみを断ち切っていった女たちもいたのである。

⑦ 紫上にしつとをおこさせながらも、最後まで源氏に動こうとはしなかった人に朝顔がいる。源氏三十二才の秋から冬にかけてのことである。藤壺宮の死によって動揺していた源氏の心のすき間を縫うように朝顔君が父の桃園式部卿宮の死によって、斎院をやめてかえってきた。その昔、宮中で求愛の手紙を書いたこともあり、朝顔も葵上と御息所の車所争いの折りに見物に出かけて源氏の姿をみて感動したことがあった。源氏はなつかしくなつて桃園邸をおとづれた。朝顔は源氏の父桐壺院の弟宮のこどもであり従兄妹にあたる。

この桃園邸には朝顔にも源氏にも叔母にあたる五の宮が一緒に住んでいた。この五の宮の見舞にかこつけてたびたび朝顔をおとづれた。五の宮もその周囲も朝顔と源氏と一緒にいることをのぞんだが、ついに志操堅固でかたくなまでも源氏との交渉をこぼんだのである。紫上は最初はいつもの源氏の浮気心とたかをくくっていたが、次第に異状と思われるまでに真けんな源氏の様子をみると今まで競争相手もなく安心して自分の地位につい

て不安をかんじている。二条院の紫上のところへの夜離れが多くなつて、じょうだんごとではすまされなくなり、朝顔が同じ宮家の出身であり、身分的にも対とうなため、自分のみすてられるかもしれないと心悩ましているのである。朝顔君は、空蟬や、朝霧女、中川の女たちと違つて、聡明で人生のさきのさきまで人の心のうら表まで見通して、源氏の執ような愛の追求にもめげずついに二十数年の源氏との交際をプラトニックなものでおわらしている。やがて年月が過ぎてゆくなかで、いつか出家して仏の道に修業している身となつていった。このように女が主体性をもつて男を選ぶということは、拒否することだけであり、関係を一方的に絶ちたいと思うときは、髪をおろして尼になる以外にはなかった。

④ 次に源氏の愛情を迷惑にかんじた女に玉鬘がいる。この「玉鬘」巻から「真木柱」巻までの「玉鬘十帖」の主人公であり物語としては、六条院のはなやかな生活をよりいっそう多彩にした人である。玉鬘は四才のとき母の夕顔の死も知らずに、乳母の夫である太宰少貳に伴なわれて筑紫に下つた。少貳夫婦は玉鬘を大切に育てていたが少貳の任が終り、蓄財も乏しいので上京を見合せて

いるうちに病死した。生活は貧しくなつていったが、玉鬘は年とともに輝やくばかりの容姿となり、やがて二十才となつた。地方に勢力を持つ大夫監という武士が玉鬘に強引に結婚を申込んできた。乳母はよぎなく長男の豊後介に協力を求めた。豊後介は妻子を捨てて母と玉鬘を早船に乗せて追手から逃げるようにして上京した。京にはよるべもない玉鬘の一行は神仏にたよる以外はないと初瀬詣をしたところに、夕顔の侍女でありそのご源氏に引取られている右近も、姫君の行方を知りたくて初瀬詣を思い立つたのであるがその途中で、この玉鬘一行と出あい玉鬘の美しく上品な容姿をしみじみと嬉しく思い源氏にこのことを報告した。

源氏は数奇の運命によつて二十才になつた玉鬘を娘分として六条院に引取り、花散里にその世話をしたのんだ。夕顔よりさらに氣の勝つた聡明な玉鬘は、日毎に美しくみやびたる当世風の新しい女となつていった。その美しさにひかれた源氏は人目を忍ぶようにして玉鬘の部屋にいつて、しみじみと玉鬘の手を取り思いをそれとなく打ちあけたり、恋慕の情を歌に託したりした。源氏の懸想と知りつつわざと、親子の情あいにもせて歌を返したり、

男女の間のことをそしらぬ風によそおったり、実にさねやかに源氏の一途な恋慕の情を上手にかわしている。十二才になった玉鬘をいつまでも六条院におくことは世間でも悪く、親がわりとして引取ったことと、年令や現在の地位を考えると玉鬘を側妾のようにすることもできず、冷泉帝のかねてからのぞみもあつて尚侍として出仕させることにした。考え深い玉鬘はすでに源氏が親がわりとなつてゐる秋好中宮や、父である頭中将の正妻の娘が弘徽殿女御であり、帝との愛を争うことになるので氣持が進まなかつた。悩みの多い玉鬘に思いがけず侍女の手引で相手にもしていなかつた髭黒大將が通うよになつた。周囲の若い男たちをがっかりさせたが、源氏も不満に思ひながらも、婿君としてこの上もなく丁重に大事にされた。髭黒大將は尚侍として宮中に出仕したその日に、玉鬘のことが心配でとうとう髭黒邸へ強引に引取つてしまつた。はじめは不本意であつた玉鬘もそのご落つた生活にはいり、夫の死後も三男二女の子よき母親として過している。この結婚をよるこんだのは父の内大臣（頭中将）で、親として尚侍の生活をして姉妹で帝の愛をあらそうことは忍びないことであつたらうし、娘と

第 13 図

その当時の男の女にたいする考えがわかるのに、玉鬘を引取った日に紫上と源氏の会話がある。「弟宮の兵部卿宮（師宮）など生真面目な様子で邸にくるのも心を乱す材料がないからであろう。こんごは玉鬘を大事に取扱って、すき者の心を乱して、生真面目で通されない男の様子をみてやろう」というのにたいして、紫上は「あやしの人の親や、まづ人の心励まさむことを、先におぼすよ、けしからず」（「玉鬘」二・三六八頁）といっている。さらに源氏は「あなたのときに、今のようにゆとりのある心であつたら、そのようにして多くの男たちの心をいらだたせてみるはずでした」ともいっている。玉鬘を引取って、柏木・夕霧・兵部卿宮・琵琶大将など、多くの人々をいらだたせてみたり、自分の娘である明石中宮が春宮入内を聞いて、左大臣や左大将などの娘を持つ人たちが、宮仕えをあきらめているということを耳にして「いとたい／＼しきことなり。宮仕へのすぢは、あまたある中に、すこしのけじめも挑まんこそ、本意ならめ、そこらの、きやうざくの姫君たち、ひきこめられんは、世に物の映えあらじ」（「梅枝」三・一六八頁）。このように「宮仕とは女御・更衣の大勢のなかで少しの

優劣を争いあうのがはりあいのあることであろう」として、明石中宮の入内を延期したのである。帝へ多くの女を差出して帝の愛を競争させるなど、やはり女が貴族社会の男の楽しみの道具として取扱はれているのである。玉鬘の場合でも同じであるが、この玉鬘はどんな場合でも自分を見うしなうことなく、前向きの姿勢で自分の道を切開いていった新しい女であつたと思われる。

#### む す び

源氏をめぐる婚姻、そして性関係をみてきたが、彼の子世代と孫世代者における婚姻については、残念ながらここでは省略しなければならない。まず源氏をめぐる婚姻を親族関係からまとめてみると、近親婚のはげしさにおどろくのである。

#### (A) 近親婚

- (1) 女三宮とは叔父・姪の結婚である。
- (2) 紫上と女三宮とは、叔父・叔母の子とも同志の従姉妹であるので、二人の従姉妹を源氏とはにもめとることであり、それはソロレイト婚の一種といえる。
- (3) 添臥の妻である葵上は従姉であるので、交叉従姉



弟婚である。

(4) 平行従兄妹婚については、源氏をめぐる女のなかではおこなわれなかった。だが執ようにいいよつた桃園式部卿宮の娘である朝顔君は平行従兄妹である。また源氏の色好みの対象になるけはいをみせた秋好中宮も平行従兄妹である。念のためつけくわえておくが子の世代になると、源氏の子の夕霧は、落葉宮と平行従兄妹婚であり、雲井雁と夕霧は交叉従兄妹婚であるから、平行従兄妹婚も交叉従兄妹婚も同時におこなわれた。また今上と明石中宮との婚姻は平行従兄妹婚である。叔父・姪婚、従兄妹婚、ソロレート婚は、大宰春台の著書『乱婚伝』に「父かたの叔父と姪との叔父姪婚と、従兄妹婚、レヴィレイト婚の三つが江戸時代以前公然と行なわれた」（布村一夫『日本神話学』むぎ書房二八六頁）とあるが、江戸時代以前、しかも古代から行なわれているものである。兄の朱雀院は母の妹である尚侍の朧月夜と性関係があり、源氏もまた彼女と愛人関係にある。したがって世代を異にするものたちのあいだでの性関係である。桐壺帝の女御である藤壺宮は二十三才で、

源氏十八才の五才違いである。その反面に、女三宮と源氏のように、年令差のはげしい異世代婚がおこなわれることにもなる。西郷信綱氏によると「息子と父との間に性的禁制がしかられており、それ故かえてつて吸引力がそこにはたらいたのであり、光源氏と藤壺との関係も、まさしくこれに相当する」（『日本文学史』二二五頁）とあるが、源氏による藤壺宮にたいする継母姦はこの時代の生活感情や、生活のあり方を伺い知ることができるが、親世代者と子世代者との性関係は嫌悪がなく、婚姻における世代原則はみいだせない。このように異世代者たちのあいだでの婚姻や、一時的性関係がおこなわれることは、それが一回ぎりや永続的な訪婚としてあらわれているとしても、このような性関係や愛人関係が一夫多妻婚と共存していたとしなければならない。

(B)

源氏が一夫多妻婚をしていたことはあきらかである。その一夫多妻婚は、現実には二条院および東院と、新らしく造営された六条院での生活に如実にあらわれる。(1) 二条院は、母の桐壺更衣から譲られたものである。この二条院を改築して源氏の私邸としたが、その折

に「ここで藤壺宮と過したいものだ」と思った屋敷でもある。元服と同時に結婚した葵上にたいしては訪婚であった。この私邸と宮中にある宿舎から彼女のもとに通つたのである。やがてこの二条院は紫上との日常生活の場となつた。(1)で述べたように明石から帰つた源氏は、中将君や、中務君のような女房たちにも、それぞれほどよい程度の情をかけているので、内輪の方でもいそがしくて外へ忍び歩きもされない」と「落標」巻にしるされている。この二条院では同じ邸内に正妻に準じる紫上と性関係のある女房達とが一諸に住んでいる。

(2) 東院は、父の桐壺帝から譲られたものである。「初音」巻によると、源氏が新しい年を六条院で迎えて忙がしい日をすごしたあと、東院の女たちへあいさつ廻りをしている。

まづ身分の高い末摘花に、次に尼になつた空蟬も迎えられて仏に仕えている部屋へ、そのあとはこの末摘花や、空蟬ていどの源氏とのかかわりあいのあつた女のかたがたの部屋に、一通り顔を出してどの女に対しても、その身分のほどに応じて目をかけて

やつたとのことである。そのほかに、六条院ができあがり引越すまでここに居て、源氏の子の夕霧を世話した花散里がいた。このようにかかわりあひのあつた女たちを集めて、静かな生活を送らせている。

(3) 六条院については、六条御息所の御殿のあたりを四つに区切つて造営されたものである。「乙女」巻に、春・夏・秋・冬の四季にちなんぞで造営されたすばらしい御殿の様子が、うかがい知ることができる。西南の一角は御息所の旧邸のあとでもあるので、秋好中宮の里すみの、東南には源氏と紫上の、東北には花散里の、西北には明石上の住居をと、ぜいをつくしての造営であつた。引越の様子をみると、二条院から紫上とそれにつきそうようにして、花散里が同時に引移つた。まず車十五台、四位、五位の人達がおもに世話をした。花散里の方も供侍など、紫上とあまり格下げせず夕霧が世話をし御供をした。次に秋好中宮が、最後に、明石上が「身分の低いものは目立たないように移りたい」と思っていたが、源氏は将来中宮となる娘の生母であることを考慮して、ほかの方たちと劣らないようにして迎えた。こ

こに移ったあとのすべての作法も、あまり大きな差

別をつけず丁重にあつかわれた。このように三人の妻が同じ邸のなかに住み、妻たちの間に区別のない取扱をうけていた。源氏はそれぞれの妻のところに自由におとずれている。やがて女三宮が降嫁してきたので、六条院は四人の妻の住家となった。この二条院と東院においても六条院においても、それは源氏ただ一人のための女たちが住んでいるが、これが源氏をめぐる一夫多妻の生活である。これはそこにハレムが形成されていたともいえる。このようなハレムの一夫多妻婚は、妻たちの地位をいやしめるものであり、妻間的形態をとる一時的な、やや永続的な性関係とともに、女たちを性具にしている。だが桐壺更衣の里邸である二条院をゆずりうけたが、彼女は父の大納言のなきあと母と住んで、邸宅を所有していたので、女も財産所有権をもっていたことをわすれてはならない。なおこの六条院のハレムの存在のなかで将来中宮となる姫を育てて、源氏は子の世代にたいしては中宮の父として、孫世代にしては外祖父としての身分の保障と、一族の安定を得てい

る。

(C) 訪婚と夫方居住婚。

- (1) さきにのべたように最初の妻である正妻の葵上にたいしては訪婚におわっている。訪婚である妻間的な関係にあったものに、六条御息所と、比較的永くつづいた朧月夜がいる。そのほかに一夜妻や、短い期間の関係であった女に、藤壺宮、空蟬、軒端萩、筑紫五節、夕顔、源内侍、中川女、霧朝女、などがある。

- (2) 紫上は夫方居住婚をおこなっている。十才位から源氏と二条院に住み、成長をたのしみながら、二条院で婚姻してやがて夫とともに六条院に移った。紫上が病になったとき、病状がはかばかしくないので、源氏は心配してためしに場所をかえてみようとして二条院に移して、看病にあけて共に通している。

- (3) 訪婚から夫方居住婚へとうつつしたのは、明石上と花散里のばあいである。つぎに東院に迎えられた末摘花もそうである。また源氏が引取り花散里に世話をさせた玉鬘に、髭黒大將が六条院の玉鬘のもとに訪婚して、のちに自邸へ迎えている。またこの髭黒

大将の前北方とも、里方の父宮に引取られているるので、夫方居住婚であつたと思われる。

(4) 源氏をめぐる女たちには、妻方居住婚はない。

(5) 嫁入りの形をとつての夫方居住婚は女三宮の降嫁である。六条院に直接宮中から嫁入してのち、六条院で「三日が程は、夜かれなく渡り給ふを」とあり、興入れて三日間は朱雀院の方からも、六条院の方からも風流をつくした御贈答があつたとあるが、実際にはハレムのなかの一人である。源氏の場合はよくするに訪婚である妻問いが多く、次に訪婚から夫方居住婚へうつるケースとなる。妻方居住婚はなく、妻方居住婚から夫方居住婚となるケースも源氏をめぐる女たちのなかにはない。

この物語は、貴族社会、ある意味での特殊な世界をあつかつたものであり、婚姻のあり方についても同じと思えるが、庶民の婚姻世帯のあり方は『今昔物語』にみられる。本誌第2集の私の論文『今昔物語における婚姻関係』のなかでしめした統計表によると、単式の夫方居住婚の方が、妻方居住婚より多いほどである。平安以前の説話のなかでも説話自体

の数は少いが半々を占めている。このことは高群氏も母系の残存が父権の発達にからみ合っている時期と認めているように、妻方居住婚としての招婿婚だけでないことができる。そのとき高群氏が、室町時代から「嫁取婚」としての、夫方居住婚であるとする婚姻史の時代区分体系とは矛盾しているとみられる。今後は先驅者である高群氏の研究と、柳田氏の婚姻についての調査研究や、昭和三年刊の中山太郎氏の『日本婚姻史』などを比較し、広くながめて、この『源氏物語』で扱ったことがらを、古代女性史の流れのなかで固めてゆかねばならない。そして、高群氏が独自にもちいた純婿取婚とか経営所婿取婚とかの区別、あるいは招婿婚と嫁入婚とによる時代区分とかの恣意を訂正しなければならない。ようするに高群氏は『源氏物語』の時代に招婿婚をみいだしているが、この婿取婚は、他の貴族たちにみられたが源氏にはみられず、訪婚、夫方居住婚、一夫多妻婚があるので、この時代を招婿婚の時代とすることは、再考されねばならないようである。

『源氏物語』というすばらしい文学作品のなかに

そのころの婚姻をみたが、これが今の視点において、いやらしいものであっても、そのころとしてはあたりまえのあるべき姿であった。そこから女の立場が女の位地が高かったか低かったかを論ずることは、日本婚姻史における女の位置づけの問題である。それにしても文学としてすばらしいと、今の人がいうのは近代人として近代文学の立場から、そのころの文学を評価するのか、文学史としてそのころの文学としてのすばらしさをみとめるのか、これらのことを考えねばならないが、とにかく『源氏物語』の女たちはあまり幸せとはいえないようである。

## 月刊「家庭科教育」

七月増刊号

〃性別役割分業思想  
と家庭科教育〃

A5版三〇〇頁  
価九〇〇円

52年6月号 「家庭科ってなんだ」に答えて  
7月号 くらしを大切にすることをどう  
つくるか

8月号 家庭科教師像

9月号 家庭科教育と福祉

10月号 学校給食を考える

11月号 技術教育とは何か

12月号 教育基本法と家庭科

・年間購読料（増刊号を含む）

半年 三七〇〇円  
一年 七四〇〇円

・お申し込みは、もよりの書店又は左記へ  
〒112 東京都文京区目白台三ノ二一ノ四

家 政 教 育 社

Tel 03・945・6264  
振替 東京72382

# 木簡にあらわれた女性たち

宮 川 伴 子

## 〔一〕

昭和三六年、平城宮跡で木簡が出土して以来、各地で木簡の発見が相次ぎ、現在では東北から九州までほぼ日本全国から出土例が報告されて、史料の少ない古代史の研究に大きな役割をはたしつつある。中でも平城宮跡は戦後初めて木簡が発見された遺跡で、発掘調査が進められる中で年々新しい史料が増え、現在までの出土総数は二万数千点に達している。日本の古代律令制の中心地であった性質上、記載内容はさまざまであるが、その中に平城宮内で働き、あるいは生活していた女性のことを記した木簡がある。ここでは、平城宮内で出土した多数の木簡の中から、この女性に関する木簡をとりあげてみたい。

今まで古代における女性、特に女官に関する研究は、

角田文衛氏、玉井力氏、松原弘宣氏、野村忠夫氏等によって論じられてきた。しかし、これらの研究は、政治の舞台で重要な役割をはたした特定の女性の研究や、制度の考察である。玉井氏の論文も文献史料にあらわれる高位の女官を中心に、それが政治の動向とどのような関りをもっていたかを論じたもので、大部分を占めるその他の平城宮内で働く女性についてはふれられていない。野村氏の論文も、「女官」の概念の成立について述べられたもので、これもその具体的活動について論じたものではない。これは、古代の史料が記紀や万葉集、令の条文などごくわずかしが残っていないことを考えるとしかたのないことであって、その意味では限られた史料から当時の平城宮での女性の実態を採るには、ある程度限界があることもかもしれない。

一方、木簡については、その記載内容は各官司の帳簿、

伝票、略式の書状、物品の付札など日常の行務に関するものが多く、その点では編纂者の意図によつて改変されやすい書物などに比べて、より当時の実態を示しているといえる。しかし、木簡は当時すでに不用になつて棄てられたものが、現在遺構から出土しているもので、完形のものほとんどなく、大部分は墨が消えたり折損したりして、文字のごく一部分が残っているものである。従つて、二万数千点にのぼる平城宮木簡の中でも内容がわかるものはごく少数であつて、その中で女性関係のものに限定するとさらに少なくなる。しかし、このような状態でも、各遺構から出土した木簡をひろいあげてみることによつて、今までの文献史料だけでは明らかにできなかった女官達の実態に少しでも新しい知見をつけ加えることができるのではないか、また、女官だけでなく、どのような身分の女性が、どこで、どんな仕事を受けもつていたのかを検討することによつて、当時の平城宮内における女性の具体的な活動状況や宮内で女性が占めていた位置をある程度明らかにすることができるのではないかと考えたのである。

## 〔二〕

平城宮内での女性の活動を知るためには、木簡の記載内容を検討するだけでなく、その木簡がどんな場所から出土したかも考慮する必要がある。出土した木簡の内容からその遺構の性格がわかる場合もあるためである。

平城宮内で木簡が出土した地点は図に黒丸で示したとおりである。この中で女性に関する木簡が出土したのは一〇ヶ所で、各遺構に1から10までの番号をふつた。図中の番号に従つて出土木簡の釈文をかけた、その遺構の概要を説明する。引用した文献は次のように略して釈文の下にあげる。一―五五三（奈良国立文化財研究所『平城宮木簡一』木簡番号五五三番）。概九―四（奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報九、四頁』。年報一九六七（「昭和41年度平城宮出土の木簡」『奈良国立文化財研究所年報一九六七』）。

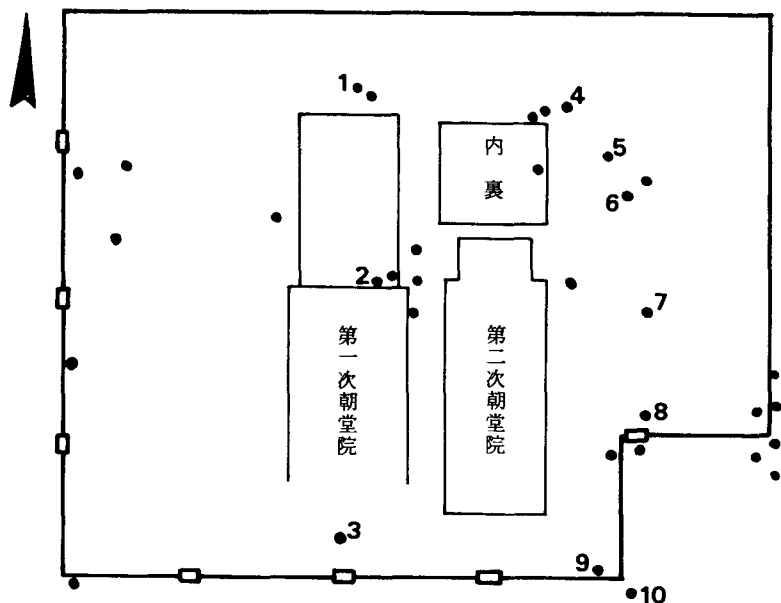
### 1. SK二一九土塙

表)寺請 小豆一斗 醬一十五升 大床所酢 末醬等

裏)右四種物竹波命婦御所 三月六日 (一一一)

### ③

SK二一九は第一次朝堂院北方にある土塙で、四〇点の木簡が出土している。この土塙は短期間使用されたゴ



平城宮木簡出土地点略図

ミ棄て穴で、埋没年代は伴出の木簡から天平宝字末年頃とされている。竹波命婦は、常陸国筑波郡出身の采女、壬生直小家主女で、称徳天皇の食膳を掌った女官である。称徳天皇は天平宝字六年以降、法華寺へ滞在しており、木簡の年代ともほぼ一致することから、天皇側近の竹波命婦が法華寺から平城宮内へ小豆など四種の食料を請求した文書で、木簡の充先、つまり木簡の出土した遺構は大膳職と推定されている。

## 2. S B 七八〇二柱抜取穴

(表) □ □ 矢称万呂所〔欲知〕珠女「来□□□□」

(裏) □ □ □ □ 解申 □ □ □ □ □ □ (概九一四)

(4) 木簡が出土したのは、第一次大極殿の南面築地回廊にとりつく楼風建物 S B 七八〇二の柱抜取穴で、一六個中一一個の柱抜取穴から合計二四三点の木簡が出土している。木簡は S B 七八〇二の廃絶時に、他の遺物と共にその柱抜取穴に投棄されたもので、その年代は伴出の木簡の内容から天平勝宝五年以降とされている。同時に出土





G(表)五十上女

玉虫

(裏) □□  
〔八カ〕上

(二一六八)

H

□□□  
子力目虫

〔君カ〕  
□□

(二一六九)

I

□女  
春日村

□女〔鮑浪カ〕  
□□村

(二一七〇)

J

大津女

(二一七一)

K

□春日女

(二一七二)

L

真濱女

(二一七三)

M

〔土師カ〕  
□□女六人米二石七斗八別四斗五升

(二一七六)

N

飯五斗 塩一百顆 用物  
真浜女 板野

(二一九六)

O(表)

豆支女人給

(裏)

□

(二二〇四)

〔□□□□女女

P(表)□女女五五五五

〔侍〕  
右九人内□□□□幸

□□□仕仕

〔私郎カ〕  
〔奈布女カ〕  
□□□□□□□□

□□□□

(裏) □□千千□千千之

(二一五五三)

Q  
□□女

〔讀岐カ〕  
□□

(二一六三六)

SK八二〇は第二次内裏外郭東辺の築地より約四〇m西にある土塙で、方約四m、深さ約二・三m、底の遺物堆積層から一八四三点の木簡が出土した。ゴミ棄て穴として使用されたもので、不用品やゴミを一括投棄し、一時に埋め戻したらしい。その年代は木簡の年紀から天平一九年をそう遠くへだたらない時期とされている。遺構の性質からして、出土木簡は他の場所から運ばれたと考えるより、周囲で使用されたものを廃棄したと考えられる。LとNの「真浜女」、Dの「八上采女」とGの「八上」は同一人物と思われる。Nの「板野」は、阿波国板野郡出身の板野命婦で、正倉院文書に散見し、天平一七年正月外従五位下に叙せられた粟凡直若子と同一人物かとされる。Iについては、春日村・鮑浪村にはともに離宮があり、天平勝宝二年に東大寺へ進上した官奴婢の中に両村の常奴婢の名が見えており、この木簡の某女も同じく両村の婢で離宮の雑役に従事したものと推定されて

いる。Pについては、「右九人内□□」〔私部カ〕〔采布女カ〕の部分が本来の文字で、あとの文字は木簡が不用になつて習書に利用された時のものとされている。

# 5. S D 二七〇〇溝

A 〔采女司カ〕  
□□□□

(二一二〇九五)

B 豎子所六人 奴 〔物カ〕  
□□一□ 一人 子祖父  
荒□ 眞木 □當 〃

牧手女 〃  
逃亡六人 奴三人 粟男 〃  
子石 牌三人 益万呂 〔益カ〕  
□万呂女 〃  
□万呂 〃

〃今□治□□□□□□〔毛カ〕〔返カ〕

(二一二〇九九)

C 官春祭五日 後宮祭六日

(二一二一〇五)

D 〔表〕□□□□□會□

(二一二一二三)

E 〔裏〕□□ □眞虫

(二一二一二八)

F □龍□〔女カ〕

(二一二一二九)

S D 二七〇〇は幅二・六m、深さ一・五mの玉石積の南北溝である。平城宮東部における基幹排水溝として使用されており、この調査では三五mにわたつて検出され、二九〇点の木簡が出土した。溝の埋土は時代順に層をなして堆積しており、各層からはそれぞれ天平から延暦までの年紀をもつ木簡が出土している。ここにあげた六点のうち出土層が知られるものは、Bが第Ⅰ層(天平宝字年間)、Cが第Ⅰ層(延暦年間)である。この溝からは他に木工寮、宮内省、典膳などの語が記された木簡が出土しており、内容的には宮内関係の名辞の多いことが指摘されている。

# 6. S D 三〇三五溝

A 百依女御「一」

(二一二三三八)

B 三富女御「一」

(二一二三三九)

C 〔表〕毛美良女「一」

(二一二三四〇)

D 〔裏〕袖女「一」

(一一一四一)

(一一一三四一)

(一一一四四)

(一一一四四)

(一一三四四)

三  
三  
三

(二一三四六)

裏  
「  
」  
□  
繫  
小

(二一三四八)

(一一三四九)

(一一一三五〇)

(一一三五)

(一一一三五二)

(一一一三五三)

(二一三五四)

昭和三九年からの一連の調査でさらに東へ張り出した東

院があつたことがわかつた。調査区の中央に大きな二基

の井戸がある。SD三〇三五は、西の井戸から南へ延び

る排水溝の西4 mの位置にある南北溝である。調査地区

外へ続いているため、南半部は調査されていないが、途

中から水があふれて土壇状に広がり、木簡はこのたまり

から五六二点出土した。水は北から南へ流れており、木

簡は外部から流れこんできたものではなく、この地区で

棄てられたものである。この遺跡から出土した木簡によ

各也。つ貢進され、西米の寸しと共に、聖武天皇の大嘗

各地の印夏近き木が酒の材料とす。聖武天皇のとき

「この作は『源氏物語』の『夕顔』の巻に、

「造酒」などと墨書した土器が出土していることから

造酒司跡と推定されている。

7.  
6  
A  
A  
E  
·  
F  
地区

A 表縫殿食口 ☐ ☐ ☐ ☐ 合六十五人

事

裏

十一月□日宗我部淨虫□

(二一五九八)

巽一千卅六把

B (表)

雇女十五人 十一人、別七十把  
四人、別六十九把

(裏)

四月十四日領上毛野智恵

(二一六二二)

□女孺三人二升七合

C

□

□人□

□□□  
(君カ)

(二一七五七)

D

符供麻呂 米八升 右充婢長少女 (二一七七五)

E (表)

在々女

□□□  
(進カ)

(二一七九四)

(裏)

□□

□□□

(女カ)

廣川二半

眞□

F (表)

女孺

眞□

□二

御母二二

五十戸

(裏)

□□□

(二一七九八)

⑩ この調査区は6の南方に位置している。同地区からは

五一八点の木簡が出土したが、他の地区と出土状況が異なる点は、溝・土塚・井戸・建物柱穴・整地土などから数点ずつ、六ヶ所もの遺構から出土していることである。これは木簡がそのつど破棄され、埋められたためとされている。この地区では木簡の出土遺構を一つ一つ書き入れることができないので、調査地区全体を一括して7とした。

先にあげた六点の木簡のうち、D・Eは整地層、Aは溝の底から検出された柱穴の掘り方から、Fは土塚から出土しているので、この地区では使用廃棄されたことはまちがいない。CはSD三一五四と名づけられた溝から出土しているが、遺構図をみると北の端は調査地区内で消滅しているので、この地区の水も南へ流れるとすると、やはりこの地区において破棄されたものと考えることができる。Bの出土したSD三二九七は、何かの区画の施設としての性格をもっているらしいが、調査地区を南北に貫流しているため、ここから出土した木簡は、外部から流れこんできた可能性がある。

この地区から出土した木簡は記載内容がさまざまで、しかも断片的なものが多いためその性格がつかみにくい

が、一応まとまったものとして縫殿関係のものがあげられる。

8. SD四九五一溝

A(表)主殿寮御炬車持□□□  
真木 子□女 吉末呂||

||又吉末呂

(裏)婢□□□酒虫女 多比女 名吉女 六月五日||

||大属衣縫連大床<sup>①</sup> (年報一九六七)

B(表)□虫女  
右四人 記

(裏)□常 (概六一三)

⑫ 東面南門の遺構を含む地域。東面南門は、東一坊大路が宮の張り出し部(東院)につきあたる場所に南面して建てられていた。SD四九五一は宮内から南へ延びる溝で、東面南門を迂回して宮外へ流れ出し、東一坊大路の西側溝となる。従ってこの溝から出土した木簡は、北方で廃棄されたものが流れてきたとも考えられるが、同地区からは他に門の出入に関する木簡が出土しており、Aはその内容からみて同じく門の通行に使用されたとみて

よいので、むしろ、この東面南門の出入に際して不用になったものが溝に棄てられたとみた方がよいだろう。Bについても名前を書きあげているので同様のものとも考えられるが、釈読できる文字が少ないので、断定することはできない。

9. SA四一二〇―Aの雨落溝

A(表)圓方女王

図書□□王□

(裏) 参位□□□  
□□□<sup>[上カ]</sup>

参位□□ (概四一七)

B 田女王位分 (概四一八)

C 四品長谷内 (概四一七)

D 吉備命婦 ( )

⑬ 場所は平城宮の東南隅にあたる。木簡が出土したのは宮の南面大垣SA四一二〇―Aの北側の雨落溝で、その数は合計一三一四〇点にのぼる。大部分は削り屑であるが、内容的には式部省関係の文書が多く、特に官人の考課に関し、年令や本貫地と共に前年度の考課(勤務評定)

の結果を記したと思われる木簡が多数出土したことが目立つ。木簡の年紀は神亀五年から宝亀元年のものがある。ここにあげた木簡のうち、Aの圓方女王は長屋王の女で天平宝字八年一〇月従三位、神護景雲二年正月に正三位に任ぜられ、宝亀五年一二月に薨じている。Cの長谷内親王は、長谷部内親王（泊瀬部皇女）のことだとすれば、天武天皇の皇女で靈龜元年正月に四品だったことが続紀にみえ、天平九年二月に三品を授けられている。Dを除き位階や官職名を記してあるので、これらもやはり他の木簡同様それぞれの女性、あるいはその下についていた官人の選叙考課に関するものであらう。

#### 10. SD三九三五溝

孺縣廣刀自

（概四一七）

SD三九三五は東一坊大路の西側溝で、木簡は宮の南面大垣の南から出土した。従って正確に言えば宮外になるが、宮にごく近い場所なので宮内から流れ出した可能性もあり、宮内木簡と同性格と考え一応とりあげた。木簡は原型をとどめていないが、もとは「女孺縣廣刀自」

とあつたと思われ、聖武天皇夫人の縣大養廣刀自のことであらう。<sup>15)</sup>

#### 〔三〕

以上、平城宮内で出土した女性関係木簡とその出土遺構の概要を述べてきた。次に各木簡の検討に移るが、遺構と出土木簡が全く無関係のものは平城宮内における女性の活動を考えるうえであまり意味がないと思われるので、<sup>16)</sup>木簡と出土遺構の間に関係があると思われるものを取りあげる。図中の番号でいえば2、4、6、7である。ただ、2については、記載された女性は姓のないことから婢の可能性が強く、あるいはSB七八〇二麿絶後の宮造営現場で働いていた女性とも考えられるが、前にも述べたように内容が断片的で性格がはっきりしないので、この木簡については一応保留しておく。

次に4（SK八二〇）出土の木簡は、一七点と数が多く、内侍、命婦、采女など女官の名称が目立ち、天皇に近侍する後宮的色彩が濃い。その中には板野命婦のように文献史料に名前の見える女性もあり、女官の中でもかなり身分の高い部類に属するようである。しかし一方では、婢と思われる女性もこれらの女官以上の人数が認め

られる。この中には4・GやNのように特定の女官と組になったものがあり、これは各々の女官の下で働いていたものと思われる。4・Qもおそらく同じものであろう。SK八二〇からは他に内裏の門を守護する西宮兵衛に関するものや、贄の木簡がある程度まとまって出土しており、内裏外郭内という遺構の位置からいってもこれらの女性関係木簡は後宮的色彩をもつものと考えてよさそうである。

次に6 (SD三〇三五) の木簡である。ここも一七点とまとまった数が出土しているが、これらはすべて姓のない女性名を記していること、大きさが縦七・八cm、幅一・五・三cmの小札であることが共通しており、同じ目的のために使用されたものと思われる。このSD三〇三五を含む地区は、前にものべたように造酒司に比定されており、この女性達も造酒司で働いていたものと思われる。ただ、異筆で数量が記され、名前と共に「赤裙」「麻」「御」などと書かれているところを見ると、酒造りにたずさわったというより『平城宮木簡二 解説』にあるように、女性達の縫裁数量を記したものとみた方がよいかもしれない。ただし職員令では造酒司には縫女は配

属されていない。姓がない場合は婢と考えるのが普通であるが、この場合、木簡が小さく、文書というより覚書のようなものとも考えられるので、必ずしも婢と限定してしまう必要はないと思われる。しかし、婢ではないとしてもそれほど身分の高い女性ではなく、各官衙での下働きのようなごく身分の低い女性達と思われる。

7 の地区は先にも述べたように木簡の出土遺構が六一ヶ所にもわたる。確実にこの地区で廃棄されたと推定できるものは7・A・D・Eの三点であるが、先にのべたように7・Cもこの地区内で廃棄されたと考えてよい。この地区からは他に「縫殿九人嶋身」(二二二七二二)

「縫殿宿人火長口 額田部」(二二二七二三)「蟪娘侍縫殿」

(二二二六九八)と書かれた木簡が柵の柱掘方や土坑から出土しており、7・Aとあわせて縫殿関係のものとしてまとまっている。この縫殿について「蟪娘侍縫殿」の例では具体的な場所(あるいは建物)を示しており、それは他の二点も同様に解釈してよいと思われる。従って縫殿は縫製の仕事をする場所(建物)をさすと考えられる。この縫殿と縫殿寮の関係については後で述べる。

次に女性関係木簡の内容をみると、7・A・C・Dは



食料の支給に関する文書である。71Dの充先は婢長少女であり、木簡中の「米八升」も婢の食料として支給されたものであろう。71Aについても責任者が女性なので、文中の「六十五人」も女性と思われる。そうするとこの地区では非常に多くの女性が働いていたことになり特に六五人分もの食料を一括して請求するような官衙として縫殿はふさわしい官衙である。

ところが、今の規定で縫製にあたる人員を定めているのは、大蔵省縫部司<sup>17</sup>だけで、縫殿寮は男官のみで構成され、後宮の縫司も縫製のための定員はない。しかし令集解縫司条に「此司无<sup>18</sup>女孺<sup>19</sup>者 氏女采女分<sup>20</sup>配諸司<sup>21</sup>之外、皆惣在此司也」とし、同じく集解所収の古記も「充<sup>22</sup>諸司<sup>23</sup>外、餘氏女、皆置<sup>24</sup>此司<sup>25</sup> 即顯正官耳」とあることから、後宮十二司に配属された残りの女孺は縫司に置かれて裁縫の仕事に従事していたものと思われる。縫殿寮に縫女の定員がついていないのは、松原氏の指摘されたように、縫殿寮が本来内廷の女性統率官司という性格をもっていたためで、そういう意味では縫殿寮自体が衣服の縫製にたずさわったわけではなく、縫司などで実際に裁縫に従事する氏女（女孺）の統率はもちろん、それも含めた後

宮十二司の女性全体を統率していたのであろう。従って、7の地区で検出された官衙は実際に多くの女性が仕事に従事している場所であって、縫殿寮そのものではないと思われる。その意味で、この地区から出土した四点の木簡がすべて「縫殿」と記され、「縫殿寮」とはなっていないことに注目する必要がある。

この他に、ある程度まとまった点数の女性関係木簡の出土した場所に5（SD二七〇〇）がある。SD二七〇〇は、前にも述べたように平城宮東部における基幹排水溝であって、ここからの出土遺物は、直接出土地点に棄てられたとみるより各々の官衙で排水溝に棄てられたものがSD二七〇〇に流れこんできたと考えた方がよい。そこでこの木簡が出土地点の北・南のどちらから流れこんできたかということになるが、一体に平城宮の地形は北から南へ傾斜している。従って木簡は出土地点より北で廃棄されたと考えられる。そこで5の北方で木簡が出土した遺構を探すと土塙SK八二〇（4）がある。この4と5の出土木簡の内容を比較してみると、かなり共通した点が認められる。先に4（SK八二〇）の木簡について後宮的色彩が濃いことを述べたが、5（SD二七〇

○「出土の木簡には「後宮祭」と記されたもの(51C)がある。51Dの「婦宣飯炊」は上下が折損しているが、もとは「命婦宣飯炊」だったと思われる、41Aの「□廿二日依相見采女宣」や41Cの「□命婦宣進黄□」と同じ「某命婦(采女)宣云々」という形式のものである。その他にも「豎司所」(51B)や「采女司」(51A)といった官司名が見えるが、これもやはり、行政的な一般官司というより内廷的な性格が強い官司である。このように考えてくると、4と5の木簡は内容的に同性格であり、平城宮の地形からも矛盾はないので、これらの木簡は出土場所は違うが同じ性格のものとして一括して扱うことにする。

#### [四]

以上、平城宮内における女性関係木簡とその出土遺構の概要を記し、さらに木簡の記載内容と出土地区との関係を述べてきた。ここでこれまでのことをまとめてみると、いくつかの事実が指摘できる。

まず、女性に関する木簡の点数が非常に少ないことである。平城宮全体では二万数千点に及び木簡が出土して

いるにもかかわらず、ここにとりあげたものはわずかに五六点にすぎない。もちろん総数二万数千点といってもその中で記載内容がある程度推定できるものはごくわずかである。しかしそれにしても五六点というのは非常に少ないと言わざるを得ない。

次に、平城宮内の木簡の出土地点からみると、女性関係木簡の出土地点にかなりかたよりが見られることである。現在平城宮内はほぼ二〇%近い面積の調査を終了しており、木簡はそのほとんどの地区から出土している。それに対し、女性関係木簡の出土地点は全体的に宮の東半部に片寄っている(図参照)。これを木簡と出土遺構の間に関連があるものに限定するとその地区はさらに限定され、東院地区の西辺部のごく狭い地帯に集中してくる。

さらに、この地域の女性関係木簡は前に検討したように4(SK八二〇)と5(SD二七〇〇)を一括して考えると、その記載内容からそれぞれ性格の異なった三つのグループに分けられる。まず4及び5のグループは天皇に近侍する内廷的な要素が強い。木簡にあらわれる官司名も「采女司」「豎司所」「宮内省」(二一・二二・二六)といった内廷的な官司であって、律令官僚機構の中で発

達してきた外廷的な官司ではない。このことは、SK八二〇から出土した木簡の中に、律令制施行前からの税の形態で、天皇家の家産的性格を残した贄の付札や、宮城の門の中で最も内裏に近い門を警護する兵衛に関するものがあることからいえる。これに対し、7の地区から出土した木簡は天皇に近侍するという性格は薄い。71Aでは宗我部浄虫女が六五人もの女性を統率しており、他にも女孺(71C・F)、婢長少女(71D)など身分を示す名称が用いられているが、これは4(SK八二〇)から出土した木簡がほとんど個人名を記し、「某命婦(采女)宣云々」という文書の書式をふんだもの以外は身分や官職を示す語がほとんど見られないことは対称的である。内廷的官司という点では両者は共通しているが、4および5が天皇に近侍するのに対し、7は天皇から離れて律令官僚機構の中で実務を担当しているという違いがある。最後に6のグループであるが、これは前二者と違って出土した女性関係木簡がすべて同一目的に使用されたという特徴がある。木簡の女性の身分や職掌が明確でないため断定はできないが、他の女性関係木簡が出土していないことからみても造酒司という官衙にお

いてそれほど重要な位置を占めていたとは考えられない。むしろ雑用にたずさわっていた下働きの女性か、あるいは縫女だとしても造酒司内で臨時的な仕事をしていただと思われる。

また、この三つのグループの間には、性格の違いと共に階層差も認められる。4・5のグループが命婦のようにかなり高位の位階をもち、それぞれ婢を使用している、いわば高級女官であるのに対し、7のグループは主として女孺と思われる女性によって構成される、実務担当の一般女官等といえる。6のグループは明確ではないが、婢かあるいはそれに近い階層の女性ではないかと思われる。

以上のことをもう一度まとめてみると、まず、平城宮内で出土した女性関係木簡はその数が少ないこと。出土地点が宮内でも限られた地区に片寄っていること。さらに、出土地点によって木簡に記載された女性の性格が異なり、その間に階層の差が認められることなのである。

こうしたことから考えると、平城宮内で活動していた女性の人数はあまり多くなかったと考えられ、しかも実際の活動の場はかなり限定されて、内廷的な特殊な実務

に限られていたようである。このような平城宮における女性の位置は、家父長制に基づく当時の律令制支配の構造によるものと思われるが、その問題については今後の課題としなければならない。ただ、こゝでは、少ないとはいえ女性達もまた平城宮の運営の一翼をになつていたという実態を指摘するにとどめることとする。

① 角田文衛氏『律令国家の展開』。玉井力氏「天平期における女官の動向について」（『名古屋大学文学部二十周年記念論集』）、「光仁朝における女官の動向について」（『名古屋大学文学部研究論集Ⅰ』）。松原弘宣氏「縫殿寮についての一考察」（『続日本紀研究』一五三・一五四合併号）、「『宮人』考——天智・天武朝の後宮について——」（『続日本紀研究』一七二）。野村忠夫氏・原奈美子氏「律令官人制についての覚書——『宮人』と『女官』——」（『続日本紀研究』一九二）

② 『平城宮木簡二』に収録された木簡は、出土総数一九四二点中九二三点である。この中で内容がある程度推定できるものはさらに数が減る。

③ 『平城宮木簡一 解説』、『奈良国立文化財研究所年報一九六一』

④ 『奈良国立文化財研究所年報一九七三』

⑤ 『平城宮木簡二 解説』

⑥ 『平城宮木簡一 解説』、『奈良国立文化財研究所年報一九六四』

⑦ 『平城宮木簡一 解説』、『日本古代人名辞典』第一卷

⑧・⑨・⑩ 『平城宮木簡二 解説』、『奈良国立文化財研究所年報一九六五』

⑪ この木簡は『平城宮発掘調査出土木簡概報』⑤では表「主殿寮御炬（牌）□□□女 真木□子（娘）□女 吉末呂 又吉末呂」

裏「□古□□（牌）酒虫女 多比女 名吉女 六月五日大属衣縫連大床」と続んでいる。また佐伯有清氏は『古代氏族の系図』（学生社刊）で表「主殿寮御炬（牌）□□□女 真木□子祖父 吉末呂

又吉末呂」裏「□古阿尼（牌）酒虫女 多比女 名吉女 六月五日大属衣縫連大床」と釈読された。ここでは奈良国立文化財研究所

年報の釈文に従う。

⑫ 『奈良国立文化財研究所年報一九六七』、同一九六八。

⑬ 『奈良国立文化財研究所年報一九六七』

⑭ 『奈良国立文化財研究所年報一九六六』

⑮ 縣犬養廣刀自は天平九年二月に正五位下だったことが続紀にみえる。玉井氏前掲論文によれば女官には五位直授のものが多く、その中には采女・女孺もいる。廣刀自も夫人となる以前は女孺として出仕していた可能性もある。

⑯ たとえば、溝から出土した木簡は上流から流れてきた可能性もあり、出土地の周辺で使用され、廃棄されたとは限ら

い。

17 職員令では縫女部とあるだけで人数は定めていないが、延喜大炊寮式では三〇人分、大膳式では二六人分の食料が支給されている。

18 延喜中務式の宮人時服の項では、縫司に一〇〇人の女孺が配されている。

19 「縫殿寮についての一考察」(『続日本紀研究』一五三・一五四合併号)。松原氏はこの中で青木和夫氏の説に従って、縫殿寮の前身官司を天武朝の内命婦とされている。

20 職員令では縫殿頭の職掌を「掌、女王及内外命婦・宮人名帳・考課・及裁・縫衣服・纂組事」としている。

21 この縫殿が属している具体的な官司としては後宮十二司の縫司、縫殿寮の下部組織、大蔵省の縫部司、皇后宮の縫司などがあげられるが、そのうちのどれであるかは今後の調査にまたなければならぬ。

本稿は、家族史研究会に発表の場を与えていただいたことから作成したものである。また、作成にあたって奈良国立文化財研究所・飛鳥藤原宮跡発掘調査部の鬼頭清明氏に丁寧な御指導をいただいた。合せて謝意を表したい。

## 紹介

### 『歴史評論』一九七七年十一月号

#### 特集・古代史の諸問題

特集「古代史の諸問題」にあたって

母権の復権のために

布村 一夫

歴史考古学における集落跡と都城研究

黒崎 直

中国古代における法とその担い手達

小口 彦太

平安末期の農業慣行

荒木 敏夫

文献紹介「対談 古代文化の謎をめぐって」／村岡薫・「保存の声」一／四／石上英一

三浦命助「松前」移住論の史的意義

菊池 勇夫

歴史の眼「核廃絶・被爆者援護と統一をめぐって」

栃木 利夫

女性史ノート「ある女性史研究者の死」三好 洋子

第二回婦人研究者問題全国シンポジウムに参加して 間宮 尚子

「女性史のつどい」——第一回全国集会—— 伊藤 康子

「読書雑説」八「原水禁運動の統一」—— 上原 淳道

資料の宝庫「3」

鈴木 英一

……北海道総務部行政資料課…… 熱田 公

史料紹介「陸軍幼年学校生徒の日誌(7)」

…… 鈴木 英一

…… 熱田 公

# 晶子・その多面性

橘 宏 子

多面性を持ちあわせている女性は、非常に魅力的だとよく言われるが、まさに晶子がその人であつたように思う。

与謝野晶子を一女性としてながめる時、それは、次の歌情にもよくうかがえる。

海越えんいざや心にあらぬ日を送らぬ人と我ならんため

この歌のように、晶子が一生持ち続けて変らなかつた処生哲学をあらわす逞しい女丈夫を思わせるものもあるかと思うと、

少女なれば姿は恥じて君に倚る心天ゆく日もありぬべし  
などという物静かなはにかみをみせた純日本風な一面を持つ歌もある。

十の子と一人の母と頼みなく頼み交はすも君あらぬため

これは、なんとやさしい母の真情が心深くつたわつてくる歌であることか。

晶子を 人の人間としてながめる時、次の五つの顔をうかがうことができる。

- (1) 歌人としての面。
- (2) 詩人としての面。
- (3) 小説・戯曲・童話作家としての面。

(4) 評論家としての面。

(5) 古典研究家ないし紹介者としての面。

詩歌を本領とした晶子は、それらの業績は言うに及ばぬところであるが、評論家としても思想的な問題や、現実社会の批判も、鋭い諷刺で自由にとりあげている。

ことに女性の独立性を深く考え続けていたことは、歴史的意義を担うものであつた。

このように普通の日本人の女性の幾人分もの重要な仕事を一人で成しとげた晶子の真髄を示す歌をあげたい。

我が造る諸善諸惡の源をかへすがへすも難かにせむ

晶子の生命力ともいうべきものがはつきりうかがえ、晶子はそれをまさに実行に移して生きたしるしとして次の歌がある。

人の世の掟の上の善き事もはたそれならぬ善き事もせん

そのほか前方へ上方へと邁進する彼女の態度を明瞭にあらわす歌も多くあるが、晶子の心中には、いつも炬火がもえ盛り、自らが自らの天分を高く評価しながら心に叶つた日送りをした点が他と異なる点ではなかつたらうか。

## 女の意識

南 則 子

流れからそれた河原の隅に、大きな澄みきった水溜があつた。風が吹きはじめると小さな細波を立てて、あたかもそれが流れているかのように見える。強い風が吹くとその波は激しくなり、風の向きが変わると、波もまた向きを変えて流れる。この変哲もない水溜が、外からの条件によつて、さまざまな表情を描いて、私の胸をしめつけた。

明治時代の話であるが、炭坑で働く女は、女衞が海外に売ろうとしても不向きだったという。背中にはコブをつくり、手足は太い女たちが「ヤマは命がけの仕事じゃ、グズグズいう男は捨ててくれた」「私は戸籍をいっしょにするのはイヤだ、常に逃げられるようにしておかないと、男はノボセルから」といいきり、「人間は働かねばウソだ。働く時にその人間の良いところは見えるものだ。自分たちの仕事は命がかかっているから、信用できる相手を見つけないければ、金にならない」とさえいえたのは、労働と性愛との一致点を見出した者の信念であり、労働の厳しさに打ちひしがれたかに見えるその生きざまが、このように強固にその意識をきたえあげたのだと私は思えてならない。労働力を金にするのではなく、セックスまでも

売らなければならない生活を強いられた「からゆきさん」は、貧乏ゆえに「家計を助け、兄を男にするのだ」と外國に売られ、借金返済のために一夜に三十人もの男性の相手をしなければならなかったというが、私はこのような女の姿に生きるということの強さと重さと悲しさを知る思いである。女が生きていくことは、男と共に生きることであるのは当然のことなのだが、私はこれらの女たちの生活意識の深層に、常に「男たちを抱きしめているのだ」という意識が深く根をはっているのを感じるのである。

現代は甘えの時代であり、シラケの時代であるといわれる。その甘えやシラケの日常に身をまかせず、それから目をそらさないでみつめるとき、本物ともいえる女の姿が見えてくるのではなからうか。男性支配の社会で男性論理に身をすり寄せて生きることは、女の無恥である。しかし、だからといって安易な女性論理に追従することは知恵ある道とはいえないと思う。

暑い夏の昼下り、川のはとりで、風のまにまに立ち騒ぐ細波を見つめながら、平凡な日常性の中にうたたねしつづつある自分を強く意識し、目を覚させられた思いであつた。

# 細川ガラシア夫人

緒 方 都

人は、その生きた時代を、ついに抜けられないという思いが私にはあるが、ここに時代を抜けて生きた魅力ある女性の一人、細川ガラシアがある。

いま、熊本市黒髪町の泰勝寺（現立田自然公園）を訪れると、閑寂と静まる林の中に、細川家累代の墓が散在し、林は次第に深まって、後の竜田山へ連なる。その一角に、二代忠興公松向院、その妻の秀林院（本名玉子・洗礼名ガラシア）を祀る廟が、何れも二間四方の方形造りで並んでいる。

細川家系譜には、「秀林院殿華屋宗玉大姉」三八才、葬地不詳、御位牌は泰勝寺にありとある。これよりみると、ガラシアの誕生は一五六三（永禄六）年となるが、父は明智光秀、母は熙子の三女（または二女）である。

彼女が一六才である一五七八（天正六）年に、同じく一六才の細川忠興と結婚する。

「本能寺の変」からあとのガラシアの生き方こそ注目に価する。持ち前の賢く勝気な精神は、受け身の人生をはね返して、自分自身で納得のいく生き方を厳しく求めていく。

大坂玉造の幽閉同様の生活の中で、味土野以来心を離れない「人

生の謎」への問いかけは高まり、侍女清原や忠興を通して高山右近の信仰にふれ、キリスト教へ近づく。夫の出陣中、しかも秀吉の禁教令が出され、キリシタン大名追放の嵐が吹く中で受洗する。

九州征伐から帰館した忠興は、細川家の安泰をおびやかすキリシタン信仰を捨てさせようと、彼女ののどに刀をつきつけて迫るが、「何ごとでも仰せに従いますが、信仰だけはどうすることもできません」と答えて平然としていたという。ついには忠興は子供たちの洗礼をも許し、彼女のために聖堂をさえ建てている。信仰の自由をかちとつたのである。

そして最後は、石田三成による人質強要を拒否し、勝算のない戦いを戦い死んでいく。

散りぬべき 時知りてこそ 世の中の

花も花なれ 人も人なれ

この辞世の句にみられるように、死さえ積極的に受け入れた、生き続ける氣力を満したまゝの死であつたらしい。

当時の女性の域をはるかに越えて、キリストにめざめ、新しい宗教に生きたのはすばらしい。



# 高群逸枝さんの思い出

松下シマ

今から六十八年前の、明治四十二年（一九〇九）四月、熊本県師範学校女子部に入学した三十六名の中に、高群さんと私（旧明瀬）は、はいっていった。私は、四月三日若い兄が病死したので、傷ついた心を懷いて、一週間程遅れて入学した。

その時、ぼんやりしていた私に近づいて、何くれとなく導いてくれた人が、高群さんだった。私共はすぐに意気が合って、親しい友になってしまった。それから昭和三十九年迄離れられない心の友として、互いに便りし合い、慰め合い、励まし合ったものである。

終戦後、彼女から来た便りは、死去される一週間前五月三十日以下さったのまで入れて封書、葉書合せて三十余通あるが、新聞、雑誌等で発表された彼女の写真の切抜と、一緒に大事に保存している。彼女は文を綴る事、詩を作る事等一際優れておられたので、作文を返して下さる時、国語受持の植村亭一先生は、時々彼女の文を読んで下さった。

寄宿舎は三寮に分かれていたが、夕食後の運動時間になると、よく寮と寮との間にある花壇に出て語り合った。彼女は自然の美、殊に月の美しさを称え、愛情問題等に就て、憧れる様な眼差をして語り、私はいつも天草の美しい海について、日の出、月の出、貝掘り、水泳、波の変化等のことや、やさしい姉達の事を、あきもせず話していた様であった。

彼女は見るからに華奢な体つきで、外から見ると、何か思索的な

一風変った様な印象を与える様な格好だった。一学期の終り頃には脚氣となり、不自由な病人となられた。私は時々彼女の室をのぞきに行き、教室への行き帰りも助けてやった。その事は『今昔の歌』に記してある。それから諭示退学になられる迄の経緯は、皆様御承知の通りである。私は心に一点の空虚が出来た様で、淋しい思いをしたものであった。

翌四十四年四月、女子部は京町から内坪井の新校舎に移り、女子師範学校となった。その年の七月二十日、私と坂崎かをるさん（現吉永）と二人で、守富村に彼女を訪ねた。小笹の繁った川辺をすぎて、お家へ行った時、彼女はバイオリンを弾いておられた。私共は挨拶もそこそこに上り込んで、あれもこれもと語り合った。おやさしい御両親のおもてなしに預かり、彼女から其の後の御心境など伺って、夕方近く学校へ帰ったことを、今もはつきり覚えていいる。私としては、彼女との最後の出合であった。

師範を出られてから歩まれた道は、『今昔の歌』に詳しく記されている。彼女の長編詩『日月の上に』を私は大正九年、北支那山海関で読んだのである。私は天草で七年、山海関で三年、大連で十六年間小学校に勤め、天津に渡たり、二十一年天草へ引揚げて来た。其の時、日記類、書簡類、書籍、其の他一切の書類等、すべてを捨てて帰国したので、それ迄の物は何も残していない。以来貧乏と戦い乍ら、四男の大学進学のこと等もあって、遂に彼女と会う折はな

かつた。

三十七年一月十八日、彼女の六十八才の誕生日に、故郷松橋町で、彼女の『望郷子守唄』の歌碑除幕式があつた。私は出席して、其の時の様子を詳しく手紙した。この日の事は、小冊誌となつて、記録が残されている。

彼女の仕事が、どんなに困難な事であつたか憲三氏と心を合せ、完成される迄の事は、頂いた便りの中でも、うかがう事が出来る。

餅なしの初うどん哉おらが春

S 二十九年

わが道は常に吹雪けりさり乍ら

三十六年

着たきりで正月となる我が家哉

三十七年

そして三十八年元旦には

この葉書春の小鳥と身をなして

君が窓べにとび行けよかし

という、やさしい言葉の年賀が来た。

お二人の心がいつも一体になつておられ、種々の調査から、家の雑事迄引受けて下さつた憲三氏のお力の、如何に大きかつた事かと思ふのである。

『火の国の女の日記』と『統招婚姻』の完成する前に逝かれた彼女のなげきは大きかつたと思うが、憲三氏がそれを見事に完成なされたので、之又驚き敬う外なかつた。

四十年六月九日、憲三氏に抱かれて帰られた彼女を、水俣駅でお迎えして、橋本静子さん方での法要にお参り出来た事と、四十四年一月三十日、高本みねさん（旧河野）と吉永かをるさんと三人で憲三氏を訪ね、種々お話を伺い、秋葉山のお墓にお参り出来た事は彼女に会えた様な気がして嬉しかつた。

卯野木 盈二 編

## 高木敏雄初期論文集（上巻）

頒価 一八〇〇円

高木敏雄顕彰会  
共同刊

犬童信義 編

## 改訂・近代熊本農業年表

頒価 未定

（大正・昭和篇）

農業史研究会  
共同刊  
熊本市池田3-2-30

受贈

鹿野政直・堀場清子

## 高群逸枝・朝日評伝選15

一二〇〇円

朝日新聞社

受贈

平塚らいてう

## むしろ女人の性を礼拝せよ

八八〇円

人文書院

# 時間と空間の旅

西 川 裕 子

高群逸枝は一九一八年の初夏、単独で四国巡礼の旅に出発し、百余日の後、秋には八十八ヶ所めぐりをおえている。このころの高群

は地を這うような恋のなやみと、一方では時代の煩悶を一身にひきうけたつもりになった誇大妄想的な高揚した気分とを交互に感じていた。その後の彼女は、決して旅行家ではなく、それどころか森の

家に三十三年間とじこもって研究生活を送った。だが巡礼の地から新聞社に送り届けた「娘巡礼記」や、出世作『日月の上に』（一九

二一）、また『巡礼行』（一九二二）の他に、二十年後の隠栖時代にも『お遍路』（一九三八）、『遍路と人生』（一九三九）を書いたし、

最晩年の作である『火の国の女の日記』のなかには「巡礼の旅」<sup>1</sup>と2がある。同じ行程を文章によってくりかえし辿って、あきること

とを知らない。逸枝は最下層の放浪の世界とよぶ遍路たちのつくる一種の社会のなかに絶対的な平等と自由を見、そこから幾度も再生

するための力を汲みあげているのである。遍路の世界はまた、高群が学問の禁欲の掟をおかして、女性史の古代の彼方にまるで透けて

みえるかのように描いた原始の世界に似ている。遍路の旅を歩いているときすでに彼女は、自分のほんとうの旅は地理上の放浪ではな

くて時間をさかのぼる旅であることに気づいていたであろう。それにしてもなぜ出発しなければならなかったのか。

高群が研究生活に入る前後に、西欧では地球の向う側へと出発し、西欧とは異なる世界を発見しようとする民族学者あるいは人類学者

たちがいた。戦争による断絶と在野の学徒であった事情とによって、高群は、ながらくこれら空間の旅人たちとへだてられており、むろ

んブリフォードとマリノフスキーのあいだにおこなわれたような論争にも加わることがなかった。婚姻制度という文化人類学がとりあつ

かいような主題を歴史において、主に文献の上で研究する自分の方法の根拠を、逸枝は日本の地理的条件のもつ二重性格によって説明

しているのである。すなわち招婚姻にみられるような太平洋諸島のとてもよぶ後進性と、それを文字で記録することのできる大陸文化

の影響である。

空間と時間の旅はどのように交叉するのであろう。学問は科学であるという理由で自らその動機を語ることを控えようとするが、私は彼らと高群を此処と現在から旅立たせた戦前の時代の影響を次第

に重く考えはじめている。

## 『聾入考』をめぐつて

—— 高群は柳田を理解しなかったらしい ——

辻 照 子

『聾入考』は一九二九（昭和四）年に刊行された『三宅博士古稀記念論文集』におさめられている。それは柳田国男が前年の東大史学会例会において『婚姻制の考察』と題して講演したものを、ほとんど原形のままのせたものであるが、柳田によれば、民俗学の方法の可能性を説くために例証を婚姻習俗の変遷に求めようとしたものである（『婚姻習俗語彙』一頁）。

その後、柳田と大間知篤三との共著である『婚姻習俗語彙』の序においては、「当時、私が此意見の論拠として使用した国中の事実、実を言ふとまだ本編に採録して居るものの四分の一にも充たず、しかも多くは又聴きの精確を保し難い筆者の手を経て居た。そればかりの資料を基礎として、たとへ断定はしなかつた迄も、あれだけの主張を試みたのは大胆に過ぎて居た」と『聾入考』をふりかえっている。

ところで戦後になって刊行された『婚姻の話』の終章に『聾入考』はおさめられたが、有賀喜左衛門氏は「私から見れば日本民俗学にとって『聾入考』は古文書史学に対する宣戦布告に似た旗幟であった。『婚姻の話』に盛られた他の篇がどんなにいい論文であったとしても、『聾入考』こそは柳田にとって最も記念すべき論文であり、その内容も精密で気魄に充ちたものであったと私は今日でも確信し

ている。『婚姻の話』に収められた他の論文などと比較することもできぬ重要性を持つものであったのだから、少なくともその巻頭を飾らねばならなかつたし、この痛烈なサブタイトルこそ永久に残すべきであつたのと思う」（『一つの日本文化論』一〇二頁）といっている。『婚姻の話』のなかにおさめられた『聾入考』では「歴史対民俗学」というサブタイトルが削除されたのである。これは柳田の学問のあゆみにおける大きい変化である。

さて、このような『聾入考』にたいする高群逸校をみなければならぬ。

高群は一九三〇年に婦人論三部作（婦人論・恋愛論・日本女性史）の計画を発表し、翌一九三一年には『母系制の研究』に着手したが一九三八年刊の『母系制の研究』では『聾入考』についてはふれていない。そして刊行された『母系制の研究』を柳田に献呈し、招婿婚資料についてたずねている。柳田は返事として、『婚姻習俗語彙』一九三七年刊を高群へ送っただけである。

次に刊行した『招婿婚の研究』では『聾入考』を批判する。

柳田は『聾入考』に於て、従来からわが国に用いられてきた慣習用語を用いていると考えられるが、高群のこのたびの著作においては、『招婿婚』という用語が用いられている（招婿婚という語には

柳田は賛成しなかったが、高群は「招婿婚」「前婚取婚」「純婚取婚」「経営所婚取婚」「擬制婚取婚」「娶嫁婚」など例をあげていけばきりが無いほどの独特の用語をつくりだした。

婚姻のうつりかわりのとらえ方もこととなり、特に「招婿婚の研究」においては、「贅入考」批判がいたるところにみられる。「贅入考」批判も高群なりの解釈で行なわれている面もなきにしもあらずであるが、そのいくつかの例をみてみたい。

(1) 「つまり、柳田氏説の贅入式、嫁入式は、その性格が父権嫁取婚にはかならない。……母系とは根本的に相容れないものであり、相伴うものでもないのである」(『招婿婚の研究』三八頁)。

(2) 「柳田氏の招婿観(婿が妻家に通つたり住みついたりする形式)は、……母系時代の妻問婚——すなわち夫婦が別氏族に属し、氏族生活の建前として各自が自己氏族を離れえず、延いては当座的同居はありうるがけつきよくは別居、通い婚が原則であった時代の婚姻制を起点とする進化発展とはみず、はじめから父系制的『家』の存在を静止的に想定し、鎌倉以前すなわち武家以前にあつては、件の『家』の息子は、より自由に女と私婚の事情に入りうるが、ようやくそのことが不安視されてくると、贅入すなわち露禰の式をもって、婚姻開始日とするようになり、したがってその儀式なども盛大に執行されることとなる。……そして、この説の事実と相違しており、誤りであることは前記のとおりである」(同上四五七頁)。

(3) 「贅入と婚取とはちがう。『贅入考』では、後代の贅入行事をもつて、平安頃の婚取と同質のもの、もしくはその転化したものとしているが、贅入は婚姻開始後の婿の妻家への初入で、主として娶嫁婚(嫁取婚)に属し、婚取は婚姻開始そのものであり、すな

わち招婿婚(婿取婚)である」(同上二〇〇八頁)。

これに対応するところを『贅入考』から引用する。

(a) 「兎に角紫式部の写生した一社会には限らず、前にも同時代にも書物記録に見ゆる限りは、上流の紳士が皆さうして居た。直接に相手の女性と文通して、はゞ拒まずと見定むれば男の方から訪問する。それが婚姻の開始であつた。是と比べると我々の婚礼は嫁入とさへ呼ばれて、嫁を夫贅の家へ連れて来ることが、結婚の主たる手続であり、此際始めて夫婦が顔を知る場合も稀では無い」(『定本柳田国男集』一五七頁)。

(b) 「例の源氏物語の時世には、京都貴紳の家でも、最初から新婦を迎え取るといふことはしなかつたのである。斯うなると嫁入は決して結婚では無く、単に結婚後の或一つの手續に過ぎぬのであつたが、当今の法制は其力を以て、寧ろ新たに前代と異なつたる風儀に統一して、一部残留の慣習を蔭のものにしてしまつた。嫁の引移りに伴なふ儀式のみを挙式と名づけて婚姻の始めと認めることにした」(同上二六二頁)。

(c) 「見合ひと樽入れとの二つの仕来りよりも、更に顯著に昔の型を遺して居るのは贅入である。我々の知つて居る最も普通の例では、嫁が来てから三日目の里開きに、是と同行して正式に其実家を訪問することになつて居るが、それが後代の便宜主義から、二つの祝宴を合併したものであることは、色々の方面から証明し得るかと思ふ。……贅入は要するに贅の初入のことであつた。相手方の身内と新たに姻戚の関係を結ぶ手続きを、さういふ名で呼んだことは嫁入も同じであつた」(同上二六四頁)。

このようにくравてみると、『贅入考』において、婚姻にとまな

## 女性史研究 第1集

——特集・高群逸枝研究のために——

道	半田 たつ子
新しい高群逸枝論のために	犬童 美子
奈良時代の夫婦同居制をめぐって	緒方 和子
ベーベル『婦人論』について	中山 そみ
母たち(その1)	石原通子訳
父権と母権	卯野木 盈二訳

## 女性史研究 第2集

——特集・高群逸枝を摂取する——

風成の女たち	古庄 ゆき子
『今昔物語集』における婚姻関係	緒方 和子
——高群逸枝氏の婿入婚をめぐって——	
寄合婚	中山 そみ
高群逸枝についての聞書	光永 祥子
母権と母系——高群逸枝氏の「母系」によせて——	犬童 美子
婦争ひ	下田 ユキエ
母たち(その2)	石原通子訳
婚姻	卯野木 盈二訳

## 女性史研究 第3集

——特集・バッハオーフェン『母権論・序説』——

母から息子へ	紫 雅
母権論・序説	井上五郎訳
バッハオーフェン	大野 浩訳
バッハオーフェン	丹後杏一訳
バッハオーフェン	犬童信義訳
ギリシアの女神たち	布村 一夫
富野敬邦氏を偲ぶ	石原 通子

——『母権論・序説』の最初の邦訳者——

## 女性史研究 第4集

——特集・高群逸枝(橋本イツエ)氏を偲ぶ——

家族のゆくえ	西村 汎子
族内婚と族外婚——高群逸枝氏のばあい——	石原 通子
ききがき「高群逸枝さんの思い出」	緒方 和子
『今昔の歌』によせて	中山 そみ
「母性論争」の史的整理	山崎 万里
高群逸枝(本名・橋本イツエ)年譜稿	犬童 美子
「高群逸枝雑誌」総目次	編 立山ちづ子
あづまの女たち	脇本 登亀子
志賀島の山道で	山崎 もと
つらつらつばき	川上 淳子
フィリッピン原住民をたずねて	林 葉子
オーストラリアの社会組織	卯野木 盈二訳
母たち(その3)	石原通子訳
モルガンのこと	緒方 都
モルガン	犬童信義訳

う慣習、その残存が主にとりあげられているのに対して、『招婿婚の研究』において、高群は彼女なりの『嫁入考』のとらえ方をして、それを批判したにすぎないのではないかと考えられる。これは、まだ私の両者の読みくらべが浅いためであるかもしれないが、高群に

よる柳田理解が全面的でないようにおもわれる。とにかく、わたしはいまのところこのようにみるが、今後は、偉大なる高群と柳田の両氏をより深く学びとっていかねばならないことはたしかである。

# 芦の会

太田満恵

私共のサークル「芦の会」では「女性史研究」誌を継続購読しておりますが、ここに「芦の会」を紹介させていただく機会に恵まれました。

「芦の会」の発足は、一九六〇年二月で、去る八月二十一日十八年度目の総会を持ちました。現在会員三十五名、年齢は二十二歳から五十一歳まで、会社員、教員、学生、主婦と多様で、うち既婚者十八名の構成です。「芦の会」会則には、

## 第二条 目的

広い視野をもとう

思考し実践する人間に成長しよう

人間尊重を学ぼう

本質を見る目を育てよう

自己表現の技術を身につけよう

とうたっておりまして、安住型に陥りやすいお互いを励まし刺激しあって、遅々とした歩みではありますが、学習と自己変革に努めております。

## 第五条 会員

会の目的に賛同する人は、随時入会を認める。但し会員は女性に限る

として、女性だけの集団として、女性の持つさまざまな問題を、自力で克服することを志しております。

会員個々は、年間の努力目標を、年度当初の例会や宿泊研修で検討し、本人の納得の上できめております。今年度の二例をあげてみますと、若い二人で「着実に平和の探究」、主婦で「主婦の学習のあり方をさぐる」があります。また、会全体としても年間行動目標を立てて取り組んでいます。例えば

## 十四年度行動目標

『脱女性』にとりくもう

女性のもつ歴史的な習性である依存性、そこから派生する非生産的な心理を克服して、まず人間として豊かでありたいと願います。芦の会の目的は、会員に人間として成長を問いかけています

(会の目的・五行略……前掲)

人間としての豊かな土壌に、現代女性の花を美しく開きましよう

十八年度(今年度)は「心に誇りを持つ」を掲げることにきまり、取り組む姿勢について検討を加えている最中です。

会としては、皆の乏しい財布の中から無理のない形で拠出しあつて会館を持ち、規約にのっとって運営しています。会員のための教授資金内規もあります。役員選挙は一年任期・無記名投票で、会長一名・副会長三名・書記二名・会計二名を選びます。会報は月一回発行しております。

学習は、例会として月二回、第一と第三日曜を原則とし、他に土曜の夜を有志で、社会・生活・文学・華道に取り組んでいます。助言者をお願いしたり、相互の意見発表など多彩な活動に心を砕いています。その内容の幾つかをあげてみます。最近の三年間「人類の未来を考える」という標題で、さまざまな分野の参考書からの資料を持ち寄って、大衆の一人としての自分達が何を考え何を実践できるかを検討してみています。素人の学習の浅さをおそれながら、人類の課題を見失うまいと努めております。女性史については、新会員の基礎学習として、井上清氏の「日本女性史」を読了することになっています。そして、父母、祖父母達の生きて来た足跡をたどって、我が家の家族史を発表している会員もいます。また、自己表現の技術として、書く、話すことの学習を心懸け、作文は月一作を目標とし、文芸誌は年二回発行、弁論大会は一月例会を恒例としております。

私共にとっても、最早や過去のものとなりましたが、会の学習に外部からの妨害がありました。あのような会に入っていると嫁に貰い手がなくなる等と、親の不安をおおる人がいました。最近の入会者は屈託のない顔を並べておりますので、小さな歴史の進展を確める思いがいたします。

「芦の会」があるから、仲間と一緒に生きる意味が模索でき、いざという時厳しくとも最善の助言が得られるという信頼が、すでに十年も共に学習しつづけて来た会員個々の実感です。一時子育てで例会から遠ざかっていた主婦層が、子どもの教育・家庭の幸福のため、そして自分の生きる意味を掴みたいと、最近出席が頻繁になって来たことは嬉しいことです。結婚前の娘達より腰の落ちついた頼

もしさを感じております。

ここに十八年目を迎え、先輩諸姉の前にこの稿を起しまして、会員一同の励みとさせていただきます。

(芦の会・千葉県茂原市)

#### \*受贈\*

### オホーツクの女たち 第二号

オホーツク女性史研究会

### 無名通信

第四三号

福岡市中央区小笹四一二〇一二〇  
無名通信社

### 軌道

第一七号

別府市亀川四ノ湯  
軌道グループ



## 『むしろ女人の性を礼拝せよ』をよむ

九 谷 子

—— 平塚らいてう 新性道德論集 ——

この本は、一九一三年から一九二七年までの一五年間に発表された二六篇にのぼる評論を集めたものである。小林登美枝さんのすぐれた解題によると、この時期のらいてうは「仕事に生きる一個の女性の『個人としての生活』と、妻として母としての『性としての生活』の間に横たわる、避けがたく、越えがたい矛盾、葛藤に苦しめぬいた」という。

二六篇は、主題によつて四つのグループに分けられ、さらに発表された年月と掲載誌が、小林さんによつて解題されているので、何よりの資料となっている。

この解題の中では、日本の女性思想上に大きく残る「母性保護論争」の発端についてのべられている。大正七年、「与謝野晶子が『婦人公論』三月号に書いた一文が発端とされていますが、こゝにおさめられた『母性の尊重』を読むとき、その前駆的な論争が大正五年からはじまっていたことが分ります。」

「すでにこの論争の評価については、与謝野晶子、平塚らいてうの所論を、社会主義の立場から明快に整理した山川菊栄氏の立論が評

価されていることですが、こゝでらいてうが投げかけている女性の権利の確立という課題は、今日に生きる私たち女性にとって、なお切実な要求であることが思われます」との指摘がなされていて、首肯させられる。

らいてうが提起している問題は、「何故多くの婦人たちは一度は必ず結婚すべきものだということに、結婚が女の唯一の生きる道だということに……これが女の生活のすべてであるということに、もつと根本的な疑問が起つてこないのでしょうか」によつてわかる。

『母性の尊重』では、エレン・ケイの言葉として「結婚を避けること、或いは又、結婚しても母になるまいとすることは男子と同様個人としての女性の自由選択である」をひいて、結婚や母性について考えさせてくれる。本書の題名となつた『むしろ女人の性を礼拝せよ』は「本当の婦人解放は、婦人の家庭生活と職業生活との調和において見出さるべきもので、これは二つの生活を両立せしめ得るところの社会制度の中に求めるより外ありません」とのべていて、今もなお新しさを失っていない。

## 類別制親族名称体系の起源について(上)

W・H・R・リヴァース  
卯野木 盈二 訳

ルイス・モルガンは人類家族の進化的完全な図式を定式化することを試みた唯一の近代の著述家である。その図式は、彼が発見した類別制親族名称体系の研究にほとんどまったく基いていた。この図式によると、人類社会は完全な乱婚の状態から、漸新的な発展――

モルガンが血族家族、ブナルア婚、そして一夫一妻婚家族と名づけた三つの主な段階――によつて、一夫一妻婚によつて特徴づけられる状態へ進歩してきたのである。近年、この図式は、特にスターク<sup>1</sup>、ウエスターマーク<sup>2</sup>、クローリイ<sup>3</sup>、アンドルー・ランダ<sup>4</sup>、N・W・トーマス<sup>5</sup>から多くの反対にであつた。トーマスはモルガンの全構成をカードの家とよんだ。そして人類学において広く普及している傾向は、乱婚の状態――集團婚という術語が普通適用されたところの完全な状態であつても、修正された状態であつても――から人類社会をひきだすところの図式に反対しているとおそらくいわれる。

モルガンの反対者たちは彼の図式の異なる諸部分を見分ける試みをしようにするのではなくて、その特色のいくつかが不満足なものであるということを示して全体を非難した。モルガンの精巧な図式は二つの異なる部分に分けられることができる。一つは血族家族の存在とこれからのブナルア家族への進化を取扱っている。一方では他の部分はこの後者の家族形態自身の存在を取扱っている。この論

文では、モルガン図式の第一部分での根本的な弱点を示摘し、ついで彼の時代から蓄積されてきた知識に従つて彼の図式の第二部分を再説することに努めることが私の目的である。

血族家族とブナルア家族の両方の存在は、類別制親族名称体系の性格からモルガンによつて推論された。この体系は北アメリカ全体にわたつて見出され、おそらく南アメリカでもまた存在する。それは太平洋全体――ポリネシア、メラネシア、ニューギニア、そしてオーストラリアでひろくおこなわれている。それはインドで発見され、幾つかの典型的な実例がアフリカ――その大陸にそれはおそらく非常に広汎に分布する――から報告されている。その痕跡は世界の他の地方でも発見される。そして親縁関係はそれらの発達の初期段階で世界のすべての種族によつてこの方法で表現されてきたらしい。この体系のもつとも重要な特徴は、我々の考えによれば、人々の大きな諸集団は非常に異つた方法と、そして非常に異つた度合いで関連づけられており、同じ範疇にすべて分類されるということである。遠縁の再従兄弟に、たとえば父に与えられると同じ名称を与えられる。他方、もつとも文明化された人々によつて、同じ名称を与えられた親族者たちは類別制親族名称体系のなかにおいてしばしば嚴格に区別された。この論文で私は、この体系が原始社会の組織

と、そして特に男達と女達の間の親縁関係の原始様式に、その起源をもつと信ずる理由がいかにかそうでないかを考えることを提議する。この論文の第一部分で私は、モルガンの血族家族の存在のためにこの体系によって提供される証拠を論じ、第二部分で集團婚の条件のもとでのこの体系の起源を考えよう。

### モルガンのマライ式名称体系の性質

未分割共同体としてしばしばよばれているものと一致している血族家族の存在についてのモルガンの確信は、マライ式とよんだところの類別制の変種が体系の最も原始的な形態であるとする見解に本質的に基いていた。もしマライ式形態が名称体系の発達の上ではおそい段階であることを示すことができるならば血族家族のための完全な証拠は、類別制によつて提供されるかぎり、地におちる。そしてモルガン自身、血族家族についての彼の仮説は、全体的といえないまでも、主としてこの土台に基いていると認めた。

モルガンはマライ式名称体系をもつポリネシア社会が文化の原始的狀態のなかにあるということを想像した。そして彼は親族名称体系が、人類家族の進化の対応する原始状態を表わすと信じた。我々は今やポリネシア社会は比較的高度に発達したことを知っており、そして彼らの血族名称体系が、モルガンが想像したように太古的なものではなく、最近の変化の産物であるということを示すことは余分なことであるとおそらく思われるかもしれない。私は、しかしながら、この論題についてのいかなる研究家も、モルガンの支持者であらうと、反対者であらうと、マライ式形態を原始的なものとして

認めることを拒否し、そしてその原始性にたいする確信がこの主題に関連する多くの困難が底によこたわっている故に、その名称体系が新しいということに賛成する証拠を与えられるであらうということを見出すことはできない。

マライ式またはポリネシア式の名称体系の特殊な特徴は、親族名称の数がすくなくて各々の名称はそれに相当する広い意味がある。類別制親族名称体系の多くの形態のなかで多くの異なる名称が親縁関係のために見出されるが、その親縁関係を表わすために同じ名称が用いられている。このようにして年齢や性による差異を排除しながら、彼自身と同じ世代の一人の話し手のすべての親族者たちが同じ名称によつて話しかけられる。類別制親族名称体系のなかで普遍的である父の兄弟と母の兄弟との間の、父の姉妹と母の姉妹との間の区別は存在しない。そして彼等の子供達に対する特色ある名称の相当する欠如がある。モルガンは、後の段階で、兄弟、姉妹に相当する集團のすべての成員が無差別に結婚した社会状態——人類社会の最も原始的な段階として彼が提唱した血族家族——の残存がこの名称体系のなかにあると推測した。

類別制親族名称体系がハワイ型の方に修正したところの変化をこらわっている例をいたるところに我々が見出すことを指摘することによつて、私はこの親縁関係の名称の広い意味は後代のものであり、そして原始的でないということを示したい。私の注意は、トレス海峡の親族名称体系の研究によつて、この問題に向けられた。これらの島々で社会組織の異なる状態にある二民衆がある。両方とも父系出自であり、すくなくとも一つの場合にはその民衆は母権の以前の諸条件からおこっているという充分に明確な証拠をもつ。そし

て財産觀念の發展の高度の段階は、それらの社会的状態が原始的種類のものからほど遠いものであるということを表わすように思われる。二つの共同体の社会組織を調査すると、それらの比較的高い状態についての付加的な証拠を我々は見出す。西部諸島人の組織はトーム的であり、おそらくは比較的新しい段階にあり、絶滅した従前の二分組織についての証拠がある。東部諸島人の社会状態は恐らくまだもつと進歩して、地域的基礎をもち、そのなから発生したと思われる母權とトーデミズムの状態のいくつかの痕跡をもっている。これらの二民衆の血族名称体系を研究すると、我々は単純化の方向にある変化の諸段階を見出す。西のマブイアグ島では父の兄弟の子供たちと母の兄弟の子供達の間には差異は存在しない。そしてこれらの親類に与えられる名称はまた父の姉妹と母の姉妹との子供達に与えられる。この差異の欠如は喪失によるものであり、そして不完全な発達によるものではないということが、上世代のために使われる諸名称の状態によつてもつともらしいものになる。ここでは父の兄弟、母の兄弟、父の姉妹、母の姉妹のためのまだ明確な名称があるが、これらの差異は不鮮明となりつつある。その民衆は彼等の方法で、父の姉妹、母の姉妹の親族者に同じ名称を与え、父の兄弟と母の兄弟の親族者にたいしてさへもそうであるという明確な徴候がある。他方では東部のマレイ諸島では、父の兄弟と母の兄弟の子供達の間にもまた区別が存在する。しかしここでは、マブイアグで消滅の過程にあると思われた母の姉妹と父の姉妹の間の区別は完全になくなった。これらの主張についての充分な証拠のために、私は『ケンブリッジ・トレス海峡探検隊報告』の第五巻と第六巻の「血族」についての諸論文に言及しなければならない。この証拠は

トレス海峡のある血族名称の広い含蓄ある意味は最近の変化の産物であるということに強く賛成していると私はいえるだけである。これらの諸変化は、ハワイのそれと非常に密接している血族名称体系をつくりだすことにさらに非常にさきへすすむ必要はないだろう。そしてかくしてポリネシア式名称体系はまた最近の変化の産物であるということに賛成して一つの強い仮説が生れる。

我々が今やオーストラリア式名称体系に目を転じると、話し手よりも上世代の父、父の兄弟、母の兄弟、父の姉妹、母の姉妹の四種の親族のための区別的な名称をもつことが、証拠が示すかぎり非常に普遍的であることがわかる。同様に、次の世代では、年齢による差異を無視して、父の兄弟の子供達や母の姉妹の子供達のための一つの名称を、母の兄弟の子供達や父の姉妹の子供達のための別の称呼をもつことがたいてい普遍的であるようである。

私が出会ったところの唯一の例外は、私がこの論文で考察している観点からは、非常に有益である。その例外はクルナイ族の場合に見出される。そのほかのすべてのオーストラリア諸部族とは社会組織の型では異つているこの部族では、父の兄弟、父の姉妹、母の兄弟、母の姉妹のための別々の称呼があるが、次の世代では、対応する区別はなく、母の兄弟の子供達と父の姉妹の子供達は父の兄弟の子供達と母の姉妹の子供達と同じ名称をうけるのである。

この点において、クルナイ式名称体系はトレス海峡のマブイアグ島のそれと似ている。それはマレイ諸島では消滅している父の姉妹と母の姉妹の間の区別を保有している。

# 母たち

R・S・ブリフォ  
石原通子 訳

## 第三章 族外婚の規則（後半）

血族婚の結果として、もつとも一般的に主張される特有の悪結果は、精神的欠陥、聾啞そして不妊である。後の二つの病状はたがい矛盾するようであることが注目される。「この問題に注意をむけたすべての著者たちは、聾啞を生みだす婚姻は、繁殖力が顕著であるということと一致している」とホルガー・ミイギンド博士はのべている。その生殖力がいちぢるしく、恒常的であるので、グラハム・ベル博士は、「人種のなかの聾啞変種」の形成をもたらすといけないので気づかっている。それで血族婚を有害とする説の支持者たちは、これらの婚姻からうまれる子孫にもたらすであろう二つの弊害のうちのどちらかを、やむをえずええなければならぬ。もしも子孫が聾啞であることを強く主張するならば、彼らはふつう以上の繁殖力を承認しなければならない。もしも彼らが不妊にくるしみに彼らが滅亡させられることをのぞむならば、もはや聾啞についてなにもいわないであらう。その繁殖力のおなじ高率が、血族婚による他の先天的な病状においてみとめられるので、そのジレンマは大きくなるようである。

近親婚の想像される悪結果を論証するころろみでは、聾啞者の病

状とそれにかんする統計に最大の注意がはらわれてきた。医学の多くの有名な権威者たちは、力説の強弱はあるが、血族婚が先天的な聾啞者が生まれる重要な因子、あるいは最大の因子ですらあるとの意見をのべている。この見解をもっている現代のすべての権威者たちは、まったく先天的な事例だけに主張を制限することを注意ぶかく固執していて、出生のあとの後天的である聾啞の事例に言及しない。

けれども、前者の類の事例はたいへんまれである。何人かの昔の著述家たちは、先天性はふつうであると考えていた。ハルトマンは聾啞の事例のおよそ半分は、先天的であつたと考えた。シュマルツは、多くの先天的事例が後天的事例の二倍であるとのべさえた。われわれの知識の進歩は、その割合をたえず下けてきた。聾啞施設の患者たちが専門家たちによって綿密に検査されたときに、『先天的』と分類されるどの患者も、疑いもなくそうであるとみなすことができないこと、そしてその大多数は、耳の後天的な炎症状態のまぎれもない徴候をしめていることがわかった。それらの病状の発生範囲は、比率では若年の患者に非常に増加する。大多数が一才でお

こり、二才では三才よりも多く、そして生後の最初の数ヶ月にもっとも多数あらわれる。新生児が聾啞であり、生後四ヶ月あるいは五ヶ月もたないうちに人間の声ができこえるか、きこえないかという事実が、偶然の観察者にとつてあきらかになる。これらの事情では「子どもたちが生まれつき聾啞であるとの無教育な人びとの主張は信用するにたらない」ということがあきらかである。不衛生な状態で、そしてより貧困な諸階級のもとは、非常な大多数の事例が生ずる。炎症性の病状によつて耳から排泄物がでるのは、ごくふつうのことであり、そしてそれらについてはほとんど注意されていないのである。ポリツェル博士は、「多くの事例のうちでじゅうぶんな科学的な検査によつてさへも、その事例が先天的聾啞か、後天的聾啞かをたしかめることはできない」とのべている。この疑問は多くのばあい、死体解剖検査によつて解決されない。現代の權威者たちは、聾は大多数の事例では後天的な疾患のせいであり、そして確実に先天的な事例はきわめてまれであるということとで一致している。ラングドン・ダウン博士は、全部とはいえないが、このような事例の大多数は結核性であるとの見解をもつてあつた。最近、このような『先天的』事例の多くが微毒のせいであると考えられている。結核も微毒も、生まれつきの遺伝を論ずるさいには考慮にいれることはできないのである。真に『先天的』な事例数は、じつはきわめて少なく、それは知識の進歩とともにたえず減少しているのので、先天的の事例が存在するかどうかはうたがわしいものになる。ハンメルシュラーグ博士は、その病状にかんしては、『先天的』という用語をはぶくほうがよいであらうと考えている。どのようであつても、統計で、とくに古い統計で『先天的』とあるきわめて多くの諸事例

が、そうではないということはたしかである。

血族婚をしている親たちから生まれた子どもに、他の婚姻から生まれた子どもよりも、先天的聾啞のより大きい影響があらわれることをしめそうとする、もつとも綿密な統計報告書の価値が、きわめてうたがわしいということは上述の考察からだけでもあきらかである。それらの諸事情は、多数の事例からひきだされ、はつきりした傾向をしめしつつあつた結論を無効にするためにじゅうぶんである。だが推測される先天的な事例と血族婚との数は、双方とも少数であるので、その主張は多方面にわたる統計においてさえきわめて少数の、最少限の相違にもとづいていられる。血族婚の悪影響にかんする古い見解が、事実によつて確証されたという信念にみちびいた統計に、初期の報告書がもとづいていたことを意味しているが、じつは聾啞者の大多数が血族関係にある親たちから生まれたことをあらわしている。

聾啞についての統計は、近親婚の有害説の支持者と反対者の双方によつて、批判的分析をくりかえしうけた。フート氏の徹底的な論議の結論は、「血族婚の有害の証拠として非常な信頼をおかれている統計は、まったくあやまりであるとはいえないにしても、かなしくも誤解をまねき、欠陥がある」というのである。この学説のもつとも熱心な支持者の一人であるA・クラハム・ベル博士は、「血族婚が聾啞の原因であることを、あきらかに立証する統計をわれわれはもたない」とのべている。

血族婚の悪結果にかんする考えを諸事実の証拠によつて実証するところまで、信頼が主としておかれるのは、聾啞にかんする統計である。白痴のような、そのほかの推定される悪結果について提出さ

れる証拠は、よりいっそうたよりにならなくて、無意味であるので、この問題についての数人の主要な権威者たちの結論を引用することじゅうぶんであろう。「白痴にかんするもつとも一般の意見の一つは、この病状をうみだすもつともふつうの諸原因のうちでは血族婚であるということである。通俗な意見では、従兄弟姉妹の婚姻がかならず白痴を生むとしている。だが全問題をもつとも綿密に研究したフート氏の血族婚だけが白痴の産出に關係するのではない」という見解とわたしはおなじである。精神と肉体で健康な血統であるならば、従兄弟姉妹の婚姻に特別の危険はない」とジョージ・サベジ卿はかいている。白痴のすべての型だけでなく聾啞のすべての型についての臨床的そして学術的の双方の比類のない経験をもっていたS・ラングドン・ダウン博士は、えらばれた従兄弟姉妹の婚姻を奨励することによって、人種は大いに進歩してきたといつてよいとの見解をのべるのをつねとした。精神薄弱と白痴にかんして最高でもつとも博学の専門権威者としての名声を確立したA・F・トレッドゴールド博士は、「血族婚それじしんのなかに白痴の一つの重要な原因があるとする報告は、諸事実によつて支持されないものであるとわたしは考える」と結論をのべている。

血族婚をしている親たちから生まれた子どもは、とくに精神あるいは感覚に影響する性格の不幸によつて、あるいは『神の手』をはつきりとしめしている肉体のなんらかのひどい不具によつて、はつきりとくるしめられるだろうとの見解は、経験にたいするなんらかの懇請よりも、あるいは科学的証拠によつてこの見解を立証するなんらかのころみよりも、ずっと古いのである。それはどんな統計、調査あるいは研究よりもはるかに先だつており、このようなものか

らは、みちびきだされなかつた。そのような調査の結果に失望させられたところの、この見解の数人の擁護者たちは、科学的性質ではなくて宗教的性質のものであるこの見解の眞の基礎にまでしりぞいてしまった。この考えのもつとも熱心な主唱者であつたM・ディベイは、乱暴な報告や統計についての多くの文書をつくりだしたが、結局、血族婚に反対する論拠のおもな根拠として、それらの統計にはなく、それらの血族婚がローマ・カトリック教会によつて非難されているという事実にすがつた。その当時、耳の病氣について第一流の権威者であつたメニエ博士は、聾啞の因果關係では親たちの血族婚が重要であるとのじぶんの信念を断言するときには、カトリック教会の目にうつつたそのような婚姻の罪惡觀のほかに、じぶんの主張をたしかめる事実を引用していないのである。

血縁者のあいだでの婚姻が子どもたちにおける、おそろしい結果をともなつていふという考えは、ヨーロッパの開化されていない諸階級の人びとによるばかりでなく、世界のはとんどあらゆる野蛮人によつてもたれてゐる。アルバニアの山地住民たちに、近親相姦が必然的に聾啞をもたらしというわが国の耳科軍医の見解をうらがきしている。アレウト族は、近親婚によつて奇形が生まれるということの、つよい信者である。彼らは近親相姦の婚姻の子どもたちは、セイウチのような牙をもち、そのほか怪物のような奇形であると主張する。南アフリカのカフール族は、血族婚が白痴の原因であると考える精神病学の古い権威者たちと一致している。ウガンダのバソガ族は、近親交配での繁殖を非難するわが国の畜産家たちよりもいっそうはげしい。彼らは牛が犯した近親相姦をけしからないと思ひ、あるいはむしろおこりうる諸結果を非常におそれて、罪を犯し

たのがわかった雌牛と雄牛を、首長が危険をみこしてまで役得として牛たちを盗むまでは、けがらわしいと一晚中木にしばらくつけた。野蠻人によって近親相姦にたいする禁止を無視することによっておこるとされている子孫のさまざまな痴病ばかりでなく、罪を犯した親たちじしんも、おなじように不幸にみまわれやすいと考えられている。さらに似たような災難が、彼らのすべての親族者たちに、あるいは部族全体にまでふりかかるかもしれないのである。セレベス地方では、このような婚姻が収獲物の不足をもたらしと信じられている。ガレラリー族は、このような婚姻を地震や火山の噴火の原因とみなしている。そしてミンダナオでは近親婚が洪水をひきおこすとみられている。それらは、なんらかのタブーを侵害した結果としておこるとされやすいふうの結果である。彼らのあいだに生ずる近親婚の様式は、民族の特殊な習慣にしたがってこととなっている。たとえば、ボルネオのムールング族は、その禁止された親等について特別な観念をもっている。兄弟と姉妹のあいだの婚姻はゆるされておき、したがってそれらの婚姻による子孫はいちちるしく強くて健康であると、人びとは非常に積極的である。他方では彼らは従兄弟姉妹たちのあいだの婚姻あるいは母の姉妹、または妻の母との婚姻を恐怖をもつてみる。そして彼らはこのような婚姻による子孫は、ひどくよわよわしくて不健康であることをうたがわれない。ボオティア族では、従兄妹婚にたいする禁止は、父方の従兄妹だけである。彼らはこのような婚姻による子孫はさまざまな先天的な疾病にくるしむが、他方では母方の従兄妹の子孫はまったく健康であると確信している。同様にヘレロ族は二人の兄弟の子どもたち、あるいは二人の姉妹の子どもたちが婚姻すると、彼らの子孫はほとんど生きら

れないほどに生命力に欠陥があるが、一人の兄弟と一人の姉妹の子どもたちの婚姻からは悪結果はおこらないとかんがえている。また、ある民族のあいだでは近親のあいだのすべての婚姻がとくに幸運であると考えられている。このようにして、たとえばジャバのカラング族は、母と息子とのあいだの近親相姦の婚姻を好結果と繁栄をもたらしとして祝福されている。またアルハンゲリスの農夫は、血族者のあいだの婚姻が、「子どもたちのはい増殖にめぐまれる」と確信している。イギリス領中央アフリカの諸部族のあいだでは、姉妹または母と近親相姦を犯した男は、それによって弾丸が通らないようになるなどの奇妙な観念がある。

近親婚と血族婚の悪結果についてのふつうの信条は、たいていの野蠻人によって支持されている観念とおなじである。この考えは、科学的方法の進歩とともに、科学的仮説の形態をとるようになり、生物学者たちや医学の権威者たちによって論議され研究されたが、この考えはそれらの方法のどんな概念よりも、はるかにより古いものであり、じつさいには文化のもつとも原始的な段階から伝統的継承によってつたえられてきた迷信の残存物のようである。

族外婚の規律を説明する言説の第三の型は、ハバロツク・エリス博士、ウェスターマーク教授そしてワルター・ヒープ氏の諸見解によつて例証されたが、それは世帯の仲間の性引力が外部の者にくらべて比較的によわいということに、族外婚の規律の起原をもとめようとするものである。ずっと前にセレミー・ペンダムは「婚姻が禁止されるべきである個人たちの団体のなかでは、愛情が発展することとは非常にまれである。ある程度の意外なことや、だしぬけの新奇な印象をその感情にあたえることが必要である。欲望をいだくでも



なく、欲望を感じるでもなく、幼時からしりあつてゐる個人たちは、生涯の終りまでおなじ目でたがいをみるであらう」とのべている。雄の性衝動では、外部の者とくらべて、ふだんの仲間の比較的によわい刺激度は、興奮がそれらの投射の頻度とは逆比例するというウェバー法則としてしられている生理学的法則の一例である。だが低い刺激というのはまったく相対的であり、野蛮人の粗野で識別力のない衝動にはほとんど関係しない。文明社会と文化の現状においてさえ——われわれがそこでの心理学的資料を、もっぱら独占的にとりあつてゐる——幼少期から親密にくらしてきた人びとのあいだでは性関係にたいするすこしの嫌悪もないことは、じゅうぶん立証されている。このような幼年時代からの友好関係やあるいはなんらかの種類の性的でない友好関係も、性関係にたいする障害であるどころか、ふつうには性関係をもたらしめている。ながいあいだ『プラトニック』にとどまつていた男と女との友好関係は、ほとんどつねに婚姻におわる。われわれの社会における従兄妹の婚姻は、ふつうはこのような結合の結果である。幼年時代の仲間たちのあいだの愛は『ダフニスとコレー』、『オーカッサンとニコレット』、『ポールとヴィルジネ』、そして『ロックスリー・ホール』の数えきれないほどの多くの小説の題目となつてゐる。いっしょにそでられることが、性引力をよめるといふ觀念をひきおこす心理学的事實は、異性の友だちとの関係では、とくに性本能のめざめ以前に確立されるときには、世のならわしによつてつくりだされるような愛情が、男の性本能にまさるといふことであり、見られるように二人の性衝動が中和されるということである。清純な愛情をもつて、あるいはふだんの周囲の人びとの一人にたいするような愛着をもつて

みられてゐる仲間は、外部の者よりもたんなる性欲の対象となることはずつとまれである。彼女は愛され、愛情から婚姻をし、きずかれた友好関係そして男の性衝動は、彼女がおもわれる愛情につくわえられた唯一の要素である。それでこれらの婚姻は、すこしの恐怖のようすがないだけではなく、もつとものぞましく、ふさわしいとみられる。そして、じつさいにこのようであるが、それは永続性のある性結合の成功するのは、性欲にもとづいてではなく、友好関係と愛情にもとづいてゐるからである。そして永久的に可能であるにちがいない結合が生ずるのは、まず第一にこのような友好関係からであつて、エリス博士やウェスターマーク博士の諸説が要求するように、『異常興奮』からではない。心理状態はプラトニックな友情におけるとおなじであり、それは一般に性関係をもたらず傾向がある。男の性衝動は、もつともたやすく手にはいり、そしてすでもつとも親密な関係におちいつてゐる女にかならず集中する。そしてそのすぐ手にはいる相手からはなれるのは、『外部の女』の引力を経験するじゅうぶんな機会によつてだけである。他の引力が作用するまでは、手近かな相手を保留してすてない。引力がたたくさんやつてくるころでは、性的でない友好関係と愛情が、性関係になることはすくないらしい。また他方では引力が妨害されないところでは、たしかにそれらが性関係にかわる。

日常生活での仲間にたいする交配本能のおなじような関係は、非文化諸社会では有効である。非文化諸人種の大多數のあいだでは、おさない子どもたちを、しばしば彼らが生まれる以前に、たがいに婚約させることがふつうの慣行である。ふつうそれらの子どもたちは幼年時代から兄弟と姉妹のように、おなじ世帯のなかでいっしょ

に成長する。この習慣の今なおひろい普及は、幼年時代からのこのような友好関係が彼らの性結合をさまたげないという事実を証言している。そして、たしかに原始諸人種のあいだではこのような婚姻が、幸福、誠実そして情愛の点で、もつとも大きい成功をとまなうようである。たとえば上部コンゴ地方の諸部族のあいだでは、「ともに成長してきた子どもたちが婚姻に失敗し、そしてたがいにならうということはまれである」といわれている。幸福な土着民の夫妻は、非常に若くして婚姻した人びとである。その夫は妻について、「われわれはいっしょに成長してきたではないか？ わたしは彼女を思春期の儀式からずっとみてきたではないか？」とほこらしげにいうであろう。ボルネオの土着の諸人種のあいだでは、「若者とその養取縁組による姉妹（または逆もそうである）とのあいだの交際は、婚姻にたいするなんの障害ともみられない」。ホーゼ博士夫人とマックドガル氏は、「養取されて兄弟と姉妹として、ともに成長してきたケニア族の若い二人のあいだの婚姻のすくなくとも一例を、われわれはしっている。もちろん、これは近親相姦に反対するほとんど普遍的な感情にもとづくウェスターマーク教授の、よく知られている言説と一致することはむづかしい。……だがヨーロッパの諸都市の裏街での慣行の医学的実地調査が、類似した証拠をたくさん提供することができる。……近親相姦を注目する感情は、ある特定の本能または生まれつきの性向にもとづいた個人の無意識的な反応よりは、むしろ法律と伝統によつて各世代のなかでひきおこされた情緒あるいは感情の一例であるように思われる。兄弟と姉妹とのあいだの近親相姦の発生と、甥と伯叔母（しばしばことなつた共同体

の成員たちである）のあいだの近親相姦に反対する海タクヤ族のつよい感情は、ウェスターマーク教授の言説に致命的であると、われわれにおもわれる事実である。同時に、その感情は純粹に因襲的あるいは習慣的な根原をもつているという見解をつよくしめしている」といつている。エジプト人のあいだでは、兄弟たちと姉妹たちのようにともにそだてられてきた従兄妹たちの婚姻は一般に幸福で永続的であるが、これにはんして外部の者たちとの婚姻は、不満足で一時点であるので、すくなくとも妻を離別したことのない男はほとんどおらず、ある男は二年間に二〇回も三〇回もたびたび相手をかえているといふのがふつうであると、レーンはのべている。世界のあらゆる他の地域におけるとおなじように、シベリアのチュクチ族のあいだでは、子どもたちはしばしば幼年時代から婚姻によつてむすばれている。「子どもたちは、ともにあそびながら成長する。すこし大きくなると、彼らはいっしょに畜群の番をする。もちろん彼らのあいだのきずなは非常に強くなり、しばしば死よりもより強いものとなる。その一人が死ねば他の一人もまた悲しみのあまり死ぬか、または自殺する」。「彼女の若いころの仲間」という表現が、聖書のなかでは『夫』の同義語としてもちいられている。

近親相姦の恐怖は自然本能であるとの幻覚は、その禁止が日常生活の仲間たちの減少した性刺激と一致するという事情から、主としてわれわれじしんの社会の諸状態のなかで生じたものである。性欲は仲間のなかでは、やさしさと愛情とによつて阻止されるが、たんに性衝動からおこるのではなくて、友好関係からおこるあらゆる性関係においてそうである。だがあるばあいには、感情の一つの常態から他の感情への移行が阻止されず成しとげられるのに、禁止が適

用されているときには、精神は移行の段階にちかづくことさえゆるさないのである。したがってその移行がみられるはるか以前に、移行をさまたげる禁止が本能としてのこり、余分なものであるという自然的態度のたんなる一表現であるようにさえみえる。このように、この禁止は自然本能の外形をおびて、日常生活の仲間にたいする性欲でない態度は、たやすく自然本能と同一視される。

しかし両性のあいだの友好関係を性関係から区別するこれらの感情は、その大部分は高度文明の産物であり、そこでは友好関係がさまざまな利益をうけやすいし、性引力が差別に従属している。諸感情を野蛮人のせいにするのは心理学的な錯誤である。両性のあいだの友好関係は、もともと性的友好関係を意味したし、原始人の性欲はほとんどまったく識別をかいだものであり、野蛮人が食物として賞味するくずや汚物がわれわれには嫌悪と恐怖だけをおこさせるが、そのような諸対象物によって野蛮人がじゅうぶん満足するのである。性における選択や選択を左右する性質の識別は、非文化的な人びとの性関係または婚姻結合のどちらにおいても、ほとんどなんの役割もえんじない。婚姻結合は、ほとんど普遍的規律として、まったくべつな諸事情や考慮によつて決定され、原始人の男の性本能は仲間と外部の者との結合よりもはるかに大きくて、もっと強固である近親者の魅力的価値によつて影響をうけない。性本能にたいする日常生活の仲間の純粹に近親者としての影響は、動物におけるよりも野蛮人の性本能のはたけにたいしては、じつさいにもはや関係はない。オーストラリア土着民は、彼の自由になる機会にあるあらゆる女を強姦する。この点では彼の行為にたいする唯一のさまたげは、タブーをおかすことにある恐怖であり、彼は彼女が禁止された

婚姻階級にぞくするかどうかをあらかじめたずねる。もつとも非文化的な諸社会では、自然本能の作用によつて強制されるのではなくて、しばしばたがいに話すことさえゆるされていない兄弟たちと姉妹たちとの、もつとも念いりにつくられた分離によつて、近親相姦にたいする禁止の慣習がかたくまもられている。

原始社会の組織のもつとも基本的な原理である族外婚の規律を説明するために提出されたさまざまな仮説のどれ一つも、この規律の解明をあたえないし、決定的な反対にたいして解決をあたえていないということは過言ではない。これらの諸仮説は共通して一つの特色をもっている。それらは男の性本能のはたけをもつばら論及しており、それらの本能が支配的であり、その制度では家父長的である社会状態を仮定しているのである。

われわれが動物の諸家族は家母長的であるというおなじ観念で、原始人の諸集団の組織が家父長的ではなくて家母長的であつたと仮定する見地からこの問題を考察するやいなや、それはすぐにちがつた様相をしめす。族外婚の規律をまもることは、集団の母系的特質を保持するための本質的な状態であつた。もし女たちが彼女たちの夫たちと結合するために彼女たちの家族をさつたならば、その家族は母系的家族であることをやめるであらう。もし男たちが女たちの兄弟たちであると同時に性相手であつたとすると、父系相続が確立され、そして彼らの権威と競争が家父長的の支配をもひきおこすであらう。

母たちは原始的社会集団の基礎であり、きずなである。このようないくつかの成員たちの概念と感情のなかで、本原的に考慮された唯一の関係は、母との関係である。血族と出自とはもつばら女たちを

とおして算定される。父をとおしての血族関係は考慮にいれられないで、母にたいする血族関係だけである。このように構成された一集団では、女たちが外部の男たちにつきしたがって去り、彼女たちの集団との関係をたちきり、他の諸集団に分散することをゆるすことは、社会単位が分解することになるであろうし、社会の本質としてのその存在を構成するすべての感情と概念に対立することになるであろう。したがって、あとでみるように、家母長的構成を保持している原始人が彼らの娘たちまたは女たちのだれかがその集団から去ることをみとめるのを心から反対することはまれである。他方では男たちは、原始的で自然的な血族の直接的関係では、その集団の必須で重要な部分ではない。親族関係が彼らをとおして算定されるのではないから、男たちは集団を増大させ、子孫をつくることはできない。彼らはその集団の保護と経済的生存のために必要であり、男たちの一層の増加がたかく評価されている。だが彼らは社会的集団そのものの永続と構成にとつては必須のものではない。社会的集団は母たちと娘たちとの継承によつてなりたっており、すべての男たちは、一つの堅固な社会的単位としての集団を形成している母系的な主幹の分枝にすぎないのである。このような母系集団は、それを構成する女たちがともにとどまり、分割されないかぎり、一つの自存的単位として存続できるのである。その集団のなかの男たちが、その集団の女たちの実際の兄弟たちや息子たちであつても、集団の組織に影響しないのである。

社会組織のそれらの諸特徴は、社会組織の家母長的な形態をもっているすべての諸民族のあいだでの、人類社会の構造にかんするものとも基本的に熟知された観念であり、これらの原則の遵守を尊重

することは、彼らの社会生活の基礎である。それらはその集団の外での交婚の必要を男たちに強制しないのである。だがその集団のなかでは女たちの永住と男たちの自由との区別が確立されている。男たちの側でのその自由を使用しようとする多くの原因がある。母系集団の組織を支配する諸規律は、社会的風習よりも、制定された諸規律に一致しようとする感情よりも、はるかに強力なものである。

諸原則はその社会組織の根原である自然本能や傾向と調和していて、それらとほとんど区別されていない。原始人のあいだで、性結合がふつうおこる年令の若い娘たちが、彼女たちの母たちや姉妹たちの親密な集団をさつて、外部の人びとのなかへいくことが、心からきられてゐる。このような移住がおこったときには、かならず彼女たちの死にものぐるいの抵抗、涙の悲嘆がおこるが、それはつねにふつうのことではない。このような保守的な愛着や変化した社会的環境にたいする恐怖は、男にはないのである。男の性質と本能は、これに反して、変化や食物や冒険をさがしもとめてさまよわせる。すべての原始社会においては、娘たちが母たちのエプロンの紐に、いわば結びつけられているのにたいして、息子たちは歩くことができるようになる、ほとんど遠征に出発する。外部の女たちのよりすぐれた引力にたよる機会がなく、洗練された識別は彼の本能にまったく適応できない。狩猟者としての、生まれつきの放浪者としての独立的な男は、気質のかたまつたおちつかない流浪者である。彼の必需品がじゅうぶんにあるかぎり、彼の住み家がどこにあろうとほとんど心配しない。彼がよりよい所と予想すれば、あるいは変化をこのむといふこと以外の理由がないならば、いつでも住み家をかえるのである。彼は家庭をつくるものではない。おおくの原始共同

体では住居、小屋、テント、あるいは隠れ家は、女たちと子どもたちだけの居所である。男たちは偶然にいて、木の下や棚の下でねむる。女は家屋の建築者であり、家屋の居住者である。あらゆる動物に、食物と好機会をもとめて原野をさまようことをうながす生物本能は、哺乳動物の雌ではその母性機能の要求によって阻止されている。雄のおちつかない性質は、これらの母性機能をもたないか、またはこの本能のより未発達の結果である。それらの本能が人類社会の原始的胚種である母系集団の自然的基礎を構成しており、その原始的組織が保持されているそれらの非文化諸民族のすべての社会的概念の基礎である。というのは、女がその住居から、彼女の本能の基礎である集団からはなれることは、徘徊することと探検することが男にとって自然であるように、嫌悪することであり不自然である。

それらの諸状態が、近隣の諸集団からきた男たちと、じぶんじんの集団のなかにとどまっている女たちとの結合を自然なものにする。諸状態は、おなじ集団の男たちと女たちとのあいだの性交または交際の禁止を、近親婚に反対する規律を制定するという禁止を意味してはいないのである。だが男たちが彼らの性相手たちを、他の集団のなかにもとめねばならないという伝統的につくられた規律にまで固定した習慣が、社会的な諸規律や諸習慣の発展を支配するあらゆる法則にしたがって、彼らの性相手たちを彼らじしんがぞくしている集団のなかにもとめてはならないという照応している規律をうみだすであろう。

その性質が動物たちの諸集団に類似している諸集団の母系的な組織からおこる自然的傾向は、他の諸要素によってつめよられる。族外

婚の規律を説明するさまざまなころみは、男性的傾向の排他的な見地から問題を考察するほかに、別の重要な仮定と、社会人類学のしられた諸事実とあきらかに矛盾している仮定をすべてふくんでいる。族外婚の慣行にみちびく諸事情は、それらの諸説では成熟した諸個人に作用しているものとしてえがかれている。けれども人類文化のすべての低級段階では性生活は、性成熟にたつとすぐにはじまるが、文明諸人種よりも野蛮人のあいだでは性成熟はもっと早いのである。そして実際の成熟にたつるずつとまえてさえ、すべての野蛮人の子どもたちは、いわばほとんどゆりかごのころから性遊戲にふけることがしられており、彼らは性行為することができる年令よりもまえから、それをまねている。だから族外婚の規律と近親相姦の禁止は、それらの起原では、彼らの父たちと戦うことができるか、あるいは外部の女たちのさそいにかかりやすいか、あるいは不健全な子どもたちをつくるというような、成熟した若い男たちの行為にがんらい由来している規制ではなくて、じつにそれらの最初のころみでは育児期の訓練の規律である。メラネシアやオーストラリアの土着民のあいだでのような低い文化では、子どもたちの性遊戲にたいする年長者たちの叱責はない。子どもたちは彼らの成熟した生活のもっとも重要な機能とみなされているものの実行を、奨励さえされている。たとえばD・コリンズ氏は、オーストラリア原住民のあいだで強姦がひろくおこなわれていることを説明し、このような暴行は幼ない子どもたちのあいだでさえ、ふつうのできごととしていえる。「子どもたちでさえ、それをゲームとし、あるいは実行している。そしてわたしはしばしば、遊んでいた少女たちのさけび声をきいて、殺人がなされたのではないかとおもって、じぶん

の家から走りだが、連中みんながわたしの思いちがいを笑っているのがみられた」と彼はいつている。だがそれらのおなじ諸共同体では、もつともきびしい規制が、兄弟たちと姉妹たちとのあいだの、あらゆる親密さや日常の交際や談話さえ禁じている。そしてじつさい、それは野蛮人のあいだでの近親相姦のもつとも初期の、もつとも顕著な禁止形式である。野蛮人の男と女の双方の子どもたちは、性傾向がさいしょに彼らのなかに芽ばえるころには、まったく彼らの母たちの支配のもとにある。このばあいの事情から、おなじ母から生まれた男女成員たちのあいだの親密さを禁ずる規律が、母によつて強要されたにちがいない。そして育児期の訓練の規律が、どのように母によつて自然に課せられるようになるかは理解するのはむづかしい。若い男たちによる彼らの姉妹たちにたいするどんな乱暴も、若い女によつてひどい暴行とみなされ、そしてかならず母の助力をもとめるにちがいない。隔離した集団のなかの若い野蛮人に性本能が芽ばえてきたときに、おもに妹たちにたいしてである近親相姦の關係に反対するなんらかの禁止がもうけられるにちがいない。というのは、すべての野蛮な社会では姉たちは弟たちにたいして母の權威を分担するからである。原始社会はどこでも、姉たちと妹たちとのあいだには、するどい区別が引かれている。双方はちがった親族階級にぞくしていて、その關係はちがった名称をおびている。マラバール海岸のナヤール族は、「彼らの母にたいして特別な尊敬をいだいている。……おなじように彼らは彼らの母とおなじ地位にある姉たちを尊敬している。けれども彼らは妹たちとは、けつしておなじ部屋にいつしよにとどまらない。そして彼らはきよくたんなつつしみをまもる。」というのは妹たちは思慮がないから、

危険な事態がおこるかもしれないと彼らはいつている。姉たちにたいしてであるが、彼らの姉たちにたいする尊敬は、どんな考慮もゆるされない」。トンガ諸島では、姉たちは特別な敬服をもつてとりあつかわれ、首長はその姉の家に必ずおずおずといふことによつて尊敬をしめしている。たぶん、このような見解は、すべての原始社会の態度をその尊敬のなかにあらわしているものといえる。たとえば中央オーストラリア土着民のあいだでは、男はその妹たちと話してはならないが、その姉たちと自由に話すことには制限がないのである。たとえば姉との近親相姦の発生は、おこりそうにないとされているし、それにたいする警戒の手段がとられてはいない。正式な禁止によつて近親相姦にたいする禁止を確立しようとするなんらかの要求が第一におこるのは、妹たちについてである。このような禁止は、ほとんど自動的に課せられたものであらう。というのは、若い男たちが思春期にたつしたときに、彼らの妹たちはまだ未熟で、彼女たちの母の注意ぶかい監督のもとにあるからである。彼らのどんな性試みも一つの暴行のようになされる。だから思春期にある息子たちと妹たちとのあいだにおこるこのような關係は、母の是認なしにはほとんどおこりえなかつたであらう。

ひじょうによく似た育児期の訓練は、じつにサルにも觀察される。サルの母たちは仔どもたちに、厳格な監督をおこなっている。ステイヴンソンⅡハミルトン氏はヒヒについて、「ときどき母はその仔どもたちをこらしめる必要をかんじる。あるいは彼女が思うに、だましたり、けがさせたりするあれこれのふとどきな青二才をとつちめる必要をかんじる」とのべている。ダーウィンは、雌ヒヒによつて養子とされた若いヒヒが、他の若いヒヒたちにいじめられたと

きの雌ヒヒの「すごい怒り」についてのべている。サルの家族のなかで、母によるきびしい監督が仔どもたちにおこなわれたのをわたしは一度ならずみた。母は仔どもたちの外部との交わりをねたんで監視するだけではなく、たがいにたいする仔どもたちのふるまいを母は注意ぶかく規制する。馬のり遊びがあまりにもあらつづくなるときには、すぐに強くやめさせる。幼いものがその兄たちによつていじめられたり、らんぼうにとりあつかわれたりするときには、すぐに母によつて保護される。そしてその無礼者はたいいてい歯でかまれたり、いくつかのはげしい平手打ちできびしくしかられる。それらの諸状態では、おなじ母から生まれた雌たちと雌たちのあいだに近親相姦のたわむれがおこることはできないであろう。この事態は、野蠻人のおなじ母から生まれた子どもたちのなかで、妹にたいするどんな性暴行についても、まったくおなじであるが、幼児期と母性本態の作用の双方が人類家族ではもつと延長され、偶然の干渉であるかわりに公式化された禁止になり、禁止をあえておかしした者には疑いもなく呪咀であるという重要なちがひがある。だからそれは当座の阻止であるばかりでなく、個人の記憶のなかに、ついで伝統的な継承のなかに確立された禁止となるであろう。母の呪咀は、その効果をけつしてさけることのできない唯一の呪咀であるとわれわれの野蠻な祖先たちによつてみなされていた。

野蠻人のおなじ母から生まれた若い成員たちのあいだの性活動をさまたげる母の性質は、母たちがその息子たちの性冒険を心配する傾向がある周知のしつとの無意識的な作用によつて、強められるかもしれない。その特徴は、文明化された母たちでは、理性的な考慮によつてたいいはかくされ抑制されているけれども、彼女たち

においてさえ、息子たちの婚姻にたいしてちよつとも本気の妨害をしめすと、ときにはのべられている。そのような母の態度についてオランダのかしい百姓女とわたしはたまたま話したが、百姓女は母たちの息子たちにたいするもつともはげしい諸感情の一つであるといつた。「妻たちが夫たちにたいする以上に、母たちはかわい息子にたいしてしつとぶかい。ちよつと母の愛が妻の愛よりも大きいとおなじである。もちろん、それはむだであり、われわれはなにもいわない。だがもしも母たちがその思いどおりにするならば、彼女たちの息子たちはけつして——すくなくとも、しばらくのあいだは婚姻しないであろう」と彼女はいつた。それとおなじことが、ときどき野蠻人たちのあいだでみられる。たとえばダンス氏は、どの野蠻人たちもおなじようにその諸慣習では野卑であるニューブリテン島の土着民について、「盲目的にかわいがる年とつた母たちは、息子たちをできるだけ長くじぶんのもとにとどめることをねがっている。そうするために彼女たちは五、六才のちいさい子どもを息子のために買い、彼女が彼と婚姻できる年令になるまで彼は待たねばならない。ヤ・ヴィカはその息子のペテロのために六才ぐらいの子どもを買つたが、彼はうたがひもなくその少女が「一才か一二才になるまで待たねばならない」とのべている。マライ半島の森林のサカイ族のあいだでは、しられている愛情のもつとも強いきずなは母と息子とのあいだのものであり、息子はその母によつて、ひどいしつとをもつて注目されていると、シグノール・セルティはのべている。

近親相姦の禁止は、もともと兄弟たちと姉妹たちのあいだの關係に適用される。東南オーストラリアのディエリ族や他の諸部族のあ

いだにみいだされるような、慎重な族外婚のしくみのもつとも簡単な諸形態では、二つの交婚する階級にわかれていて、その組織は兄弟たちと姉妹たちのあいだの婚姻をさまたげるのに、親たちと子どもたちとのあいだの近親相姦にたいして、なんらの人為的障害と対立しない。ジェイムス・チャームズ師によると、ニューギニア島の沖のキワイ島では、父が彼じしんの娘を妻としてもよいが、兄弟たちと姉妹たちのあいだの婚姻は、どこでもそうであるように、大いに嫌悪されている。おなじように、ソロモン諸島のある島では、父と娘のあいだの婚姻はまったく合法的とみなされているが、兄弟と姉妹のあいだの普通の社交についてさえ、もつともきびしい禁止がある。ジャバの原住民であるカラング族のあいだでは、母と息子の婚姻はりっぱで、めでたいとされている。それでもやはり、息子と母の性結合は、文明人によってだけでなく、ほとんどすべての野蛮人種によって、兄弟たちと姉妹たちのあいだの關係とおなじように、ふつう大きい嫌悪をもつてみられている。だが原始的な人類集団での母の性質が理解されるときは、兄弟たちと姉妹たちのあいだの關係に反対する禁止を強制した家族の女首長によせられる畏敬と恐怖が、彼女じしんを近親相姦的な接近が可能である対象とすることは、ほとんどありそうにないことをしめしていることは、容易に理解できるのである。

人類の行為と衝動の社会的な諸結果を考えると、われわれがとりあつかっているものは平均的な諸効果であると推測される。その結果はおなじやかたでの、あらゆる人類精神の一定で不変的な作用の伝統の力ではなくて、統計的平均をひきおこす支配的傾向の伝統の力によって強化された表現である。あさはかな考えでは、族外

婚の規律の説明のために引用された前述の傾向は、外部の女たちにたいする選択や推定されるその他の諸傾向とおなじように、社会的結果の一樣性となりあわないとおもわせるであろう。だが考えられねばならないことは、諸説が真の原理であるかどうかであり、引用されたその他の諸説のうちのどの説によつてもなしとげられない必要とする方向や諸状態で、諸説が作用するかどうかである。あらゆる原始的な人類集団では、男たちがその性相手たちをよそでさかすということ、そして集団の女たちとの關係が、若い娘たちにたいする母の保護と母のしつとによつて妨害されるということとは、とうていありそうにない。近親相姦の關係が習慣的におこなわれ、またそれがゆるされている諸部族のかなり多くの事例がしられている。このような諸事例は、うたがいのなくもつとも初期の社会ではたくさんあった。究極の社会的結果は、確立した伝統によつて強化された支配的な諸傾向の累積した結果である。人類の発展に本質的な諸狀態の維持が、それらの諸傾向の作用に依存してきた。それは母系集団の破壊によつてこわされた。族外婚の規律を遵守しないことによつて組織が破壊されたそれらの集団は、その結果としてそれらの社会的発展がおとろえ、もつと進歩した近隣者たちにとつてかわられたのであろう。族外婚の規則が設立される本原的な諸原因は、社会的伝統によつて増強され、堅固にされるが、伝統の作用がたしかな原理に変わる。社会的習慣に固定された行為の傾向であつたものが、さらに社会組織の確立された原理にこりかたまつたのである。



女性史研究

第六集予告(七八年六月)

——特集・バツハオーフェン『母権論』をめぐる——

母権論目次……………訳・井上貴美子

『母権論』解説……………エム・コスヴェン

母権……………訳・犬童美子

婚姻と家族の成立……………K・カウツキー

エンゲルス・カウツキー往復書簡……………訳編・井上五郎

女性史研究

第七集予告(七八年一二月)

——特集・近代の女たち——

1977年11月25日印刷  
1977年12月1日発行

女性史研究

第5集

頒価 500円

(送料 1冊 120円)

編集 家族史研究会

東京事務局

東京都府中市日鋼町日鋼団地12-407布村方

福岡事務局

〒183 Tel 東京(4023)68-7503

筑紫郡太宰府町国分辻 765-20 伴方

Tel 二日市(09292)3-0663

〒818-01 家族史研究会福岡事務局

熊本事務局

熊本市池田3-2-30 犬童方

〒860 Tel 熊本(0963)54-6158

郵便振替口座・熊本13171

家族史研究会熊本事務局

共同体社